

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第556集

ほそやち
細谷地遺跡第19・20次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2010

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
(独)都市再生機構岩手都市開発事務所
(財)岩手県文化振興事業団

細谷地遺跡第19・20次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本件の歴史や文化、伝統を正しく理解する上で欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

本報告書は、岩手県盛岡市の盛岡南新都市上地区両整理事業に関連して平成20年度に発掘調査を実施した盛岡市細谷地遺跡第19・20次の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、平安時代の集落が発見されました。これまでの調査同様に同時代の住居跡のほか、方形に掘られた総柱の掘立柱建物跡や畝間状造構などが確認され、より詳しい集落の様子を窺い知ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市向中野字野原9-6ほかに所在する細谷地遺跡第19・20次の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、盛岡南新都市上地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所及び盛岡市都市整備部盛岡南整備課と岩手県教育委員会との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号はL E 26-0214、遺跡略号は第19次分がOH Y-08-19、第20次分がOH Y-08-20である。
- 4 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。

第19次調査／平成20年7月16日～10月7日／1,046m ² ／木戸口俊子・金子昭彦
第20次調査／平成20年8月1日～10月7日／856m ² ／木戸口俊子・金子昭彦
- 5 室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

第19次調査／平成20年11月1日～平成21年1月15日／木戸口俊子
第20次調査／平成20年11月16日～12月15日、平成21年1月16日～3月13日／木戸口俊子
- 6 本報告書の執筆は、木戸口俊子が行った。
- 7 発掘調査では、独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、周辺の住民の方々にご協力をいただいた。
- 8 墓石土器・刻書七器の釈文等については、石崎高臣氏（奥州市総合政策部政策企画課世界遺産登録推進室）のご指導をいただいた。
- 9 土層の上色は、『新版標準土色帖』（1992年度版：農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）によった。
- 10 各種委託業務では以下の機関に依頼した。

航空写真……東邦航空
石質鑑定……花崗岩研究会
金属製品の保存処理……岩手県立博物館
火山灰分析・プラントオパール分析・花粉分析……（株）古環境研究所
- 11 今回の調査結果は、平成20年9月13日開催の現地説明会及び平成20年度発掘調査報告書などがあるが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
- 12 調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 地理的環境	1
(1) 遺跡の位置と立地	1
(2) 遺跡周辺の地形と地質	1
2 基本層序	4
3 周辺の遺跡とこれまでの調査	4
(1) 歴史的環境と周辺の遺跡	4
(2) これまでの調査	7
III 野外調査と室内整理	8
1 野外調査	8
(1) 区割り設定	8
(2) 粗掘り・遺構検出・踏査	9
(3) 遺構の命名	9
2 室内整理	10
(1) 遺物の整理	10
(2) 遺構実測図の整理	10
(3) アルバム整理	10
IV 検出された遺構	14
1 調査の概要	14
2 堅穴住居跡	14
3 掘立柱建物跡	21
4 土坑	22
5 焼上状遺構	31
6 溝跡	31
7 敦岡状遺構	32
8 柱穴状土坑	32
V 遺物	58
1 平安時代の遺物	58
(1) 土器	58
(2) 石器	59

(3) 鉄 製 品	59
2 近世の遺物	60
VI ま と め	73
1 竪穴住居跡	73
2 挖立柱建物跡	74
3 突間状遺構	74
4 造 物	82
5 墨書き土器・刻書き土器	82
6 結 論	83
VII 分 析	88
火山灰分析	88
プラント・オパール(植物珪酸体)分析	91
花粉分析	96
報告書抄録	137

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第18図 RD431・432・438・443土坑	45
第2図 地形分類図	3	第19図 RD433・440~442・444・445土坑、P16	46
第3図 基本層序	4	第20図 RD434土坑	47
第4図 周辺の遺跡図	5	第21図 RD435~437・439・446土坑	48
第5図 細谷地遺跡調査位置図	11	第22図 RD447~449・452土坑	49
第6図 遺構配置図	13	第23図 RD450・451・453~457土坑	50
第7図 RA173竪穴住居跡(1)	34	第24図 RD458~461土坑	51
第8図 RA173竪穴住居跡(2)	35	第25図 RD462~466土坑、RZ016突間状遺構	52
第9図 RA174竪穴住居跡	36	第26図 RZ017・018突間状遺構	53
第10図 RA175竪穴住居跡(1)	37	第27図 突間状遺構(縮小図)	54
第11図 RA175竪穴住居跡(2)	38	第28図 RG080溝跡、RF011焼土遺構	55
第12図 RA175竪穴住居跡(3)、 RA176竪穴住居跡	39	第29図 柱穴状土坑群(1)	56
第13図 RA177竪穴住居跡、P25・P26	40	第30図 柱穴状土坑群(2)・(3)	57
第14図 RA178竪穴住居跡(1)	41	第31図 遺構内出土遺物(1)	61
第15図 RA178竪穴住居跡(2)、 RA179竪穴住居跡	42	第32図 遺構内出土遺物(2)	62
第16図 RB023掘立柱建物跡	43	第33図 遺構内出土遺物(3)	63
第17図 RB024掘立柱建物跡、P11	44	第34図 遺構内出土遺物(4)	64
		第35図 遺構内出土遺物(5)	65

第36図	遺構内出土遺物 (6)	66	第43図	器種別集成図 (1)	79
第37図	遺構内出土遺物 (7)	67	第44図	器種別集成図 (2)	80
第38図	遺構内出土遺物 (8)	68	第45図	器種別集成図 (3)	81
第39図	遺構内出土遺物 (9)、遺構外出上遺物	69	第46図	器種別集成図 (4)	82
第40図	遺構配置図 (第4・5・8~10・12~20次)	76	第47図	墨書き器・刻書き器集成図 (1)	84
第41図	掘立柱建物跡集成図	77	第48図	墨書き器・刻書き器集成図 (2)	85
第42図	遺構間接合土器	78			

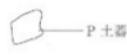
表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第7表	鉄製品観察表	72
第2表	これまでの細谷地遺跡調査一覧	12	第8表	近世陶磁器観察表	72
第3表	遺構名変更一覧表	14	第9表	土製品観察表	72
第4表	柱穴状土坑観察表	33	第10表	豎穴住居跡一覧表	75
第5表	土器観察表	70	第11表	土坑一覧表	75
第6表	石器観察表	72	第12表	墨書き器・刻書き土器一覧表	86

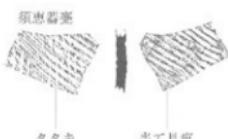
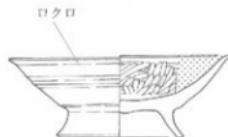
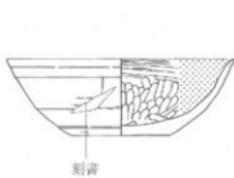
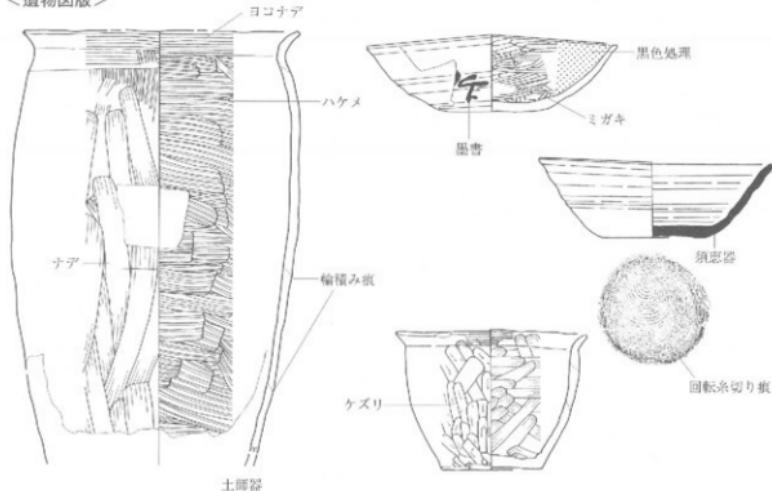
写真図版目次

写真図版 1	航空写真 (1)	104	写真図版15	RA179豎穴住居跡 (2)、 掘立柱建物跡 (1)	118
写真図版 2	航空写真 (2)、調査前風景、 旧沢跡、調査風景	105	写真図版16	掘立柱建物跡 (2)	119
写真図版 3	RA173豎穴住居跡 (1)	106	写真図版17	RD431~434・438・443土坑	120
写真図版 4	RA173豎穴住居跡 (2)	107	写真図版18	RD435~437・439土坑	121
写真図版 5	RA173豎穴住居跡 (3)、 RA174豎穴住居跡 (1)	108	写真図版19	RD440~442・444土坑	122
写真図版 6	RA174豎穴住居跡 (2)	109	写真図版20	RD445~447・449土坑	123
写真図版 7	RA174豎穴住居跡 (3)、 RA175豎穴住居跡 (1)	110	写真図版21	RD450・451・453・455土坑	124
写真図版 8	RA175豎穴住居跡 (2)	111	写真図版22	RD448・454・456・457・460土坑	125
写真図版 9	RA175豎穴住居跡 (3)	112	写真図版23	RD458~464土坑	126
写真図版10	RA176豎穴住居跡 (1)	113	写真図版24	RD465・466土坑、 RZ016軒尚状遺構	127
写真図版11	RA176豎穴住居跡 (2)、 RA177豎穴住居跡 (1)	114	写真図版25	RZ017・018軒間状遺構	128
写真図版12	RA177豎穴住居跡 (2)	115	写真図版26	RG080溝跡、P1・7~9・11	129
写真図版13	RA178豎穴住居跡 (1)	116	写真図版27	遺構内出土遺物 (1)	130
写真図版14	RA178豎穴住居跡 (2)、 RA179豎穴住居跡 (1)	117	写真図版28	遺構内出土遺物 (2)	131
			写真図版29	遺構内出土遺物 (3)	132
			写真図版30	遺構内出土遺物 (4)	133
			写真図版31	遺構内出土遺物 (5)	134
			写真図版32	遺構外出土遺物	135

＜遺構図版＞



＜遺物図版＞



I 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地のほかに南部地域を新都市として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都市を形成するために策定された事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成3年度から面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、調査を必要とする範囲を確定し、（財）岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

本遺跡第19次調査、第20次調査については、岩手県教育委員会が独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所長、盛岡市と協議の結果、平成20年度の事業として確定した。これを受け、平成20年4月1日に、（財）岩手県文化振興事業団理事長と都市再生機構岩手都市開発事務所長と、また平成20年5月1日に盛岡市長との間でそれぞれ委託契約を締結し、第19次調査（盛岡市）6,204m²、第20次調査（都市再生機構）1,314m²の発掘調査を実施する遊びとなった。その後、岩手県教育委員会より通知があり、第19次調査においては平成20年6月3日付けで面積の変更契約を行い、5,158m²の減じた1,046m²の野外調査に至った。第20次調査においては、458m²の減じた856m²に面積を変更（平成20年12月10日付け変更契約）して野外調査を行った。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

（1）遺跡の位置と立地

細谷地遺跡は、岩手県の県庁所在地である盛岡市にある。盛岡市は、1598年（慶長2年）に南部氏が盛岡城の築城に取り掛かった時から町づくりが始まった。北は八幡平市・岩手郡岩手町・葛巻町、西は岩手郡滝沢町・零石町、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は花巻市・紫波郡矢巾町・紫波町に挟まれ、平成4年に当時紫波郡だった都南村、平成の大合併（平成18年）により玉山村が加わり、総面積886.47km²、総人口約30万人の岩手県の県庁所在都市としての中核をなしている。細谷地遺跡は、この盛岡市の西側、JR東日本旅客鉄道盛岡駅より約2.7km南に位置しており、盛岡市飯岡新田及び同向中野に所在している。今年度の調査区は、遺跡のはば中央にあり、北緯39度40分37秒、東経141度8分19秒付近に位置する。零石川右岸（南岸）に形成された沖積段丘に立地し、標高は122m前後である。調査区は、前にガソリンスタンドとして使用されていたため、コンクリートなどの基礎が多く混在していた。

（2）遺跡周辺の地形と地質

盛岡市は、東に北上山地、西に奥羽山脈、北西に岩手山を望み、中央には北上川、零石川などの



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図

河川より発達した低位段丘地が拡がっている。

北上山地は、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。その主要な境界である早池峰構造帯により北部北上山地と南部北上山地とに分けられる。北部北上山地はさらに中起伏山地である外山山地と小起伏山地の玉山山地とに分けられる。盛岡市の東側は、早池峰構造帯の西縁部が伸び、高森山(626m)を中心とする高森山山地と朝鳥山(607m)を中心とする朝鳥山山地に区分され中起伏山地が拡がる。朝鳥山山地と隣接する南部北上山地に属する山地は手代森山地である。これらの山地縁辺には、中津川・梁川などの北上水系の河川やその支流により侵食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

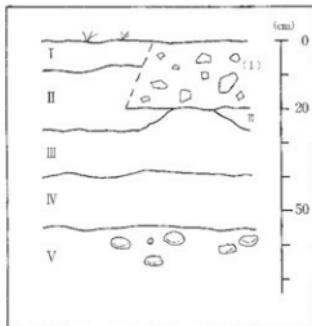
奥羽山脈は新第三紀からなる非火山地域と第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山は後者に含まれる。そして、零石川北岸には、この岩手山を供給源とする火山碎石流堆積物と火山灰層がのる台地が発達している。また、同時に発生した志和構造線などの南北方向の断層を伴って隆起した山地、箱ヶ森（866m）、南昌山（848m）、東根山（928m）などにより、繁衍近を境に零石町と盛岡市とを分けている。奥羽山脈より東流する零石川は、零石盆地を形成し山地や台地の影響を受けながら盛岡市内に入り込む。北上川との合流付近以南では、零石川の流路転換によって選ばれた上砂で形成された低位段丘と氾濫原が広く分布している。この低位段丘には数多くの旧河遺が入り込み、自然堤防状の微高地が発達している。

市内の古代遺跡は、このような微高地を利用していることが多い、本遺跡もこうした場所に集落を形成している。

2 基本層序

本調査区は、前述したように以前ガソリンスタンドがあった場所である。そのため、それに伴う整地のための全面に敷かれた砂利層やコンクリート基礎、深く掘られた根乱などが大変多く見られ、場所によっては、I層の擾乱層を剥ぐとすぐにIV層またはV層の面が出るところもあった。II層の黒色土は、部分的に残っているのみで、厚く残存している場合は、層中に十和田a降下火山灰と思われる白色火山灰を確認することができた。

- I層 10YR2/2黒褐色土、粘性あまりなし、しまり強、5~20cm強（擾乱層+旧表土）。
- II層 10YR2/1黒色土、粘性ややあり、しまりあまりなし、0~15cm、十和田a降下火山灰を含む。
- III層 10YR2/3黒褐色土、粘性なし、しまりなし、0~20cm（漸移層）。
- IV層 10YR3/4暗褐色土~10YR4/6褐色土、粘性ややあり、しまりややあり、やや砂質、0~15cm（遺構検出面）。
- V層 10YR5/8黄褐色砂質土、粘性なし、しまりなし、疊含む。



第3図 基本層序

3 周辺の遺跡とこれまでの調査

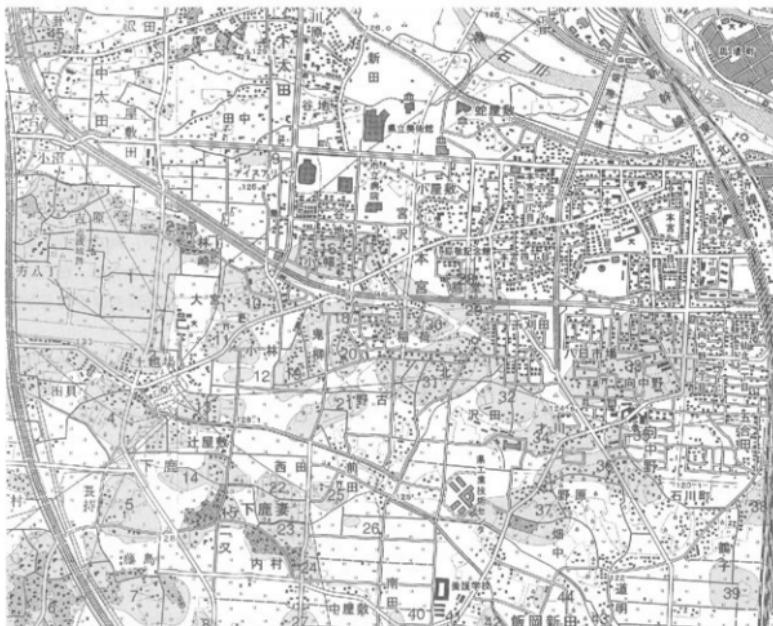
（1）歴史的環境と周辺の遺跡

岩手県教育委員会が作成した2000年度版の『岩手県遺跡情報検索システム』（盛岡地方振興局管内北部・同南部）によると、盛岡市には旧玉山村（現玉山I区）も含めて722箇所（旧盛岡市521箇所、旧玉山村201箇所）の遺跡が登録されている。第4図の周辺の遺跡図では、本遺跡周辺45遺跡（本遺跡含む）を記載した。

旧盛岡市内に限定してみると、零石北岸と南岸では遺跡の様相が異なる。北岸では、草創期の爪形

第1表 周辺の遺跡一覧表

NO.	遺跡名	性別	時代	遺伝・遺物
1	志波城跡	城柵跡	古代(平安)	門跡、堀跡、城柵立柱跡等、大漢、土器
2	林断	集落跡	平安	集落立柱跡等、糠作住居跡、土塁、土葺跡
3	新垣跡	城柵跡	調文・古代	土坎、階下穴状遺構、大漢、楕円土器、土葺跡
4	上武渕A	集落跡	古代	土匂跡
5	近垣跡	集落跡	古代	堅穴住居跡、土匂跡
6	大柳I	集落跡	古代	土匂跡、但思春
7	藤島	集落跡	調文・平安	堅穴住居跡(杏代)、楕円土器、土葺跡、圓錐形器
8	飯浜井戸跡	集落跡	古代	堅穴住居跡、獨立柱建物跡、化米室、円形窓
9	太田田B	堅穴住	平安	土匂跡
10	大宮北	集落跡	古代	堅穴住居跡、溝
11	大宮	集落跡	古代・中世	土匂、溝、土葺跡
12	小林	集落跡	古代	土匂跡
13	水門	集落跡	古代	土匂跡
14	上武渕B	集落跡	古代	土匂跡
15	二又	集落跡	古代・平安	堅穴住居跡、溝
16	小唄	集落跡	古代	堅穴住居跡、円形窓跡、獨立柱建物跡、溝
17	若沢	集落跡	古代	溝、土匂跡
18	兎沢A	集落跡	調文・古代	15.1穴遺跡、堅穴住居跡
19	兎沢B	集落跡	古代	土匂跡
20	兎沢C	集落跡	古代	土匂跡
21	野吉B	堅穴住	古代	溝、土匂跡
22	西田A	集落跡	古代	土匂跡
23	内村	集落跡	古代・平安	堅穴住居跡、獨立柱建物跡、溝、土匂跡、渠窓跡
24	中堅底	堅穴住	古代	土匂跡
25	西田B	集落跡	古代	土匂跡、渠窓跡
26	西田	集落跡	調文・古代	土匂、溝跡、階下穴、土匂跡
27	東山I	集落跡	古代	堅穴住居跡、円形窓跡
28	赤松堂A	集落跡	調文	調文丸窓跡～後進居跡跡、梯形場、土匂、木製品
29	本町堂B	集落跡	調文・古代	圓文土匂、階下穴、堅穴住居跡、土匂品、右脇品
30	船原	集落跡	古代	堅穴住居跡、溝、溝?
31	野古A	集落跡	古代・平安	堅穴住居跡、独立柱建物跡、溝、土匂跡
32	西興田田	集落跡	杏代・中世	階下穴状遺構、堅穴住居跡、墓地、方形周溝
33	台太郎	集落跡	調文・奈良・中世	圓文土匂、堅穴住居跡、墓地、圓文土匂、土匂跡
34	鹿内才月	集落跡	調文・古代	階下穴状遺構、堅穴住居跡、獨立柱建物跡、円形窓跡
35	向中野屋	城跡	調文・中世	土坎、堅穴住居跡、土匂、土匂跡、土葺跡
36	桂谷地	集落跡	古代	堅穴住居跡、獨立柱建物跡、溝、土匂跡、土葺跡
37	久多	集落跡	調文・古代	階下穴状遺構、堅穴住居跡
38	南町北	集落跡	古代	階下穴状遺構、堅穴住居跡、円形窓跡、溝
39	向中野屋	集落跡	古代	土匂跡
40	高根町I	堅穴住	古代	渠窓跡
41	下ノ根I	堅穴住	調文・古代	圓文土匂、土匂跡
42	石井	堅穴住	古代	土匂跡、但思春
43	少光	堅穴住	古代	溝?、土匂跡
44	施野	堅穴住	西世	獨立柱建物跡、土坎、溝
45	八封	集落跡	奈良・平安	堅穴住居跡、土坎、溝



(「盛岡遺跡地図(2000年度)」(盛岡市教育委員会2000)に一部加筆して作成)

1:25,000 盛岡・小岩井農場

第4図 周辺の遺跡図

文上器が出土した滝沢台地上に立地する大新町遺跡を始めとして、大館堤・館坂・前九年・宿田遺跡など後続する縄文時代早期の土器や遺構が検出されている遺跡が存在する。また、平成19年に盛岡市教育委員会により調査された薬師社脇遺跡（第6次調査）からは、早期の住居跡20棟が検出した。

縄文時代前期では平成3年に当センターで調査された上八木田J遺跡がある。この遺跡では、156棟もの堅穴住居跡が検出され、当該時期を中心とした集落跡である。

縄文時代中期では、これまでの調査で500棟以上の堅穴住居が検出されている大館町遺跡や柿ノ木平遺跡、繁V遺跡、川目C遺跡がある。山王山遺跡では、平成10年に当センターで調査した際に、28棟検出された堅穴住居跡の中で埋甕を伴う住居が2棟見つかっている。中期中葉の住居内に掘られたフ拉斯コ形の上坑に伏せられて埋設されていた土器は、60cm前後の大型深鉢で底部穿孔されている。また平成7年に調査した上米内遺跡でも埋甕を伴う住居が出土しており、中期中葉から晩期末葉までの大集落が営まれていた。

後期や晩期の遺跡は単独時期での集落形成よりも時期幅の長い遺跡が多い。前述の上米内遺跡をはじめ、中期の住居とともに晩期の集落でもあった川目C遺跡、最近では川口A遺跡第5・6次調査（5次一平成18年～20年、6次一平成19年）による成果が目覚ましい。5次調査では中期後半～晩期中葉を中心とした遺物包含層、配石遺構などが見つかり豊富で貴重な資料を提供している。

弥生時代はあまり数多くないが、弥生後期の住居や遺物が出土した堀根遺跡や向田遺跡、同時期の遺物が出土している水福寺山遺跡、繁VI遺跡、前述した川口A遺跡などがある。川口A遺跡の第6次調査では第5次調査区とは標高の異なる高い面から、土器埋納遺構と思われる土坑が検出されている。また、対岸にある高位段丘面の川目C遺跡においても弥生時代後期の陥し穴状上坑が36基検出されているなど、遺跡周辺一帯に長い時期にわたって広く営まれた集落跡の特徴を垣間見ることができる。

一方、零石川南岸では、縄文時代の遺構が確認される遺跡は少ない。本宮熊堂A遺跡や台太郎遺跡で晩期を中心とする堅穴住居跡や遺物が検出されているほか、飯岡才川遺跡など縄文時代と思われる陥し穴状遺構が確認されている程度である。この地域の主体となる時代は圧倒的に古代である。特に本遺跡の発掘調査原因でもある盛南開発によって数多くの遺跡の調査がなされ、同時にこれまでに多くの成果が報告されてきたことにより同地域における古代の集落の様子や当時の人々の生活ぶりがより見えてきた。

台太郎遺跡や野古A遺跡からは7世紀代の堅穴住居跡や上坑が見つかっているが、同時期の遺構が検出されている遺跡は多くはない。この地域は奈良時代8世紀中葉以降から増加し、台太郎・野古A・本宮熊堂B・細谷地・飯岡沢田遺跡などで集落跡が見つかっている。また、和同開序や巖手刀などが出土した太田般舟森古墳群なども同時期のものである。

9世紀、803年（延暦22年）に中央政府により東北地方に造られた城柵の一つである志波城が造営される。陸奥国の最北端に位置している志波城は、存続期間が短く零石川氾濫被害などによりおよそ10年で実質的な機能を徳丹城に移している。これらの城柵造営により、周辺の集落においても影響があったと思われる。9世紀半ば以降、集落は増加の一途をたどり、本宮熊堂B・野古A・台太郎遺跡など居住域が密に広がっている。本宮熊堂B遺跡からは、沿岸地域を示す「閉」「閉」の字が記された土師器が出土、台太郎遺跡の西側に隣接する飯岡沢田遺跡や飯岡才川遺跡では、住居だけではなく円形周溝墓群や火葬骨蔵器が見つかっているなどこれまでとは異なる性格を持つ遺構が見つかっている。また、向中野篠遺跡からは祭祀に関わるとみられる多くの磨光土器や木簡の出土、飯岡才川遺跡をはじめ小幡遺跡、本調査区が属する細谷地遺跡などからは2×2間の縦柱の掘立柱建物跡、大宮北遺跡や志波城跡に隣接する林崎遺跡などからは官衙的な規模の大きな掘立柱建物跡が検出されるなど、

より細分化された集落の性格が見えてきている。

中世に入ると、12世紀末～13世紀初頭と思われるかわらけが多量に出土した大宮遺跡、豪族居館が検出した台太郎遺跡、大規模な堀や土塁が確認された向中野館遺跡、矢盛遺跡などがある。

近世に入ると、南部氏により作られた盛岡城があり、盛岡藩政の中心となる。以後、明治維新を経て、県庁所在地としての現在の姿に至るまでは周知のとおりである。

(2) これまでの調査

細谷地遺跡は、東西約600m、南北約280m、総面積約12万m²の規模で、平成19年度までに18回の調査が行われている。昭和61年に盛岡市教委の個人宅に隣接する調査を皮切りに、盛岡開発関連では平成8年の盛岡市教委で行われた試掘調査が最初である。その後断続的に調査が行われ、昨年度18次までで総面積63,241m²が調査された。今年度も当センター（本報告書分）および盛岡市教委の調査が5次分実施され、さらに25,000m²を超える面積が加わり、遺跡の全容が明らかになりつつある。

調査された第4・5次調査（平成12・13年）では、旧河道域に配置された縄文時代の溝状の陥し穴をはじめ、9世紀後半～10世紀前半の堅穴住居跡39棟、掘立柱建物跡4棟、土坑112基、カマド状遺構、竪窓状遺構が見つかっている。堅穴住居の中で、横穴状土坑を伴う住居や燃焼部分に土師器壺1個体分の破片が敷き詰められているカマドを持つ住居が検出されている。この土師器片は外側側面にして隙間なく重ならないように並べられ、上面、下面とも二次焼成の痕跡は顕著ではなく、「カマド機能停止後に敷かれたもの」と担当調査員は判断している。また、遺物では、内面に5つの花弁をモチーフとした暗文が施された土師器壺などが出土しており興味深い。

第8次調査（平成16年）では、9世紀～10世紀初頭までの堅穴住居跡15棟の他に畠状遺構2箇所、土器焼成土坑4基が検出されている。4次・5次調査で見つかっていた土器焼成土坑（報告書では「可能性が高い」とする）がこの時の調査でも検出され、畠状遺構とともに生産遺構が確認された。

第9・10次調査（平成17年）では、これまでの調査で検出されていた時期や遺構に加えて、新たに縄文時代晚期前葉と奈良時代の集落が発見された。縄文時代の遺構は、これまで盛岡市新都市土地区画整理事業地内で本宮熊堂A遺跡や台太郎遺跡から晚期中葉以降の集落が見つかっていたが、本遺跡で見つかった遺構が最も古い時期のものとなる。報告書では、マウンド状に盛り上げたかのような埋め戻し痕跡や埋め戻し後に焼けたことを示す炭化材のあり方から廐屋葬の可能性を示唆している。

遺跡の西端部の調査を行った第12次調査（平成18年）では、縄文時代の陥し穴状遺構の他に18世紀～19世紀の溝によって区画された掘立柱建物跡や墓壙などが検出された。

遺跡の東寄りの調査区、第13・14次調査（平成18年）では、奈良時代と平安時代の集落内で鍛造剥片を作った平安時代の鍛冶工房が検出された。また、大量の炭化種実が出土した焼失住居が検出され、当時の植物利用及び食料事情を知る上で貴重な資料を提供してくれた。

遺跡のほぼ中央北寄りの第15次調査（平成18年）では、平安時代の堅穴住居跡とともに多くの土師器焼成土坑が検出された。ロクロ・ピットも発見されるなど遺構の性格のさらなる確証が得られる成果があった。

広範囲に亘って調査された第16・17次調査（平成20年）では、これまでの細谷地遺跡の集落様相をそのまま実証した成果が出された。第4次調査や第8次調査、第15次調査で見つかっていた焼成土坑（土器焼成土坑・土師器焼成坑）が本次においても数多く検出され、炭化物年代測定により最も古いものは奈良時代になることもわかった。また、これまで以上に竪窓状遺構も見つかった。

参考引用文献

- *（財）岩手県文化振興事業団蔵文化財センター・岩手埋文
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書→岩手埋文報告書と略する
岩手県農政部北上山系開発室 1978 「北上山系開発地域土地分類基本調査〔盛岡〕」
岩手県企画開発室（北上山系開発） 1975 「北上山系開発地域土地分類基本調査〔日詫〕」
盛岡市教育委員会 1981 「志波城跡I」
岩手埋文 1986 「手代森遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書第108集
岩手埋文 1995 「上木内遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書第220集
岩手埋文 1995 「上八木田I遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書第227集
岩手考古学会 1996 第16回岩手考古学会研究大会発表資料「川日C遺跡」
盛岡市教育委員会 1997 「永福寺山遺跡－昭和40、41年発掘調査報告書」
岩手県教育委員会事務局 2000 岩手県遺跡情報検索システム 盛岡地方振興局管内北部
岩手県教育委員会事務局 2000 岩手県遺跡情報検索システム 盛岡地方振興局管内南部
盛岡市教育委員会 2003 「向田遺跡」－浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査II
盛岡市教育委員会 2005 「盛岡市内遺跡群－平成15年度、16年度発掘調査報告－」
盛岡市教育委員会 2008 「盛岡市内遺跡群－平成18年度、19年度発掘調査報告－」
盛岡市教育委員会 2008 「志波城跡」（平成17、18年度発掘調査報告）
岩手埋文 2008 「平成19年度発掘調査報告書」岩手埋文報告書第524集
盛岡市教育委員会 2008 「薬師社窟遺跡」
盛岡市遺跡の学び館 2008 「柿ノ木平遺跡・塙根遺跡」－浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査－IV 第4分冊 墓
根遺跡本文編
岩手埋文 2008 「細谷地遺跡第15次発掘調査報告書」岩手埋文報告書第514集
岩手埋文 2008 「細谷地演跡第13次・14次発掘調査報告書」岩手埋文報告書第513集

III 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) 区割り設定

第19次調査は、道路となる第20次分を挟んだ状態での調査範囲だったため、調査当初からほとんど第19次と第20次同時並行での調査となった。細谷地遺跡の区割り設定は、盛岡市教育委員会の方針に準じ日本測地系による平面直角座標第X系を座標変換した調査座標を用いた。これまでの細谷地遺跡の調査に使用された座標値を参考に以下の2点を基準とし調査を行った。

これまで通り、一辺50mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺2mの小グリッドに区割した。大グリッドは原点から南に算用数字の1、2、3……、東にアルファベットのA、B、C……とし、「1 A」「2 B」のようにあらわした。本調査区は3 Jおよび3 Kの大グリッド中に含まれる。小グリッドは、北から南へ算用数字の1~25、西から東へアルファベットのa~yとし、大グリッドと合わせて「1 A 1 a」「2 B 2 a」のようにあらわした。上記の基準杭に付したグリッド名は、小グリッドである。

基準杭 1 (カリット 3 K 1 a)

X = -36,100.000、Y = 26,500.000、H = 122.379m

(X = -35,792.3126、Y = 26,200.4069 世界測地系値)

基準杭 2 (カリット 3 K 18 a)

X = -36,134.000、Y = 26,500.000、H = 122.092m

(X = -35,826.3127、Y = 26,200.4066 世界測地系値)

(2) 粗掘り・遺構検出・精査

調査に入る前の調査区は、おまかに基礎コンクリートなどは除去され更地となっていた。しかし、前述したとおり、本調査区はもともとガソリンスタンドがあった場所のため、コンクリートが残っているところや碎石等が厚く敷かれており、人力で試掘するにも到底及ばない部分が多くあった。そのため、碎石などがなくなるまで重機（バックホー）によって除去した。部分的に基礎コンクリートや碎石が深く入り込んでいる場所で、重機による除去作業により周辺の堆積土を壊す恐れのある場合はそのまま残し、後で人力で取り去ることとした。碎石除去後は、試掘レンチを 4箇所設け、上層の堆積状況、遺構出土面を確認し、表土（旧表土・搅乱層）をさらに重機を用いて除去した。表土除去後、人力で鋤籠、場所によってはスコップ（搅乱部分）や移植ベラを用いて遺構検出を行った。

遺構検出後精査に入るわけだが、今年度の盛南開発に關する調査状況の事情により、予定の野外作業員数の半分の人数での調査となった。また、通常複数の調査員が調査にあたるわけだが、同事情により一人体制での調査を行った。そのため、精査における煩雑さや安全面を加味し、北側の遺構から順番に精査を進めることとした。

原則として、堅穴住居跡は 4 分割し、土坑類は 2 分割して埋土把握をしながら掘り下げを行った。出土状況に意味のあると思われた遺物は出土位置を平面実測図に書き足し、出土状況の写真撮影後、番号をつけて取り上げを行った。

実測図は、簡易遺り方と光波トランシットを用いて作成した。原則的に 1/20 で作成したが、堅穴住居跡のカマドの様子など詳細な図を要するものは遺構に応じて 1/10 で作成した。

写真撮影は、6 × 7 cm 判のモノクローム、35mm 判モノクローム、同カラーリバーサルをそれぞれ 1 台ずつ使用した。また、デジタルカメラでの撮影も合わせて行い、室内整理や報告書執筆に関わる確認作業などに使用した。報告書に掲載した写真は原則的に上記モノクローム 2 台の写真であるが、写真的な写り具合によっては、デジタルカメラ撮影のものが入っている。

航空写真撮影は、セスナ機によりを行い、隣接し同時期調査が行われていた向中野船遺跡と一緒に 6 × 7 cm 判、35mm 判カラーリバーサルの 2 種類を撮影した。

(3) 遺構の命名

検出された遺構は、検出順に 1 号〇〇、2 号〇〇と調査時に混同しないよう随時命名し、調査を進めていく中で現代のものとわかったものや遺構ではなかったと判断されたものなどは、欠番とした。野外調査や室内整理では、この野外調査で使用した旧遺構名で作業を進めており、報告書記載時にこれまでの細谷地遺跡の各遺構名の連番を付し、報告している。また、柱穴状土坑はこれとは別で、これまでの各調査次同様、調査次ごとに PP 1 から番号を付している。

遺構の略号は以下のとおりである。

堅穴住居跡・・・R A 挖立柱建物跡・・・R B 柱穴列・・・R C 土坑・・・R D
焼上遺構・・・R F 溝跡・・・R G その他の遺構・・・R Z

2 室 内 整 理

(1) 遺 物 の 整 理

出土した遺物の水洗は、雨天時の野外調査員及び室内整理作業員が行った。土器は水洗後、袋ごとに重量計測をし、袋番号をつけた後、手書きで注記を行い、接合復元を行った。掲載遺物選定後、実測、底部の採択、石膏部分の彩色、写真撮影、実測図トレースを行った。掲載遺物は、遺構内出土の上器については、完形あるいは略完形は全点、口径・底径が1/4以上あるものを選定した。遺構外の土器は、完形あるいは略完形は全点、破片であっても遺構内遺物で例のないものについては選定した。須恵器について、同一個体の可能性があるものは、その中で外形の判断しやすいもの、大きめの破片、たたき痕・当具痕などが鮮明で特徴的な部分を選定した。近世陶磁器は明らかに現代ではないもの、破片であっても近世陶磁器の特徴的な文様のあるものについて選定した。図版中の表現は凡例のとおりである。

石器は原則的に全点登録した。

鉄製品は、現代と思われるものを除き掲載した。ソフトエックス線撮影を行い、もとの形状を確認の上で、鋸落とし、実測、トレース、写真撮影を行った。その後、岩手県立博物館に委託し、保存処理を行った。

遺物の実測図の縮尺は、土器1/3、石器1/3、近世陶磁器1/2、鉄製品原寸である。

遺物写真撮影は、キャノンEOS1D(1670万画素)を用いて、当センター職員が行った。RAWモード撮影を行い、当センター設置のハードディスクに遺跡名・遺構名・登録番号・報告書掲載番号をつけ保存した。写真図版中の縮尺については、原則として1/3で掲載しているが、大型の遺物や小破片の遺物については任意で掲載した。実測図版を参照していただきたい。なお、図版中の遺物番号と写真図版中の遺物番号は一致している。

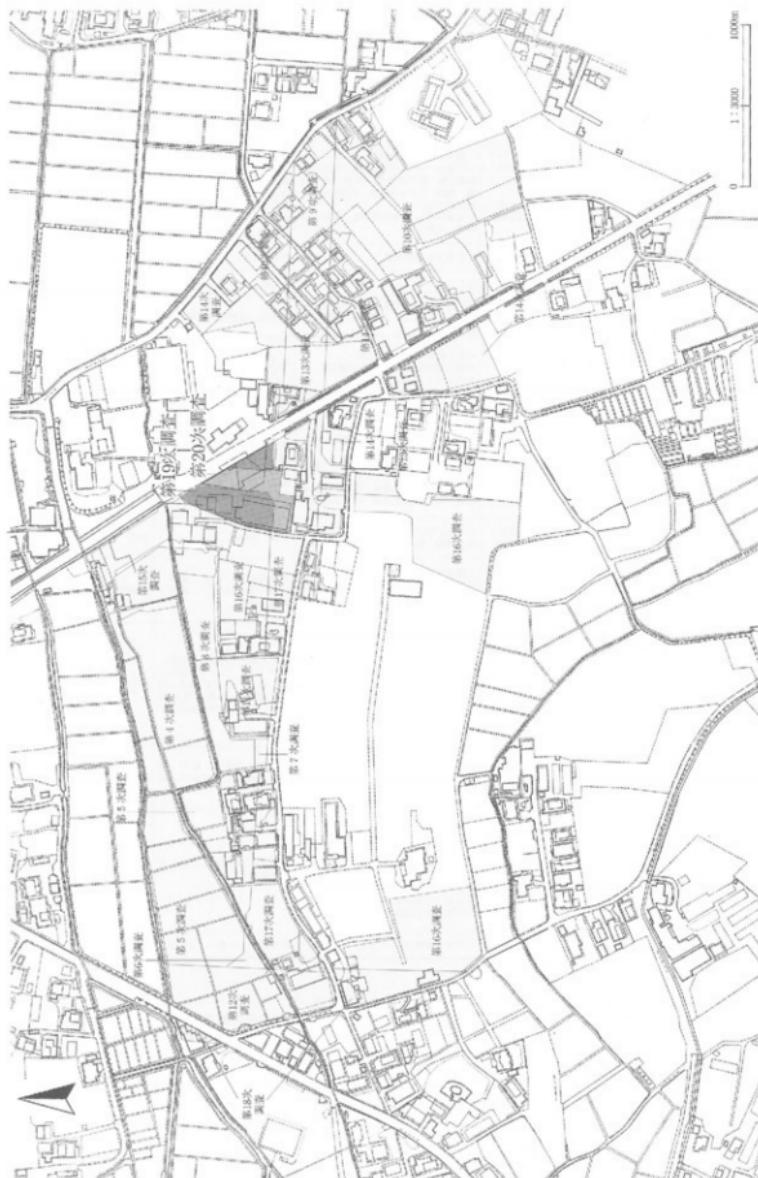
(2) 遺構実測図の整理

実測した図面は、平面図、断面図を照合し合成、第2原図を作成した。その後、トレースをして、版組を行った。遺構内の焼土部分、炭化物などの表現については、凡例のとおりである。

遺構図版における遺構の縮尺は、住居跡・掘立柱建物跡・戸間状遺構が1/50、土坑が1/40、焼土・柱穴状土坑が1/60、溝跡が1/80である。また、住居跡のカマドについては1/25のものも掲載した。それぞれの頁にスケールを掲載しているほか、平面実測と断面実測の縮尺が異なる場合にもそれぞれのスケールを付してある。実測図の図面は第1原図、第2原図とともに通し番号を付し、台帳を作成して収納した。

(3) アルバム整理

野外で撮影した遺構写真は、6×7cm判のモノクロームと35mm判モノクローム、35mm判カラーリバーサルの種類ごとにアルバムに整理し、撮影カード順の写真台帳を作成した。航空写真については、6×7cm判のモノクローム写真的アルバムとともに整理している。また、一部隣接する向中野館遺跡とともに撮影した写真については、焼き付けの写真のみの整理とし、ネガフィルムについては向中野館遺跡第10・11次のアルバム中に整理してある。遺構写真図版は、6×7cm判を主に濁び焼き付け、不足分を35mm判のものを利用し作成した。



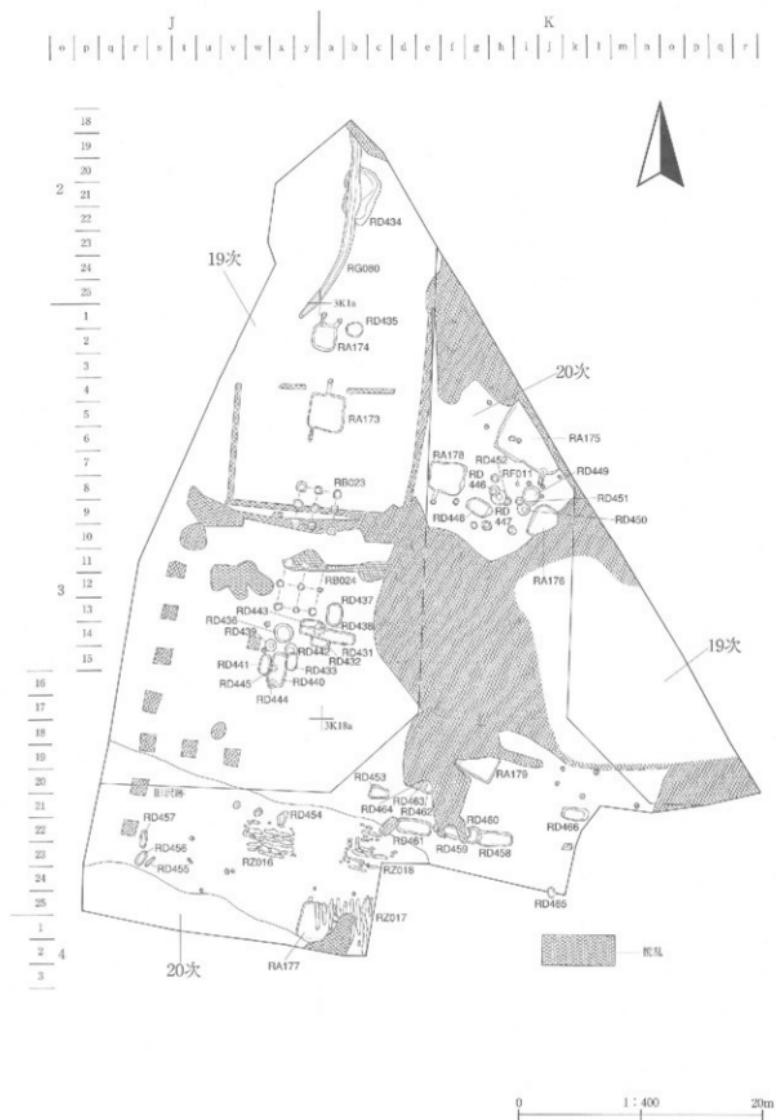
第5図 細谷地遺跡調査位置図

第2表 これまでの細谷地遺跡調査一覧

時期 次元	委託者	報知	調査区域	対応機関	調査期間 (西暦)	調査概要・既往遺跡	出土品	報告書	備考
1 例人	試掘	112	豊岡市役所	66.7.21	<平安>土坑1基			机種60・ 61年度	
2 舟岡社	試掘	975	豊岡市役所	96.04.22					
3 不明			豊岡古物館	小明					
4 熊本市	本調査	3312	黒浜文化財 センター	00.6.14～ 00.11.8	<平安>落穴状遺跡 <平安>堅穴吹き跡16個、擬立柱物 物跡4件、第6次改修層、土坑、洗土井 跡、溝跡、カマリ状遺跡、痕跡状遺跡、 傾斜状層理、柱頭、柱脚、井戸跡、 <古墳>擬立柱物跡2棟、溝跡、井 戸跡、土坑	陶文土器（後醍醐）、片貝 類、土器部、瓦部、あかや き土器、石器、石器部、八角形 鏡、近畿四隅鏡、吉備（鬼 水造）、小柄品	第414号 調査	9世紀後半～ 10世紀初半の 集落跡	
5 倉敷市	本調査	5803	黒浜文化財 センター	01.4.16～ 01.7.31	<平安>井戸状遺跡	角材、木枕	第380号	略報	
6 公園	本調査	190	黒浜文化財 センター	01.5.22～ 01.6.5	<近井>井戸状遺跡		第455号	新報	
7 公園	本調査	125	黒浜文化財 センター	03.10.1～ 03.10.31	なし	土器部			
8 福岡市	本調査	3307	黒浜文化財 センター	03.7.1～ 03.11.7	<平安>堅穴吹き跡16個、上2回陳土 井戸4個、枕羽1基、土坑、呂岳状跡24個 等	土器部、粗陶器、鐵製品	第454号	生産遺跡名 う集落跡	
9 約定探査	本調査	1,835	黒浜文化財 センター	05.4.12～ 05.11.18	<説文書>墳丘上遺跡1基 <説文書>堅穴吹き跡16個、土坑、 ラヌリ状土坑2基 <豎立>堅穴吹き跡16個、土坑、 <平安>堅穴吹き跡16個、土坑、 傾斜状層理、柱頭、柱脚、井戸跡、 洗土井跡、井戸跡、井戸跡2個、 <古代>火坑、便1遺跡、溝跡、柱穴 跡2個 <近井>井戸状擬立柱物跡1基、土坑、 壇跡、溝跡、柱穴吹き跡 <不規>カマリ状遺跡、溝跡、痕跡状 遺跡、土坑、洗土井跡、柱穴吹き跡等	陶文土器、鐵文土器、圓筒 形器、石器、瓦器、土器部、 骨器、土器部、火葬土器、 鐵製品、銅製品、鍛冶、鍛鍊 跡、刃子、刀針、雜 木員、火葬、瓦器、土器部、 土器、火葬、瓦器、土器部 等	第500号 調査	平安時代の ヤシエンブライト？ 確定的建築物と 豪族居宅（8 世紀後半）の 築路跡の確認	
10 熊本市	本調査	10,545	黒浜文化財 センター		<説文書>火坑、便1遺跡、溝跡、柱穴 跡2個 <近井>井戸状擬立柱物跡1基、土坑、 壇跡、溝跡、柱穴吹き跡 <不規>火坑、便1遺跡、溝跡、 痕跡状遺跡、土坑、洗土井跡、柱穴吹き跡等				
11 豊橋市 都心埋蔵	本調査	1,569	学び館	05.4.1～ 05.5.20	<平安>堅穴吹き跡4個、柱穴1条、 土坑、溝跡、石坑状・坑	角材、木枕	未完		
12 同上	本調査	3,240	黒浜文化財 センター	06.4.10～ 06.6.15	<説文書>堅穴吹き跡 <近井>井戸状擬立柱物跡、堅井1基、 土坑、溝跡、井戸、柱穴吹き跡 <不明>火坑、溝跡	北北東面鏡、漆器、錠前、 刀銘（鬼水造）、鉢、 鏡、金鏡、刀子、刀針、雜 木員、火葬、瓦器、土器部 等	第608号	平安時代の 豪族居宅（8 世紀後半）の 築路跡の確認	
13 都市改修	本調査	2,230	黒浜文化財 センター	06.7.3～ 06.11.27	<平安>堅穴吹き跡8個 <平安>堅穴吹き跡30個、擬立柱物 物跡、柱穴吹き跡、土坑、堅穴吹き跡 等	ガラス玉、土玉、焼成土 器、鐵製品、瓦化瓦器、土 器、鐵製品、古鏡（鬼水造） 等	第513号 調査	平安時代の 豪族居宅（8 世紀後半）の 築路跡の確認	
14 豊橋市	本調査	7,936	黒浜文化財 センター	06.10.10～ 06.11.27	<古代>火坑、溝跡、柱穴吹き跡 等 <平安>堅穴吹き跡9個、擬立柱物 物跡、柱穴吹き跡、土坑、 <不明>火坑26基、塚3基	鐵製品、古鏡、 鏡、土器、瓦器、 土器部、鐵製品、 鐵製品、瓦化瓦器 等		後奈良時代から 飛鳥時代にかけて の豪族居宅（8 世紀後半）の 築路跡の確認	
15 熊本市	本調査	1,875	黒浜文化財 センター	06.10.16～ 06.12.12	<平安>堅穴吹き跡9個、擬立柱物 物跡、柱穴吹き跡、土坑、 <不明>火坑26基、塚3基	土器部、須磨器、研石、漆 器、土器、斐伊（羽口）、表 面磨削器、地點	第514号	ロクロ・ビット の発見、土 師母器或坑 多數出土	
16 熊本市	本調査	13,329	黒浜文化財 センター	07.5.1～ 07.11.29	<平安>堅穴吹き跡1條 <平安>堅穴吹き跡1條、擬立柱物 跡3件、柱洞1条、土坑22個、堅穴吹き 跡3條、柱洞1条、洗土井跡、溝跡、 傾斜状層理、柱頭、柱脚、井戸跡 <古代>火坑、土坑、洗土井跡 <平安>堅穴吹き跡9個、洗土井跡 等	土器部、須磨器、古鏡、五 葉形刻頭器	第535号 調査	濃尾北窓の可 児山遺跡、南西窓 の櫛窓 軽井沢遺跡、能 成坂土坑の確 認	
17 都市改修	本調査	5,563	黒浜文化財 センター	07.4.11～ 07.11.29	<平安>堅穴吹き跡12個 <平安>堅穴吹き跡9個、洗土井跡 等 <不明>火坑26基、塚3基				
18 関交委	本調査	1,675	黒浜文化財 センター	07.7.17～ 07.8.24	<中井>墓塚1基 <不明>土坑4基	白然遺物（人骨）、土製品	第534号	新報	

上記報告書名

- 盛岡市教育委員会 1987 『盛岡市埋蔵文化財調査齐年報－昭和60・61年度－』
- 岩手県文 2002 『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』(平成13年度分) 岩手県文報告書第397集
- 岩手県文 2002 『細谷地遺跡発掘調査報告書－第4・5・6次調査－』 岩手県文報告書第414集
- 岩手県文 2004 『細谷地遺跡第8・9次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第454集
- 岩手県文 2004 『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書』(平成15年度分) 岩手県文報告書第455集
- 岩手県文 2007 『細谷地遺跡第9・10次・第10次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第500集
- 岩手県文 2008 『飯岡川遺跡第7・13・14次・柱洞地遺跡第12次・堅蘇原第9次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第508集
- 岩手県文 2008 『細谷地遺跡第13・第14次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第513集
- 岩手県文 2008 『細谷地遺跡第15次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第514集
- 岩手県文 2008 『平成19年度発掘調査報告書』 岩手県文報告書第524集
- 岩手県文 2009 『細谷地遺跡第16次・第17次発掘調査報告書』 岩手県文報告書第535集



第6図 漢構配図

IV 検出された遺構

1 調査の概要

第19・20次調査において検出した平安時代の遺構は、堅穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、土坑16基、畝間状遺構3箇所、柱穴状土坑22個、近世以降の遺構は、土坑13基、時代不明の遺構は、土坑7基、溝跡1条、焼土遺構1基、柱穴状土坑8個である。また、調査区南側において、昨年度第16・17次調査で検出されていた旧沢跡が今回も東西方向に伸びて検出している。

遺構の分布は、調査区東側と旧沢跡がある南側でⅡ層とした黒色土が今回の調査範囲の中で最も厚く残っており、その部分において平安時代の遺構が集中して検出している。また、近世以降の土坑については、2箇所に集中しており、互いに重複した状態で検出された。野外調査で命名した遺構名と報告書掲載遺構名の対照表は以下のとおりである。なお、第19次と第20次の内訳は表中に示した。

第3表 遺構名変更一覧表

次回	新遺構名	旧遺構名	次回	新遺構名	旧遺構名
19	RA173堅穴住居跡	1号住居	19	RD430土坑	10号土坑
19	RA173堅穴住居跡	2号住居	19	RD440土坑	14号土坑
20	RA175堅穴住居跡	3号住居	19	RD441土坑	15号土坑
20	RA176堅穴住居跡	4号住居	19	RD442土坑	16号土坑
20	RA177堅穴住居跡	5号住居	19	RD443土坑	17号土坑
20	RA178堅穴住居跡	6号住居	19	RD444土坑	18号土坑
20	RA179堅穴住居跡	7号住居	19	RD445土坑	19号土坑
19	RBG026堅穴住居跡	1号堅穴住居跡	20	RD446土坑	1号土坑
19	RBG026堅穴住居跡	2号堅穴住居跡	20	RD447土坑	6号土坑
19	RD431土坑	1号未成土坑	20	RD448土坑	7号土坑
19	RD432土坑	1号未成土坑2	20	RD449土坑	8号土坑
19	RD433土坑	2号未成土坑	20	RD450土坑	11号土坑
19	RD434土坑	2号土坑	20	RD451土坑	12号土坑
19	RD435土坑	3号土坑	20	RD452土坑	13号土坑
19	RD436土坑	4号土坑	20	RD453土坑	20号土坑
19	RD437土坑	5号土坑	20	RD454土坑	21号土坑
19	RD438土坑	6号土坑	20	RD455土坑	22号土坑

2 堅穴住居跡

平安時代の堅穴住居跡が7棟検出（第19次2棟、第20次5棟）している。搅乱を受けているものが大変多く、全容のわかるものは2棟のみである。

RA173堅穴住居跡（第7・8図、写真図版3～5）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区の3K4a・3K5aグリッド付近、調査区のほぼ中央で検出した。Ⅱ層を下げて、褐色土の地山の中で黒色土の埋土により容易に確認できた。

＜重複関係＞ 重複関係はない。上面に近現代のトレンチャーラインが数条入る。

＜規模・平面形＞ 一辺の長さ290×280cmの隅丸方形で、壁高は18cmである。軸方向は、N=12°～Eである。床面積は、7.5m²である。

＜埋土＞ 4層に分層される。自然堆積と見られる。南側の壁際に投げ込みと思われる焼土があった。火山灰は含まない。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 床面は平坦で、カマドや土坑などがない中央をやや厚く貼り床がなされている。特に、貼り床を剥がす途中で見つかった中央の土坑部分の上面は周辺よりも高く締まってい

る。

＜壁・壁溝＞ 壁はやや垂直に立ちあがり、壁際はしまりがあまりないものの壁溝などはめぐっていない。＜柱穴＞ 柱穴と思われるものは住居内にも住居周辺でも見つからなかった。

＜カマド＞ 南側と北側の2箇所ある。残存状況から南側のほうが占い（カマド1）。カマド1は、南側の西隅に造られている。煙道の長さは108cm、煙出しは径32cmある。住居壁から一日上がって、煙出し部に向かって地中に下がって掘られている。煙道の上面がほとんど削平されているが、削り貫き式と思われる。削平された煙道をみると、住居自体がかなり削平されていることを示している。煙出しの検出面から10cmほど下がったところで、須恵器の环（2）が口縁部一部を欠くが、ほぼ完形で正位で出土している。カマドの袖はほとんど残っておらず、燃焼部の焼土も若干残っているだけである。カマド2は、北側のやや西寄りの中央付近に造られている。煙道の長さは130cm、煙出しの径は36cmである。カマド1よりも若干大きく造られている。削り貫き式である。天井はない。袖は、地中を削りだして貼り付けたよう、右側の袖については、芯材とした礫や土器片が若干残っていた。この上器片はカマド1の燃焼部に散在していた上器壺と接合する。燃焼部中央に20cm弱の躰（7）があり、支脚としたものと思われる。焼土は袖部も含めて広がっているが、あまり厚くない。

＜付属施設＞ 土坑が3基検出されている。カマド2の両脇に見える土坑は、柱穴のように思われるが、浅すぎる。PP1は、50×46cmで、深さは8cmである。床面を出している時に見つかったもので、カマド2の使用しているときのものと思われる。床面から3cmほど下がって（1層）3cm前後の焼土粒を含む層（2層）となる。底部より鉄製品が1点出土している。PP2は、PP1と同様の検出である。こちらもほぼ同じような堆土だが、焼土は含まない。44×37cmで深さは8cmである。PP3は、貼り床を剥がして住居のほぼ中央に見つかった土坑である。100×78cmの東西に長い楕円形をしている。貼り床のしまり具合をみると、この土坑の上面が周辺よりも更に固くしまっており、この土坑があるために固くした可能性がある。そのため、カマド2の際の土坑ではなく、カマド1の使用時の土坑の可能性が高い。カマド1からカマド2への作り替えによる住居の拡張などは、確認されていない。

＜遺物＞（第31・32図、写真図版27）

1は、内面が黒色処理された（以下、「内黒」と記載）土器で体部にかすかに墨痕が見られる。底部切り離しは回転ヘラケズリで、体部下位は一部ヘラケズリ調整が行われている。5の土器壺は、カマド1とカマド2の燃焼部およびPP1とPP2から出土した破片、また後述するRA174出土の破片とも接合した。さらに、口縁部の一部は調査区東側のRD449土坑の埋土上面から出土している。カマド1が造られ、使用されていた上器壺はその後、2次使用されたことがわかる。7の礫石器は、一部磨削面が見られ、カマドの支柱として再利用されたものと思われる。PP1の底部から鉄錐の9が出土している。刃部の幅が2.2cm、長さが5.9cmと細長く「方頭斧前式」に分類される形状をしている。

＜時期＞ 出土遺物などから、9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

RA174竪穴住居跡（第9図、写真図版5～7）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区の3K1a・3K2aグリッド付近に位置し、RA173竪穴住居跡の2m北側にある。RA173と同様に容易に検出できた遺構である。

＜重複関係＞ 重複関係はない。

＜規模・平面形＞ 一辺の長さ186×180cmの隅丸方形である。外側の一辺は約180cmあるが、床面の一辺は150cmしかなく、床面積は2.5m²とかなり狭い。疊換算すると1.5畳分しかない。壁高は25cmである。方向はN-10°-Eで、RA173竪穴住居跡と類似の軸を持つ。

＜埋土＞ 自然堆積と思われる。火山灰は含まない。＜床面・掘り方・貼り床＞ 床面は、貼り床はされていないが、縮まっている。ところどころ小窪が見える。＜壁・壁溝＞ 外に拡がる状態で、壁が造られている。溝は掘られていない。＜柱穴＞ 住居内にも住居外にもそれらしきものはない。

＜カマド＞ 2箇所造られている。どちらも北側の壁に造られ、カマド2は西寄りに住居の軸と同じ方向で、カマド1は東の角隅にN-45°-Eの方向により傾いて造られている。当初東側のカマドのみ（カマド1）と思われたが、周辺の納査を続けてカマド2をようやく確認できた。袖や焼土など全くなく住居内の壁にも煙道の痕跡が薄く残るのみであった。この西側に造られたカマド（カマド2）が古く、東側のカマド（カマド1）が新しい。カマド2は煙道の長さが、82cm、煙出しは径39cmである。上面はほとんど壊されており、地山の上との区別があまりない。断面により若干確認できるのみである。

カマド1は、煙道の長さが93cm、煙出しの径39cmでカマド2とあまり変わらない。ただ、カマド2の時よりも、より地中深く煙道が掘られ、削り貫き式であったことが断面で確認できた。袖の残りは大変悪い。地山の褐色土が右側袖部と思われるところに若干残っているのみである。右側袖の伸びていたと思われる場所に円環があり、芯材についていた可能性がある。また、同様の環が煙道部入口にあり、同じく袖を支えていたものと思われる。左側の袖付け根には小ビットが見つかっている。煙道部はほとんど確認できず、煙道部入口にある環の周辺に焼上粒が残るばかりである。煙道部入り口から中央に向かって約50cm離れて、50cm強の範囲で土器片が散在していた。その範囲は床面よりもややくぼみがあり、その上に土器片を平らに置いたように見つかっている。この土器片は同一個体のもので、RA173のカマド1で見つかった上師器壺の胸部破片である。これらの破片はバラバラの破片ではなく、ここから見つかったもので接合される。熱は受けているが、周辺および遺物の下に焼土は確認できなかった。住居を破棄する際に持ち込まれ置かれた可能性が高い。

＜付属施設＞ ない。

＜遺物＞（第32図、写真図版27）

上述したRA173から出土した土師器壺（5）と同一個体の胸部破片の他に、南側埋土中で小型の土師器壺（12）が出土している。内外面ともススが付着している。底面は木葉痕があり一部ナデつけられている。

＜時期＞ 出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と思われるが、RA173のカマド1が構築されたよりも後の時期である。

RA175整穴住居跡（第10～12図、写真図版7～9）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区の3K5i・3K6iグリッド付近の調査区中央の最東に位置する。住居の約半分は、現道に伸びており、全容は不明である。当初、ここにはII層の黒色土が厚く堆積しており、試掘トレンチを道路に沿って入れた時にも、同黒色土から多量の上器が出土していた。そのため、遺構の存在は推定できたが、上面に白色火山灰を含む柱穴状土坑がいくつかあり、やや遺構そのものの精査に入るまでの時間を要した。また、この住居跡の西側一帯に土坑が検出され、さらに住居跡と重複するように風倒木痕がいくつかあり、精査に手間取った遺構である。

＜重複関係＞ 遺構ではないが、風倒木痕により西側の一部および、堀上が搅乱を受けている。

＜規模・平面形＞ 残存する一辺が530cmを測る。今回検出した住居の中で最も大きい。下端一辺490cmとすれば、床面積は25m²で畳換算15畳近くの広さとなる。隅丸方形で、壁高は33cmである。カマドの軸方向はN-160°-Wである。

＜埋土＞ 道路際ということもあり、上面は搅乱層が厚く堆積している。道路際で確認した場（ベルト）には、黒色土中に白色火山灰を含む層がレンズ状に見えている。同面からは、いくつかの白色火山灰を含む柱穴状土坑が検出しているが、断面を見ると柱穴状上坑とはならず、別遺構の可能性がある。層状に分層され、自然堆積と思われる。住居埋土には火山灰は含まれない。北側において焼土が3箇所見つかっている。いずれも床面よりも高く、埋土の一部の上に焼上がりのつており、投げ込みと思われる。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 貼り床は壁際を10cmほど残して、薄く3cmほどの厚さで中央には貼らないいいわゆるドーナツ状に貼られている。さらに、その貼り床を下げるに以前に貼られたと思われる貼り床が若干狭い範囲で同じようにドーナツ状に貼られている。最大幅は1mである。この貼り床下位から、3基のビット（PP3・PP5・PP6）を確認した。やや砂質の褐色土であり締まっていない。5～10cmほどあり、やや厚く貼られている。

＜壁・壁溝＞ 床面近くは、ほぼ垂直に立ち上がり、上部に行くと斜め方向にやや開き気味になる。溝は巡っていない。

＜柱穴＞ 新しい床面ではない。作り替えをする以前では、4基の柱穴状土坑を確認した。PP4～PP6は、規模や埋土など類似しており同時に機能していたものと思われる。PP3は埋土が類似しているが、規模がやや大きい。他の3個が25cm前後の径を数えるのに対して、PP3は、径63cm、深さも48.7cmとかなり深い。断面形から貯蔵穴とは言い難く、主柱穴となるものの可能性がある。

＜カマド＞ 南西壁隣に位置する。煙道から煙出しのほとんどを風倒木痕によって壊され、焼上粒を含む土があったことから、トレンチ掘りをしてようやく確認できたものである。そのため、煙道および煙出しの底部のみ明確で、その他は残存部からの推定値である。煙道の長さは140cm、煙出しに向かってやや下がる。煙出しの径は31cm、深さは32cmある。煙道埋土中位から須恵器片が出土している。燃焼部はあまり焼けていない。若干の礫や袖の一部、土器片の散らばりがあるのみである。大井部は全く残っておらず、崩れたと思われる土も明確ではない。風倒木の影響を最も受けている場所である。

北側で投げ込みの焼上とは別に、20～30cm大の長形の礫が2個出土し、その周辺から焼土が確認できた。これは断面から投げ込みではないと思われる。場所から、古い時期のものか。ただし、埋土の高さから見ると、新住居の際の床面では、この礫が見えており、これはどの礫が数個、この場所にあるのは生活上、差し支えがあるように思われる。

＜付属施設＞ 上坑を2基検出している。PP1は、PP3の上面に見つかっている。同ビットの間に旧貼り床分の土を挟んでおり、同一のビットではない。楕円形で東側の底部は平坦である。PP2は東側調査区境内に検出した。やや砂質の埋土で、土器片を含む。埋土中位では、壁と接している南側で人頭大の礫が出土している。

＜遺物＞（第32～34図、写真図版27・28）

当該住居の約半分は現道により未調査であるにもかかわらず、今回の調査の中で遺構内出土の遺物量が最も多い遺構である。北側と南側に集中して見つかっている。北側では、砥石として利用された礫石器（109・110）とともに3箇所ほどに集中して破片が残っている。これらの破片は15や19・22などの土師器である。22は全体の1/2が接合し、肩から胴下部で、被熱痕とともに2箇所のふきこぼれの痕と見られる炭化物が確認できる。南側は燃焼部周辺で、高台付きの壺が見つかったのは同場所である。15は内外面とも黒色処理された壺の破片である。17は偏の部分が欠損しているが、旁が「乍」と見え、「乍」という文字の可能性がある。この土器は底部が回転糸切りでの切り離しであるが、やや丸味を持っており極めて安定感のないものである。また、墨書きされている部分を正面にして、90度

にあたる左側の口唇部が外側に若干貼りだすように焼成前にナデ調整されている。26・27・30・32はいずれも須恵器壺の破片であるが、にぶい赤褐色で胎土が酷似しており、同一個体の可能性が高い。32は一部工具類の痕か意図的につけたものか不明な刻線が見える。

＜時期＞ 出土した遺物から、9世紀後半～10世紀前半といえる。

RA176豊穴住居跡（第12図、写真図版10・11）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区の3K9j・3K10iグリッド付近で、RA175豊穴住居跡の2m南側に位置する。上面を現代の家屋基礎や碎石層で大半が搅乱を受けている。この周辺は碎石が厚く残っており碎石層の厚さからすでに地山の深さまで壊されていると判断し、調査期間の終わりの段階で手をつけたところである。RA175豊穴住居跡の頃でも述べたように、南側は、風倒木の影響を受けていたため、壁の確認トレンチを入れていたところ、すでにV層の礫層となる高さでまだIV層が残っており、検出面が南に行くほど下がっていることがわかった。そのため、時間はかかったが、人手で碎石層を剥がし、遺構検出に至った。予想に反して、地山まで全て壊されではおらず若干ではあったが、北側の壁も残り、燃焼部の一部も確認できた。＜重複関係＞ 重複関係はない。

＜規模・平面形＞ 残っている一辺は282cmで推定床面積は6.4m²である。隅丸方形と思われる。壁高は最も残っている北側で25cmである。カマドの軸方向はN-130°-Eである。軸方向はRA175豊穴住居跡と同じである。

＜埋土＞ 自然堆積である。火山灰は含まない。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 全体的に締まっている。貼り床はされていない。

＜壁・壁溝＞ 若干外側に括がるが、全容は不明である。溝はない。

＜柱穴＞ それらしいものはない。住居外にも伴うと思われるものはない。

＜カマド＞ 搅乱の影響は煙道や煙出しなどはないが、南東に造られていたと推定できる。燃焼部のみで、10cmほどの円礫があるが、袖の芯材や支脚となるものではない。

＜付属施設＞ 土坑が3基見つかっている。PP1は33×31cm、深さは10cmある。PP2は58×46cm、深さは40cmある。これのピットは燃焼部を挟む状態で造られる。PP3は北東隅に造られた60×50cm、深さ9cmの浅いものである。

＜遺物＞（第35図、写真図版29）

搅乱の影響もあり、破片としてもあまり多く出土していない。39は胴下部～底部破片の坏で、直線の刻文が見える。30は土師器壺の底部破片でナデのみの調整が行われている。RA175で出土した23の土師器壺の胴部破片と酷似しており、同一個体の可能性がある。42と43はそれぞれ燃焼部と周辺の床直から出土した磨石である。

＜時期＞ 出土遺物は少ないが、9世紀後半から10世紀前半に属するものと思われる。

RA177豊穴住居跡（第13図、写真図版11・12）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区の3J25y・4J1yグリッド付近に位置し、調査区の最南端に検出した。調査区の南側には、昨年度の細谷地遺跡第16・17次調査区に検出していた旧沢跡の続き分が東西方向へ延びていた。この旧沢跡の東側部分では壌土に白色火山灰を畝状に含む3箇所の畝間状遺構が見つかっている。そのうちの1箇所を掘り下げたところ、検出された住居である。東側は搅乱を受け煙道部途中と煙出し部分がない。また、住居中央から南側にかけても旧沢の南岸であるが、礫や搅乱が多く壁が一部壊されている。＜重複関係＞ 重複関係はない。

＜規模・平面形＞ 一辺が260×260cmの隅丸方形である。壁高は最も残りの良い部分で15cmである。N-100°-Eの方向に軸を持つ。床面積は推定で6m²強である。

＜埋土＞ 自然堆積と思われる。火山灰は含まない。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 平坦だが、南側になると礫が多くなる。貼り床は全体的になされていたようだが、貼り床の粘土が明確に確認できるのは、北側半分のみである。厚いところで5cm、1~3cm程度である。南側については、礫と礫の間に粘土が入り込む程度である。

＜壁・壁構＞ ほぼ垂直に立ち上がる。溝はない。

＜柱穴＞ 住居内、住居外とも確認できなかった。

＜カマド＞ カマドは東側壁にあるが、上述のように擾乱を受け全容は不明である。天井は崩落し、一部土が残って検出された。カマドには、50cm強の楕円形の礫が数個あり、一部上面に粘土が付着していた。おそらく袖部の芯材としてこれらの礫を使用したものと思われる。また大きな礫の周辺には床と礫の間に挟まれた状態の小礫もいくつかあり、支えとしたものようである。焼土はあまり発達していない。

＜付属施設＞ カマドの左側の角隅には張り出しのピットがあり、中位面がややオーバーハングしている。規模は長径87×短径66cmでやや梢円形で底面は平坦である。土器類の壊片が出土している。

＜遺物＞（第35図、写真図版29）

張り出しピット部と焼成部周辺で土器類の壊が出土している。これらの遺物は互いに接合する。46以外はロクロナアで内外面とも無調整である。44は、今回の調査で出土した他の壊類の外形と若干異なり、胴部上位からやや外反する。内外面ともススが付着しており、灯明皿の可能性がある。刻線の見られる46は、内墨で内面のミガキや外面下部のケズリなどの調整が施される。底部の刻文は焼成前に体部の「干」は焼成後に刻まれたものようである。どちらも欠損部分があり詳細は不明である。内面は、44と同様にススが付着しており、黒色処理された器肌が色が抜けて土色になっている部分は、ススが多く付着している。灯明皿として再利用（？）されたものか。

＜時期＞ 出土遺物から9世紀末~10世紀前半か。

RA178堅穴住居跡（第14・15図、写真図版13・14）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区の3K7f・3K8fグリッド付近で、調査区中央のRA173堅穴住居跡とRA175堅穴住居跡の間に位置する。この住居はRA176堅穴住居跡と同様、上面が厚く碎石などで搅乱を受けており、遺構が残存しているとは到底思えない場所であった。しかし、一部搅乱の薄い場所があり、その部分に柱穴状土坑の一端と思われる土があり、確認したところ堅穴住居跡の煙出しから煙道の一部のようにある方向で伸びていることがわかった。そこから、人力で碎石層を下げたところ、床面が平坦で壁が若干ではあるが立ち上がり、堅穴住居跡があることが判明した。

＜重複関係＞ 重複関係はない。

＜規模・平面形＞ 北側一辺が最も広く294cmとあるが、搅乱の影響の少なさを考えると250cm前後と推定される。壁高は最も残るところで13cmある。N-160°-Wの軸を持ち、床面積は5.8m²ほどと思われる。

＜埋土＞ 瞬間に地山の泥じった土があるため自然堆積と思われるが、遺構中央の残っている土の厚さは2cmほどで、はっきりしたことは不明である。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 壁際が中央を若干残してドーナツ状に貼り床がなされる。厚さは1~3cmほどで、中央は礫と礫の間に粘土が入る状態である。

＜壁・壁溝＞ 壁はやや斜めに立ち上がるが、何度も述べているとおり相当の搅乱を受けているため、全容は不明である。

＜柱穴＞ 住居内でも住居外にもそれらしい柱穴は見当たらない。

＜カマド＞ 南側の壁やや西寄りに造られている。煙道の長さは110cm、煙出しの径は31cmである。また、煙出し付近は中位面で大きくオーバーハングしている。煙道部壁際から50cmほどいったところで少し膨らみを持つところがあり、煙出しの様相を見せていている。どちらも使用された痕跡が見受けられるが、煙道の埋土の様子を見るところのほうがあとから掘られているようで、焼上粒も多く含まれる。使用したのちに何らかの理由で同じ場所に煙出しを造り直したものかもしれない。

奥にある煙出しの埋土からは上師器の坏（50）が出土しており、やはりこちらが先に使用されたものか。

燃焼部での焼土はあまり残っていない。やや中央に小高く上が粘土質の土が残っており、天井部の崩落したもの可能性がある。袖部は左側が若干残っているのみである。袖の芯材と思われるRA177堅穴住居跡でも出土していたものと同様な30cmの長さを超える礫が出土している。また、煙道入口の中央部には、平らな面を上にして長さ38cm、幅25cmの亜角礫が出土した。これは袖芯材とした礫は全く異なり、支脚としたものであろう。

＜付属施設＞ 南側、カマドの左側にピットが2基造られる。1基は南東角隅で71×58cmの楕円形をしている。もう1基はそのピットとカマドとの間にあり、23×22cmの小ピットである。どちらも同じ埋土で搅乱の影響もあり深さも5cmと浅い。

＜遺物＞（第36図、写真図版29）

燃焼部および周辺から内外面黒色処理された坏48や内黒の坏49、土師器壺53が出土している。49は本遺構の燃焼部から出土しているが、RA176堅穴住居の埋土中からも破片が出土し接合した。煙出しが墨書きされた土師器の坏50が口縁部を欠いた状態で出土している。墨書きは底部に施されて、これまでの細谷地遺跡で比較的多く出土している「十」の字に似たものとなっている。

＜時期＞ 出土遺物から9世紀後半から10世紀前半に属すると思われるが、RA176堅穴住居よりも古い可能性がある。

RA179堅穴住居跡（第15図、写真図版14・15）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区の3K20f・3K20gグリッド付近に位置し、調査区中央の大きな搅乱部分に隣接している。上面は、油が染み込んで化学変化を起こしていたが、一部壊されずに残っていた。南側と東側の壁が方形になることを示し、西側では張り出しピットと思われる施設、床面が張り床をなされて平坦であることから、カマドそのものは搅乱部分にあるとして住居跡と判断した。

＜重複関係＞ 遺構の重複関係はない。

＜規模・平面形＞ 残っている最大の一辺は292cmである。東側は238cmほどでやや曲線を描くが、もっと伸びる可能性がある。隅丸方形で壁高は19cm、N-60°-Wの軸を持つ。西側壁にカマドが設けられていると推定される。

＜埋土＞ 自然堆積と思われるが、上面及び遺構の約半分が搅乱を受けているため、不明である。

＜床面・掘り方・貼り床＞ 床面は平坦で、貼り床は3・4cmと薄いが、固く締まっている。南東側の張り床は更に薄くしまりも少ないため、燃焼部があると思ったが、投げ込みと思われる焼土があつただけで、カマドはなかった。

＜壁・壁溝＞ 垂直に立ち上がる。壁溝はない。＜柱穴＞ ない。

＜カマド＞ 上述したように見つかっていない。しかし、これまでの調査から張り出しピットと同じ壁面にカマドが構築されていることが多いため、西側壁に造られていたのではないかと考えられる。

＜付属施設＞ 西側角隅に張り出しピットが造られている。53×47cmの円形で床より約10cm深く掘られている。巾から遺物がまとめて出土している。

＜遺物＞（第36図、写真図版30）

床面で、土師器の壺の下部が逆位の状態で出土し、同一個体の土師器壺の上半部が張り出しピットから出土し、全体の2/3ほどが接合した（55）。口縁部は丸の字に屈曲し、内面に浅く沈線が巡る。外面肩部からケズリ調整され、内面は丁寧にミガキが施し黒色処理されている。スヌ等は全く見られず液体を入れたものと思われる。また、同様の張り出しピットからやや小型の土師器壺がもう一点出土している（56）。この土器は寸胴型で底部が平坦であり、極めて安定感の良いものである。

＜時期＞ 出土遺物から9世紀後半から10世紀前半と思われる。

3 挖立柱建物跡

RB023掘立柱建物跡（第16図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区の3J8y・9y・3K8a・9aグリッド付近で、RA173竪穴住居跡の4m南側に位置する。RA173竪穴住居跡と同様、V層上面で検出した。搅乱を受けており、特に南西隅の柱穴は1/2も残っていない。＜重複関係＞ 重複関係はない。

＜規模・構造・方向＞ 2間×2間の掘立柱建物跡である。東西一辺3.25m、南北一辺3mで、「山」の字となる総柱である。軸は、N-10°-Eであり、RA173・174竪穴住居跡と類似している。

＜柱位置・柱間＞ 柱穴は9個確認できた。上述のように大半搅乱を受けている柱穴もある。東西の柱間は1.5mと1.65mで、東側が若干広がっている。南北の柱間は西側では1.5mだが、東側では1.35mと1.65mと若干ずれている。

＜掘り方・柱痕・埋土＞ 掘り方は、PP2とPP7を除いて方形に掘られている。PP2は、西側がやや広がって円形状になっているが、東側の様子を見ると方形だった可能性が高い。またPP7は一部しか残っていないため断定できないが、残存部で角があることからやはり方形だったと考えられる。柱穴の大きさは、一辺64~80cmで、PP5とPP6が若干浅いが他の柱穴の底部標高はほぼ同じである。柱あたりは、9個中6個確認できた。柱あたりの径は252~32cmである。

＜遺物＞ なし ＜時期・性格＞ 周辺の竪穴住居跡と同じような埋土であり、また、軸の方向などから住居跡と同一時期にあったもので平安時代と思われる。住居跡と同一時期にあり、立地状況から倉庫的な建物跡と考えられる。

RB024掘立柱建物跡（第17図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区の3J11y・3J12x・3J13xグリッド付近に位置し、RB023掘立柱建物跡の2m南に位置する。検出状況は、RB023と同じである。ただし、上面を含めてRB023よりも搅乱を多く受けたため、上面を多めに削るなどして検出には時間がかかった。

＜重複関係＞ なし ＜規模・構造・方向＞ 2間×2間の掘立柱建物跡である。東西一辺3.1m、南北一辺3.75mで、「田」の字となる総柱である。軸は、N-14°-Eであり、規模は若干大きいが、RB023掘立柱建物跡と大変よく似ている。

＜柱位置・柱間＞ PP1とPP2は一部のみだが、やはり9個確認できた。残りのよい柱穴での柱間は東西方向で1.65mと1.45mと西側が若干広い。南北方向での柱間は、1.95mと1.8mと北側が若干広い。

＜掘り方・柱痕・埋土＞ 検出時に方形の掘り方として確認できたのは、PP5とPP6だけである。しかし、下端の掘り方からRB023掘立柱建物跡と同様、方形であった可能性が高い。柱穴の規模は、71cm～45cmで、中柱のPP4～PP6まではやや浅いが、ほかの底部の標高はほぼ同じである。柱あたりが確認できたのは9個中7個である。柱あたりの径は20～30cmである。

＜遺物＞ なし 　＜時期・性格＞ 周辺の状況から、RB023掘立柱建物跡と同様、RA173竪穴住居跡があった平安時代と考えられる。規模などから、倉庫的な建物跡と思われる。

4 土 坑

第19次では15基（平安8基、近世以降6基、時期不明1基）、第20次では21基（平安8基、近世以降7基、時期不明6基）検出している。これらの土坑は大きく3箇所に集中している。調査区の中央部、東側道路沿い、南側旧沢沿いの北東隅である。平安時代の土坑は、黒褐色土主体で遺物を伴い地山の黄褐色土をあまり含まない。近世以降と思われる土坑は褐色土主体で地山の黄褐色土粒を埋土中に含んでいる。近現代のものは黄褐色土をブロック状に含み、現代擾乱は現代の遺物を多く含み、一部化学変化をおこしている。以上、検出時にある程度の時期の区別ができる。

RD431土坑（第18図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J14y～3K14bグリッドに位置し、調査区中央にある。

＜重複関係＞ RD432・438・443土坑と重複している。RD438・443土坑よりは新しいが、RD432土坑との新旧は不明である。

＜規模・平面形状＞ 長径4.55m、短径1m、深さ17cmの隅丸長方形を呈する。

＜埋土＞ 上面には、近現代の畑のトレッチャ跡が数条に入る。埋土中位には焼土層があり、その下に炭化物層が広がる。ところどころ灰が堆積しているところもあり、明らかに土坑全体が焼けていることがわかる。炭化物が厚く残っているところは、植物らしき炭化物も見られ、草木を置いて焼かれた可能性がある。 ＜底面・壁＞ ほぼ平坦である。窪みがある部分にも焼上、炭化物は入りこむ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。 ＜時期・性格＞ 理土から近世以降の土坑と考えられる。

RD432土坑（第18図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J14y・3K14aグリッドに位置し、調査区中央で他の土坑と重複して検出された。当初、RD431土坑と同一構造と見られたが、底部や埋土状況から別構とした。

＜重複関係＞ RD431土坑と重複している。全容不明のため、RD438・443土坑との重複関係は明確ではない。RD431土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

＜規模・平面形状＞ 長径1.55m、短径90cm（残存値）、深さは20cmである。RD431土坑やRD443土坑と同様隅丸長方形をしている。

＜埋土＞ 黄褐色土粒を含む。精査当初は前述のとおりRD431土坑と同一構造と思われたが、RD431土坑は底部で焼上や炭化物を伴うのに対し、当遺構はそれがない。

＜底面・壁＞ 平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。 ＜遺物＞ なし

＜時期・性格＞ 近世以降と考えられる。RD431土坑に間違したものとは思うが、詳細は不明である。

RD433土坑（第19図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J15xグリッドに位置し、中央の上坑集中区から検出した。＜重複関係＞ RD442・445土坑と重複し、いずれの遺構よりも新しい。

＜規模・平面形状＞ 長径1.46m、短径90cm、深さ23cmの隅丸長方形を呈している。これより北のRD431・432・443七坑と形状等類似しているが、これらが東西方向の軸を持つのに対し、当遺構は南北方向の軸を持つ。

＜埋上＞ 底部において、RD431土坑と同様、焼土と炭化物、灰が確認された。この場で焼かれた痕跡である。 ＜底面・壁＞ 平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

＜遺物＞（第37図、写真図版30） 墓上から土師器の壊破片1点が出土している。

＜時期・性格＞ 後述するRD440・441土坑も含めて、先のRD431・432・443土坑群と同じような性格の土坑群と考えられる。

RD434土坑（第20図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。2K20b・21b・22bグリッド付近にあり、本調査区の最北に位置する。上面は搅乱を受けて現代の遺物が数多く出土した。また、現代の遺物とともに、須恵器の大甕の破片が多く出土した場所もある。

＜重複関係＞ RG080溝跡と重複しており、当遺構が古い。

＜規模・平面形状＞ 長径4.75m、短径2.95m、深さは68cmを測る。楕円形をしており、北側がやや深くなっている。

＜埋土＞ 黒褐色土の層に、小砾および砂が交互に層状に入り込んで堆積している。またこれらの小砾や砂は壁の地山にも見受けられ、壁の崩落による堆積も含まれると思われる。自然堆積である。

＜底面・壁＞ 北側がやや深くなっている。上述しているように壁に小砾や砂があり崩れやすい状態で、またやや湿り気が多い層となっている。もともと掘られたあと、崩れやすい壁のために結果的に大きくなった可能性がある。

＜遺物＞（第37図、写真図版30）

上面では、須恵器の大甕の破片（58・59）、中位では土師器破片や近世陶磁器（紅皿60）が入る。

＜時期・性格＞ 他の平安時代の遺構の埋土とは異なる。埋土中から遺物は出土しているが、上面は搅乱を多く受けており、遺物からの時期判断はできないため、不明である。

RD435土坑（第21図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3K1b・3K2bグリッドに位置し、RA173堅穴住居跡の1m東側にある。RA173堅穴住居跡やRA174堅穴住居跡と同様に検出した。 ＜重複関係＞なし。

＜規模・平面形状＞ 長径1.39m、短径1.17mのほぼ円形を呈する。深さは19cmと浅い。

＜埋土＞ 底面壁際に地山との漸移層があるが、ほぼ単層でRA173堅穴住居跡やRA174堅穴住居跡と同様、黒褐色土主体である。 ＜底面・壁＞ 平坦である。壁は垂直に立ち上がる。

＜遺物＞ なし。 ＜時期・性格＞ 出土遺物はないが、検出状況や埋土から住居跡と同じ平安時代と思われる。

RD436土坑（第21図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J14xグリッドに位置し、調査区のほぼ中央で検出

した。 <重複関係> なし

<規模・平面形状> 長径1.64m、短径1.58m、深さ32cmで、ほぼ円形を呈する。

<埋土> 底面壁際に壁の崩落土と思われる層があるが、ほぼ単層で、人為堆積と考えられる。

<底面・壁> 底面は平坦で、壁はやや外傾する。

<遺物> (第37図、写真図版30)

埋土中から土師器壺の破片、須恵器壺や壺の破片が出土している。

<時期・性格> 積穴住居跡と同じ平安時代である。

RD437土坑 (第21図、写真図版18)

<位置・検出状況> 第19次調査区検出である。3K13a・3K14aグリッドに位置し、RB024掘立柱建物跡の東隣地から検出した。周辺は碎石やコンクリート片など攪乱が多く受けており、当遺構も攪乱や削平を受けている。

<重複関係> 検出上面を現代の畠のトレンチャーステップが数条通っている。

<規模・平面形状> 長径1.9m、短径1.32mの楕円形を呈する。深さは10cmと大変浅い。

<埋土> RD436土坑と同様、黒褐色土主体である。

<底面・壁> 一部現代の畠のトレンチャーステップが底面を壊しているところがあるが、もともとは平坦だったと考えられる。10cmと大変浅く、壁も自然に立ち上がる状態でしか残っておらず、詳細は不明である。 <遺物> なし。 <時期・性格> 埋土などから平安時代と考えられる。

RD438土坑 (第18図、写真図版17)

<位置・検出状況> 第19次調査区検出である。3J14y・3K14aグリッドに位置し、調査区中央での検出である。 <重複関係> RD431・443土坑と重複している。いずれの土坑よりも古い。

<規模・平面形状> 上面を2基の土坑により壊されているため全容は不明である。底面からの推定規模は、長径1.04m、短径0.8mの楕円形と思われる。深さは残存している部分で20cmである。

<埋土> 周辺の近世以降の遺構と思われるRD431・443土坑と違い、黒褐色土であり、平安時代としたRD436土坑やRD437土坑と類似している。

<底面・壁> 平坦であると思われる。残っている壁は垂直に立ち上がる。 <遺物> なし。

<時期・性格> 埋土から平安時代と考えられる。

RD439土坑 (第21図、写真図版18)

<位置・検出状況> 第19次調査区検出である。3J14w・3J14xグリッドに位置し、調査区中央にある。検出当初から上面に焼土と土器片が散在していた。 <重複関係> なし。

<規模・平面形状> 長径97cm、短径95cm、深さ41cmの円形の土坑である。

<埋土> 上面に焼土がある。レンズ状になっているわけではなく、全体的に広がっている状態である。人為的な堆積に見られる。

<底面・壁> 捣鉢状になっている。本調査区での土坑の底面としてはあまりない形状である。

<遺物> (第37図、写真図版30)

土師器片、須恵器片が多く出土している。65は内外面とも墨色処理された土師器の壺である。67～69はいずれも須恵器の壺の破片で、同一個体の可能性がある。

<時期・性格> 遺物から平安時代と考えられる。

RD440土坑（第19図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J15x・3J16xグリッドに位置し、調査区中央の土坑集中区からの検出である。

＜重複関係＞ RD443土坑と重複し、この遺構よりも古い。また、RD444・445土坑とも重複し、両遺構を壊している。また、RD444・445土坑の上面には搅乱を受けたような黒褐色土が広がっていた。しかし、土坑であったような意図的な壁にはならないため、今回は搅乱扱いとした。

＜規模・平面形状＞ 長径2.62m、短径1.42m、深さ21cmの隅丸長方形を呈している。北側で検出された近世以降の土坑群と軸は異なるが、類似している。軸はRD433土坑と同じ南北方向である。

＜埋土＞ RD433土坑では焼土や炭化物が確認できたが、本遺構からは検出されていない。

＜底面・壁＞ 平坦である。壁は垂直に立ち上がる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31）

土師器壺の破片が出土しており、後述するRD441土坑の検出面から出土した遺物と接合する。

＜時期・性格＞ 埋土や検出状況、形状等から近世以降と考えられる。

RD441土坑（第19図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J15w・3J16wグリッドに位置し、RD440土坑の西隣での検出である。

＜重複関係＞ RD444土坑、RD445土坑と重複し、いずれの土坑よりも新しい。

＜規模・平面形状＞ 長径1.68m、短径84cm、深さ21cmの隅丸長方形を呈している。南北方向の軸を持つ。 ＜埋土＞ 単層である。 ＜底面・壁＞ 底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31）

先のRD440土坑の埋土から出土した土師器壺の破片と接合した土器片が埋土上位（検出面）から出土している。また、埋土中から草花文の描かれた近世陶磁器片が出土している。

＜時期・性格＞ 埋土や形状、検出状況などから近世以降と考えられる。先にも述べたが、RD433・440土坑とともに、利用されたと考えられる。

RD442土坑（第19図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J15xグリッドに位置する。 ＜重複関係＞ RD433土坑と重複し、南側を壊されている。 ＜規模・平面形状＞ 長径1.1m（推定）、短径1.05m、深さ38cmの円形を呈する。 ＜埋土＞ 自然堆積と思われる。

＜底面・壁＞ 楼鉢状の断面をしており、焼土は確認できなかったが、RD439土坑と規模や形状が類似している。

＜遺物＞（第38図、写真図版31） RD439土坑同様、土師器片が多く出土している。

＜時期・性格＞ 埋土、遺物から平安時代と考えられる。

RD443土坑（第18図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J14yグリッドに位置し、調査区中央から検出している。 ＜重複関係＞ RD431・438土坑と重複している。RD431土坑よりも古く、RD438土坑よりも新しい。 ＜規模・平面形状＞ 長径1.8m、短径0.6m（残存値）、深さ15cm（残存値）の隅丸長方形を呈している。

＜埋土＞ 黄褐色土粒を含む單層である。RD431土坑の埋土のように焼土や炭化物は含まない。

＜底面・壁＞ 平坦で、壁は垂直に立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 墓土状況、検出状況から近世以降のものと思われる。周辺のRD431土坑とRD432土坑と当遺構はいずれも近世以降の遺構と考えられる。全て東西を軸としており、ほぼ同時期に使用されたRD431土坑を中心とした遺構群である。

RD444土坑（第19図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J16w・3J16xグリッドに位置し、中央土坑集中区にある。周辺の土坑検出時には不明だったが、重複しているRD440土坑を精査中に確認されたものである。そのため、ほとんど底部しか残っていない。

＜重複関係＞ RD440土坑と重複している。RD440土坑よりも古い。

＜規模・平面形状＞ 底部で確認できた規模は67×60cmで深さは10cmである。やや方形を呈する。 ＜埋土＞ 上面にあるRD440土坑は黄褐色土粒を含む褐色土主体の埋土であるが、その土とは異なる黄褐色土を含まない黒褐色土主体の上である。

＜底面・壁＞ 平坦である。浅いため壁は明確ではない。

＜遺物＞（第38図、写真図版31） この遺構に伴うものか明確ではないが、上面のRD440土坑との境層付近で須恵器の壺破片（73）が出土している。

＜時期・性格＞ 埋土などから平安時代に属するものと思われる。

RD445土坑（第19図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ 第19次調査区検出である。3J15w・3J15xグリッドに位置し、中央の土坑集中区にある。RD444土坑と同様、RD440土坑を精査中に確認できた土坑である。

＜重複関係＞ RD440と西側一部RD441土坑と重複している。いずれの土坑よりも古い。

＜規模・平面形状＞ 底部のみでの推定の規模は、長径78cm、短径68cm、深さ11cmの楕円形を呈する。

＜埋土＞ RD444土坑と同様、黒褐色土主体の上である。上面のRD440土坑とは全く異なる。

＜底面・壁＞ やや平坦である。地山の礫が出土している。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 埋土などから平安時代に属するものと思われる。

RD446土坑（第21図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K8h・9hグリッドにあり、調査区中央東（現道）寄りに位置する。黒色土中の検出で上面に灰白色火山灰が堆積しており、周辺からは同様に白色火山灰が含まれるP1～P6が同時に見つかっている。

＜重複関係＞ RD447土坑と重複しており、RD446土坑の方が新しい。

＜規模・平面形状＞ 85×82cmの円形で、深さは63cmある。断面はビーカー状を呈している。

＜埋土＞ 人為堆積で、後に窪んだ所に白色火山灰が入り込んだものか。

＜底面・壁＞ 平坦である。壁は直立ぎみに立ち上がる。 ＜遺物＞ なし

＜時期・性格＞ 灰白色火山灰が入り込んでいることから、平安時代と考えられる。

RD447土坑（第22図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K8h・3K9hグリッドに位置し、中央東側にある。

厚く黒色土が堆積していた区域で、黒色土を下げて確認できた遺構である。

＜重複関係＞ RD446・452上坑と重複している。RD446土坑に壊され、RD452土坑の西側部分を壊している。

＜規模・平面形状＞ 長径1.31m、短径1.13m（推定）のほぼ円形である。深さは59cmある。

＜埋土＞ 単層である。人為堆積と考えられる。

＜底面・壁＞ 北西側をRD446土坑に壊されているが、擂鉢状に立ちあがるものと見られる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31）須恵器壺の破片が出土している。

＜時期・性格＞ 灰白色火山灰を乗せていたRD446上坑よりも新しいのは確実であり、黒色土を下げての確認ということから、平安時代と考えていいだろう。

RD448土坑（第22図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K9gグリッドに位置する。周辺にも多く上坑が出士しており、同検出面での検出である。 ＜重複関係＞ なし。

＜規模・平面形状＞ 長径1.95m、短径1.27mの隅丸長方形を呈しており、深さは43cmである。

＜埋土＞ 上面の中央には礫が多く入り込んでいた。中位面で40cm前後の径で礫も含めながら焼土がレンズ状に入り込んでいる。

＜底面・壁＞ ほぼ平坦であるが、焼土が入り込んでいる底面部分は柱穴状にさらに深く掘られている。壁はやや外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31）内黒の上師器壺片が出土しているが、いずれも小破片である。

＜時期・性格＞ 検出面から平安時代と思われるが、埋土から若干新しい可能性もある。

RD449土坑（第22図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K8i・3K9iグリッドに位置し、RA175堅穴住居跡の1.5m南側で検出した。

＜重複関係＞ P10と重複しており、当遺構の方が新しい。また、遺構南東側でRD450・451土坑と近接しているが、いずれの遺構よりもRD449土坑の方が新しい。

＜規模・平面形状＞ 長径1.53m、短径1.45mの円形で、深さは25cmある。

＜埋土＞ 自然堆積と思われる。 ＜底面・壁＞ 平坦である。壁はやや外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31）

埋土底部で出土した77は、ロクロ成形の無調整の壺で内面黒色処理が施されている。そのほか、土師器の壺や須恵器壺の破片も出土している。

＜時期・性格＞ 検出状況、遺物などから平安時代と思われる。

RD450土坑（第23図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K9iグリッドに位置し、調査区東側の土坑集中区での検出である。RD449土坑と近接している。

＜重複関係＞ RD451土坑と重複している。RD451土坑よりも古い。上端上面は一部RD449土坑と接する。RD449土坑よりも古い。 ＜規模・平面形状＞ 長径99cm、短径95cm、深さ41cmの円形を呈する。

＜埋土＞ 自然堆積か。 ＜底面・壁＞ 底面は平坦で、やや外傾するがビーカー状に垂直に立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。 ＜時期・性格＞ 検出状況、埋土などから平安時代と思われる。

RD451土坑（第23図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K9iグリッドに位置し、調査区東側の上坑集中区での検出である。RD449土坑と近接している。 ＜重複関係＞ RD450土坑と重複している。RD450上坑よりも新しい。 ＜規模・平面形状＞ 長径64cm、短径57cm、深さ42cmの円形の土坑である。

＜埋土＞ 人為的な堆積と考えられる。 ＜底面・壁＞ 平坦である。やや外傾するが、ビーカー状に垂直方向に立ち上がる。

＜遺物＞（第38図、写真図版31） 底部から土師器甕の破片が出土している。

＜時期・性格＞ 重複関係や埋土から平安時代と思われる。

RD452土坑（第22図）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K9hグリッドに位置し、調査区東側の土坑集中区での検出である。 ＜重複関係＞ RD447土坑と重複しており、当遺構が古い。

＜規模・平面形状＞ 残存している規模は、径73cm、深さ10cmである。周辺の遺構から検討すると円形の遺構となるか。 ＜埋土＞ 単層である。 ＜底面・壁＞ 平坦である。自然に外傾して立ち上がる。 ＜遺物＞ なし ＜時期・性格＞ 埋土や重複関係から平安時代と思われる。

RD453土坑（第23図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K20c・3K21cグリッドに位置している。

＜重複関係＞ なし。 ＜規模・平面形状＞ 1.62×1.08mの長方形に近い楕円形である。深さ10cmと浅く、幅は東西に持つ。底部西側中央に径44×37cmほどの焼土を伴うごく浅い窪みを持つ。

＜埋土＞ 調査区中央から出土した平安時代に属する遺構の埋土と類似した黒褐色土主体の埋土である。単層である。 ＜底面・壁＞ 平坦で、前述した焼土部分が若干くぼむ。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 埋土から平安時代に属すると思われる。

RD454土坑（第23図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3J21x・3J22xグリッドに位置し、旧沢跡の精査中に確認したものである。 ＜重複関係＞ なし。 ＜規模・平面形状＞ 124×64cm、深さ24cmの楕円形である。 ＜埋土＞ 5層に分層されるが、人為的な堆積には感じられない。

＜底面・壁＞ 中央部分がもっとも深くなり断面形は捕鉢状である。壁はやや垂直気味に立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 旧沢の精査中に確認されたものであるが、埋土上面は旧沢の堆積土に類似しており、実際の掘り込みがどの地点であるのかが不明である。そのため、時期は断定できない。

RD455土坑（第23図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3J23r・3J23sグリッドに位置し、旧沢跡の精査中に確認したものである。この土坑は、旧沢跡の埋土を掘りあげてから見つかったものではなく、埋土途中で土が異なるために検出した。 ＜重複関係＞ なし。

＜規模・平面形状＞ 100×25cmの溝状の長楕円形を呈している。深さは8cmと大変浅い。

＜埋土＞ 単層である。 ＜底面・壁＞ 平坦で垂直に立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 旧沢跡の堆積途中で造られているが、この周辺には畝間状遺構も灰白色火山灰なども

全くなく、時期を示すものがいため不明である。

RD456土坑（第23図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3J23rグリッドに位置し、RD455土坑の西隣にある。検出状況はRD455土坑と全く同じである。＜重複関係＞ なし。
 ＜規模・平面形状＞ 140×55cmの楕円形を呈する。深さは21cmである。＜埋土＞ 単層で若干礫が入る。土色や土質はRD455土坑と類似している。＜底面・壁＞ 平坦で、垂直気味に立ち上がる。
 ＜遺物＞（第38図、写真図版31）
 小片であるが、内面を黒色処理された土師器壺の破片が出土している。
 ＜時期・性格＞ RD455土坑と同様、性格や時期など不明である。

RD457土坑（第23図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3J22r・3J23rグリッドに位置する。RD456土坑の北側にある。検出状況はRD455・456土坑と全く同じである。＜重複関係＞ なし。
 ＜規模・平面形状＞ 144×55cmの楕円形である。深さは21cmでRD456土坑と同じような規模、形状である。＜埋土＞ RD455・456土坑と同じである。＜底面・壁＞ 平坦で垂直気味に立ち上がる。
 ＜遺物＞ なし。＜時期・性格＞ RD455・456土坑と同様、性格や時期など不明である。

RD458土坑（第24図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K22g・3K22h・3K23g・3K23hグリッドに位置し、調査区の南東側にある。遺構検出面であるV層での検出で、調査区中央の近世以降の土坑が集中していた区域と似たような遺構の拡がりを見せている。＜重複関係＞ RD460土坑と重複しており、これよりも新しい。＜規模・平面形状＞ 長さ2.9×幅1.17mの隅丸長方形を呈する。深さは8cmと浅い。東西に軸を持つ。＜埋土＞ 黄褐色土粒を含む褐色土で一部植物根などが入る。
 ＜底面・壁＞ 平坦である。やや外傾して立ち上がる。＜遺物＞ なし。
 ＜時期・性格＞ 埋土状況から近世以降に属すると思われる。

RD459土坑（第24図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K22e・3K22fグリッドに位置し、RD458と同じ軸を持つ。当初、RD460土坑と同一遺構として精査を進めたが、断面等により別遺構と判断した。遺構の上面は大きく搅乱を受けている。＜重複関係＞ RD460土坑と重複し、これより新しい。
 ＜規模・平面形状＞ 長さ3.05×幅1mの楕円形（隅丸長方形）である。深さは12cmと大変浅い。
 ＜埋土＞ RD458土坑と同様、黄褐色土を含む褐色土である。＜底面・壁＞ 平坦で、外傾して立ち上がる。＜遺物＞ なし。＜時期・性格＞ 埋土状況から近世以降に属すると思われる。

RD460土坑（第24図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K22gグリッドに位置している。
 ＜重複関係＞ RD458・459土坑と重複する。いずれの遺構よりも古い。
 ＜規模・平面形状＞ 径1.37m前後の円形を呈する。深さは10cmほどで浅い。
 ＜埋土＞ 単層で、黄褐色土粒の含まれる量が少ない。＜底面・壁＞ 平坦である。壁は外傾して

立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。 ＜時期・性格＞ 墓土状況や重複関係から、近世以降の土坑よりは古いと考えられるが詳細は不明である。

RD461土坑（第24図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K22d・3K22eグリッドに位置し、RD458・459土坑とともに一直線になるように東西の軸で検出された。西側は一部搅乱を受けている。

＜重複関係＞ なし。 ＜規模・平面形状＞ 2.85×1.16mの隅丸長方形で、深さは15cmである。

＜埋土＞ 分層しているが、自然堆積と思われる。

＜底面・壁＞ 平坦である。壁は外傾して立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 墓土状況や周辺の遺構から、近世以降のものと考えられる。埋土や形状、輪など類似点が多く、RD458・459土坑と同時期の共通した施設の可能性が高い。

RD462土坑（第25図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K20dグリッドに位置し、RD461土坑の北側にある。検出時当初はRD463・464土坑ともに同一遺構として精査を進めたが、断面確認や底面確認を経て、別遺構と判断した。北側の大半が搅乱を受けており、全容は不明である。

＜重複関係＞ RD463・464土坑と重複、RD464土坑よりも新しい。RD463土坑との新旧関係は不明である。 ＜規模・平面形状＞ 97×62cmの楕円形で、深さが7cmと大変浅い。

＜埋土＞ 単層である。旧ガソリンスタンドであったため、一部土壤が化学変化を起こしている。

＜底面・壁＞ 平坦である。壁については残存部が少なく明確ではない。 ＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 搅乱部分も多く、詳細は不明だが、周辺の遺構の状況から近世以降の可能性が高い。

RD463土坑（第25図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K20eグリッドに位置している。RD462土坑と同じ検出状況である。北側、東側が搅乱を受けている。

＜重複関係＞ RD462・464土坑と重複している。RD464土坑より新しい。RD462土坑との新旧は不明である。

＜規模・平面形状＞ 104×95cmの隅丸長方形である。周辺の状況からRD458～461土坑のように東西に細長くなるものと思われる。深さは8cmで浅い。 ＜埋土＞ ほぼ単層で、一部化学変化を起こしている。 ＜底面・壁＞ 平坦である。壁は残存部が少なく明確ではないが、やや外傾して立ち上がる。

＜遺物＞ なし。

＜時期・性格＞ 搅乱部分も多く、詳細は不明だが、周辺の遺構の状況から近世以降の可能性が高い。

RD464土坑（第25図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 第20次調査区検出である。3K20d・3K20eグリッドに位置する。検出状況は、前述のRD462・463土坑と同じである。

＜重複関係＞ RD462・463土坑と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

＜規模・平面形状＞ 上面はほとんど搅乱と重複により確認できないが、底部からの推定では105×80cmでの楕円形で、深さは15cmある。 ＜埋土＞ 単層である。一部化学変化を起こしている。

＜底面・壁＞ 平坦である。やや外傾して立ち上がる。 ＜遺物＞ なし。

<時期・性格> 重複関係と埋土状況から近世よりも古いと思われるが、全容は不明で、明確にはわからない。

RD465土坑（第25図、写真図版24）

<位置・検出状況> 第20次調査区検出である。3K25jグリッドに位置する。上面は厚く擾乱層が入ってくる。<重複関係> なし。<規模・平面形状> 90×58cmと楕円形で、深さは22cmある。<埋土> 2層に分層される。<底面・壁> 断面は鍋状である。壁は自然に外傾する。<遺物> なし。<時期・性格> 埋土状況から近世以降と見られる。

RD466土坑（第25図、写真図版24）

<位置・検出状況> 第20次調査区検出である。3K21k・3K22kグリッドに位置し、上面にあった擾乱部を下げて検出したものである。周辺には柱穴状土坑が数個検出している。<重複関係> なし。<規模・平面形状> 2.16×1.04mの隅丸長方形で、22cmの深さである。軸は東西方向で、RD458～461・463土坑と同じ軸となっている。<埋土> 黄褐色土粒を含む褐色土で、当造構の西側にある近世以降の土坑埋土と大変類似している。<底面・壁> 平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。<遺物> なし。<時期・性格> 埋土状況から、近世以降に属すると思われる。

5 焼土遺構

第20次調査区から1基検出した。土坑の伴うもの、柱穴状土坑の伴うものは、ここに含まれない。

RF011焼土（第28図）

<位置・検出状況> 3K8iグリッドに位置する。周辺には柱穴状土坑がある。白色火山灰を含む柱穴状土坑が検出された面と同位面で検出した。<重複関係> なし。<規模> 37×17cmで焼土の厚さは約10cmである。<遺物> なし。<時期> 不明。現地性のものではない。

6 溝跡

第19次調査区で1条検出した。北側は現道下まで続いており、全容は不明である。

RG080溝跡（第28図、写真図版26）

<位置・検出状況> 2K20a～2K25a・2J25y・3J1yグリッドに位置し、調査区の最北端で検出された。<重複関係> RD434上坑と重複しており、RD434土坑よりも新しい。<規模・平面形状> 最長16m30cm、最幅1m、深さは22cmある。<断面形・底・壁> 溝中央部は平坦で、壁は外傾する。<方向> 南北方向である。<埋土> 単層である。<遺物> （第38図、写真図版31）近世陶磁器片（82）が出土している。<時期・性格> 不明である。

7 畦間状遺構

第20次調査区で3箇所検出した。いずれも旧沢跡上面にて見つかっており、白色火山灰が筋状に含まれ検出されたものである。

RZ016畦間状遺構（第25・27図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞ 3J22v～3J23xグリッドに位置する。 ＜重複関係＞ なし。

＜規模・方向＞ 東西4.35×南北2.6mの範囲の中で、約7条分の畦（？）が確認された。東西方向の軸である。

＜埋土＞ 1層に白色火山灰を含む。2層目はやや明るい褐色土、3層目は旧沢跡の埋土で黒味が増す。当該遺構に関わる分はこの1層と2層である。 ＜遺物＞ なし。

＜時期＞ 白色火山灰は分析の結果、十和田a降下火山灰の可能性が高いことがわかった。そのため平安時代の遺構と言える。遺構の性格については、後述するRZ017・018畦間状遺構も含めて、後章の「まとめ」で触れたい。

RZ017畦間状遺構（第26・27図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 3J25y～4K2bグリッドに位置する。

＜重複関係＞ 直接的な重複ではないが、当遺構の下にRA177竪穴住居跡が検出している。

＜規模・方向＞ 東西5.25×南北4.7mの範囲の中で、約10条分の畦（？）が確認された。畦と畦の間は20～30cmある。RZ016畦間状遺構の軸とは異なる南北方向の軸をとる。

＜埋土＞ RZ016畦間状遺構と同じである。火山灰の入る厚さは最薄で6cmほどになる。

＜遺物＞ 検出面および白色火山灰の含む1層中から土師器片が若干出土している。

＜時期＞ 白色火山灰を含むこと、RA177竪穴住居跡がこの遺構の下にあることから、平安時代の遺構と言える。

RZ018畦間状遺構（第26・27図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 3K22b～3K24cグリッドに位置する。 ＜重複関係＞ なし。

＜規模・方向＞ 東西4.1×南北3.7mの範囲の中で、約7条分の畦（？）が確認された。軸は主たる部分が東西方向だが、西側において一部南北方向と思われる畦が見受けられ、時期差のある畦間状遺構が存在していた可能性がある。ただ、直接的に重複しておらず、新旧は不明である。

＜埋土＞ これまでの畦間状遺構と同じである。 ＜遺物＞ なし。

＜時期＞ 同様に平安時代に属すると考えられる。

8 柱穴状土坑（第29・30図、写真図版26）

第19次調査区では2個、20次調査区で28個検出している。番号は調査次数に関わらず通し番号で掲載している。

第19次調査区で見つかったP11とP16は、調査区中央の掘立柱建物跡と土坑集中区との間に位置している。P11は、掘立柱建物跡の柱穴と同じような規模で、柱あたりも確認できた。やや方形を呈しており、掘立柱建物跡の一部の可能性もあるが、この他には同様の柱穴は見つかなかった。

P1～P6は、調査区東側の黒色土層が厚く残っていたところでの検出で、いずれの埋土にも白色火山灰を含む。周辺からもさらに掘り下がった面で柱穴状土坑が見つかっているが、それらの柱穴状土

坑よりも若干規模の小さいことが特徴である。

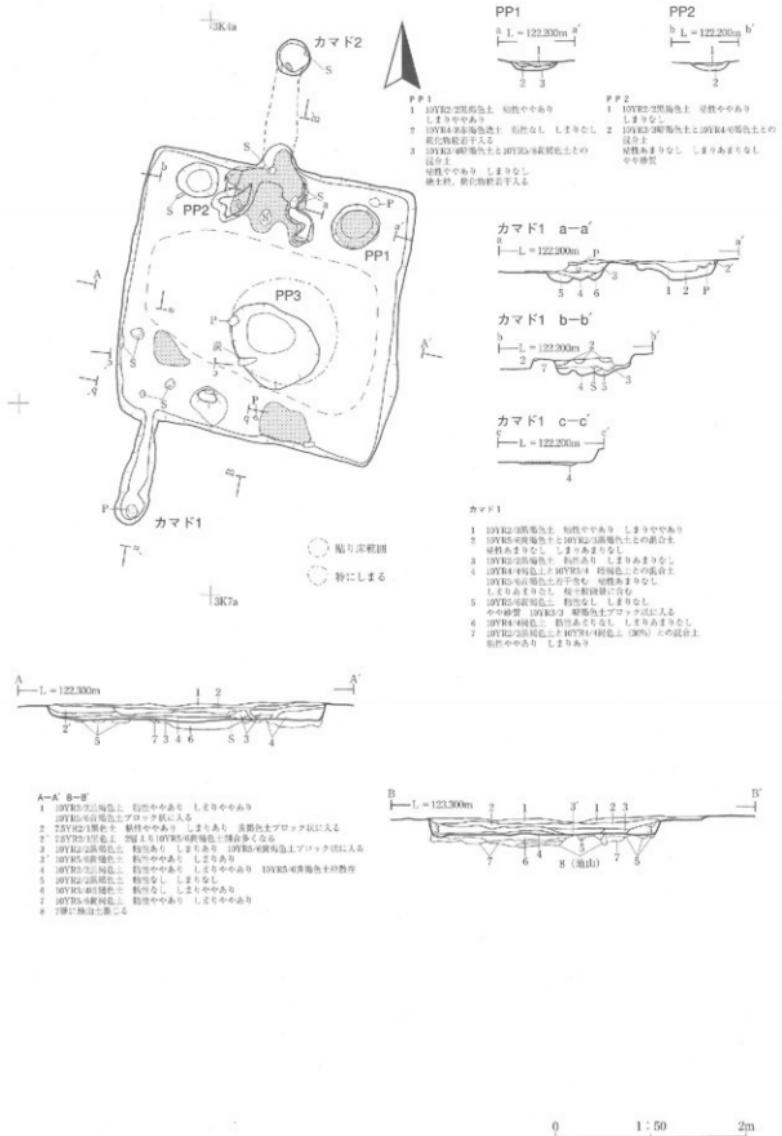
P7とP9は、その黒色土を掘り下げたところで見つかった遺構である。やや方形を呈しており、P9上部では焼土も確認された。柱あたりもあり、規模のやや大きい柱穴状土坑である。この2個の柱穴状土坑の規模や埋土、位置関係（軸）は、西側にある掘立柱建物跡と類似しており、周辺に掘立柱建物跡があった可能性が高い。しかし、周辺は搅乱範囲のもっとも大きい場所であり、建物跡となるようなこれ以外の柱穴状土坑は検出できなかった。

調査区最南東で検出したP12・P14・P29・P30は、位置関係から掘立柱建物跡となる可能性が高い。これより南側では柱穴状土坑は確認できなかったため、北側に延びるものと思われる。掘り方は円形で径35~53cm、深さは33~47cmである。柱あたりは確認できなかった。規模や埋土、柱間などから、調査区中央にある掘立柱建物跡とは時期や性格を異にするものと思われる。

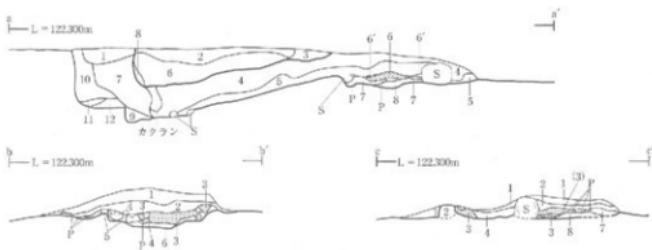
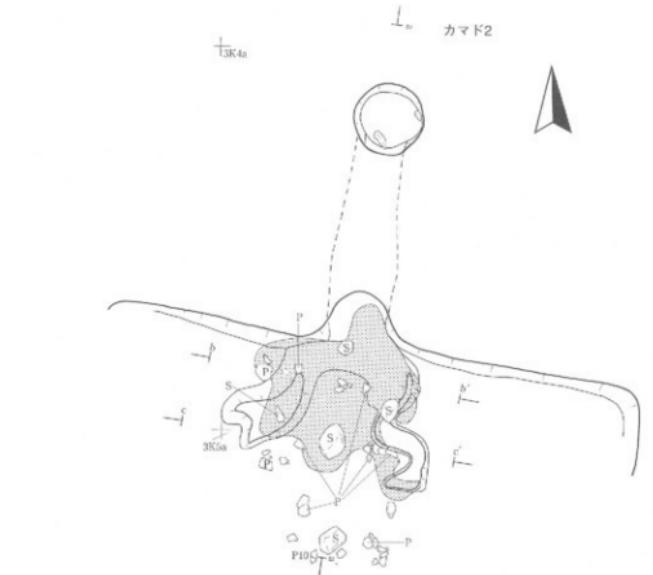
遺物は（第38図、写真図版31）、P1・P7・P9・P11・P12・P19・P25からそれぞれ上師器や須恵器の小片が出土している。柱穴状土坑から出土した遺物は、掲載した遺物が全てである。

第4表 柱穴状土坑観察表

次號	実機名	位置（グリッド）	時期	長さ（cm）	幅（cm）	高さ（cm）	底部標高（m）	備考
20	P1	3K4h	平安	39	39	12	121.870	To-a 降下火山灰含む
20	P2	3K10g	平安	36	52	26	122.000	To-a 降下火山灰含む
20	P3	3K5g	平安	38	36	36	121.940	To-a 降下火山灰含む
20	P4	3K5g	平安	40	38	36	122.010	To-a 降下火山灰含む
20	P5	3K6h	平安	35	32	14	122.160	To-a 降下火山灰含む
20	P6	3K6h	平安	68	44	12	122.160	To-a 降下火山灰含む
20	P7	3K10g	平安	78	75	22	121.930	方形の掘り方、楕円柱建物跡の可能性あり
20	P8	3K3h	平安	70	65	33	121.820	やや方形の掘り方
20	P9	3K10h	平安	70	63	45	121.820	上部焼けあり、方形の掘り方、掘立柱建物跡の可能性あり
20	P10	3K3h	平安	34	32	38	121.870	RD419と隣接 RD419よりも古い
19	P11	3J11w	平安	50	42	38	121.680	RD436、RD437と連続状況類似
20	P12	3K21k	平安	45	43	47	121.650	掘立柱建物跡の可能性あり
20	P13	3K21n	平安	32	37	21	121.800	
20	P14	3K20g	平安	35	31	35	121.780	掘立柱建物跡の可能性あり
20	P15	3K8h	平安	56	44	39	121.850	やや方形の掘り方
19	P16	3J15w	平安	39	38	26	121.840	RD435、RD436と連続状況類似
20	P17	3J21w	不明	73	55	18	121.840	
20	P18	3J24v	不明	34	28	19	121.780	
20	P19	3J22v	不明	45	28	17	121.780	
20	P20	3J21v	不明	63	49	23	121.780	
20	P21	3J24v	不明	32	37	13	121.820	
20	P22	3J25	不明	44	30	13	121.810	
20	P23	3J25u	不明	31	39	20	121.880	
20	P24	3J23t	不明	24	23	14	121.820	
20	P25	3J24y	平安	31	23	16	121.590	遺物出土 RA177の北側より検出
20	P26	3K25b	平安	32	24	14	121.530	RA177の北側より検出
20	P27	3K8h	平安	32	26	31	121.820	RA175と直接
20	P28	3K8j	平安	32	30	30	121.850	RA175と直接
20	P29	3K20j	平安	36	33	33	121.800	掘立柱建物跡の可能性あり
20	P30	3K20j	平安	53	(40)	40	121.700	掘立柱建物跡の可能性あり



第7図 RA173堅穴住居跡（1）



カマド2 a-a'

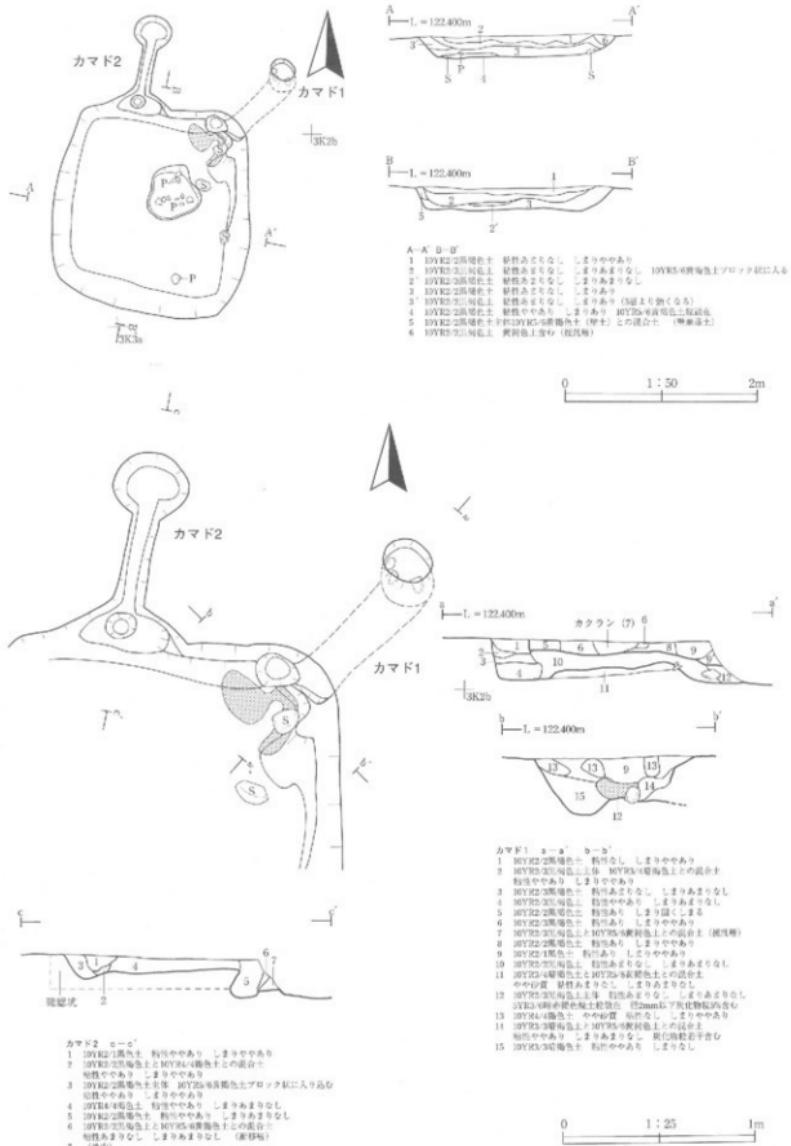
- 1 3YTC2-3黒褐色土 烧物やあり しまりやあり 3YTC2-5黒褐色土灰青色
2 3YTC2-5黒褐色土 烧物やあり しまりややあり やや砂質
- 3 3YTC2-6黒褐色土 烧物やあり しまりややあり
- 4 3YTC2-7黒褐色土 烧物やあり しまりややあり
- 5 3YTC2-8黒褐色土 烧物やあり しまりややなりし 3SYTC6-6黒褐色板瓦灰青色
- 6 3YTC2-9黒褐色土 烧物やややす しまりややあり やや砂質
- 7 3YTC2-10黒褐色土 烧物やややす しまりややあり 灰青色板瓦
- 8 3YTC2-11黒褐色土 烧物やややす しまりややなりし 灰青色板瓦
- 9 3YTC2-12黒褐色土 灰青色板瓦 3YTC2-13灰青色板瓦灰青色
10 3YTC2-14黒褐色土 灰青色板瓦 3YTC2-15灰青色板瓦灰青色
11 3YTC2-16黒褐色土 烧物やややす しまりややなりし 3YTC2-17灰青色板瓦
12 3YTC2-18黒褐色土 烧物やなし しまりやなし

カマド2 b-b', c-c'

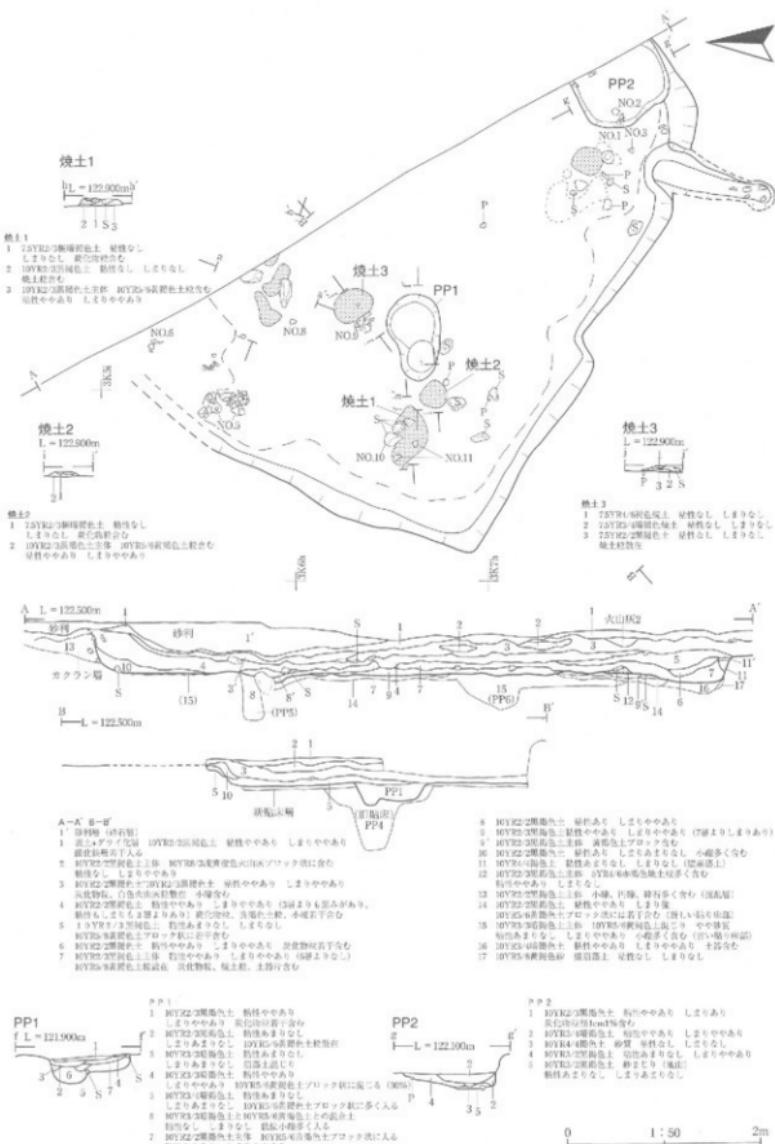
- 1 3YTC2-2黒褐色土 烧物あり しまりあり
- 2 3YTC2-3黒褐色土 烧物あり しまりやめりなし 3SYTC4-6黒褐色土灰青色
3 3YTC2-4黒褐色土 烧物あり しまりやめりなし
- 4 3YTC2-5黒褐色土 烧物ややあり しまりなし
- 5 灰青色板瓦ソリッタ、灰青色板瓦
- 6 3YTC2-6黒褐色土 烧物ややあり しまりややあり
- 7 3YTC2-7黒褐色土 烧物ややあり しまりややなりし
- 8 3YTC2-8黒褐色土 灰青色板瓦 (焼成)
- 9 3YTC2-9黒褐色土 灰青色板瓦 3YTC2-10黒褐色土ブロック灰青色
10 3YTC2-11黒褐色土上厚3YTC2-12黒褐色土ブロック灰青色
11 3YTC2-13黒褐色土 烧物ややなりし 3YTC2-14灰青色板瓦
12 3YTC2-15灰青色土 烧物なし しまりなし

0 1:25 1m

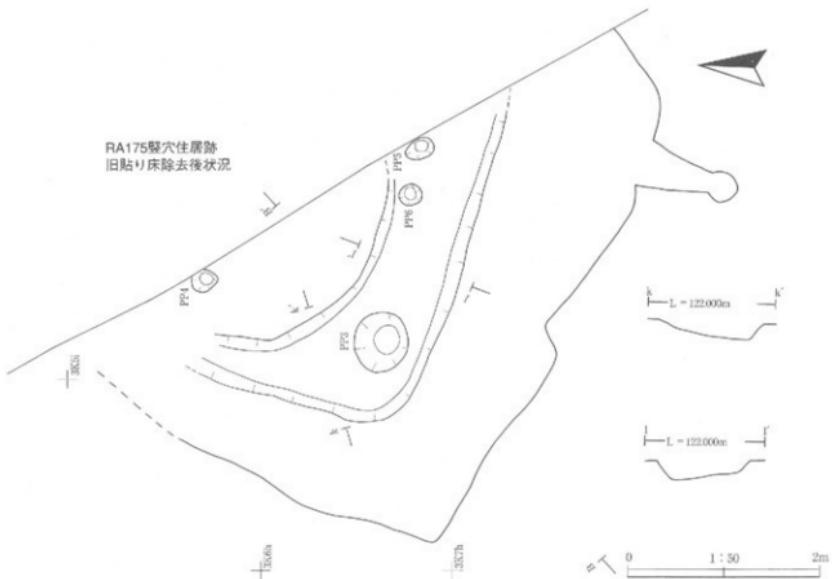
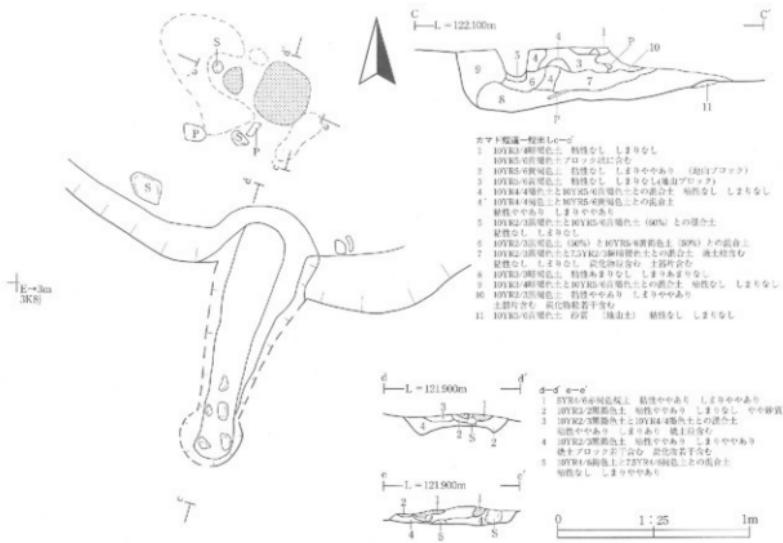
第8図 RA173壁穴住居跡（2）



第9図 RA174豎穴住居跡



第10図 RA1705堅穴住居跡（1）

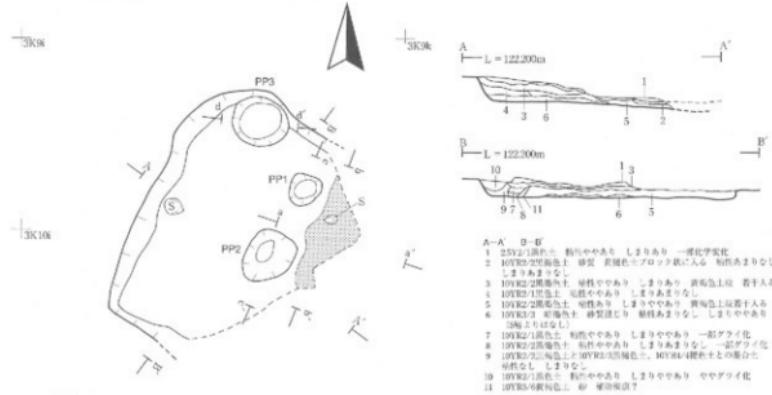


第11図 RA175窓穴住居跡（2）

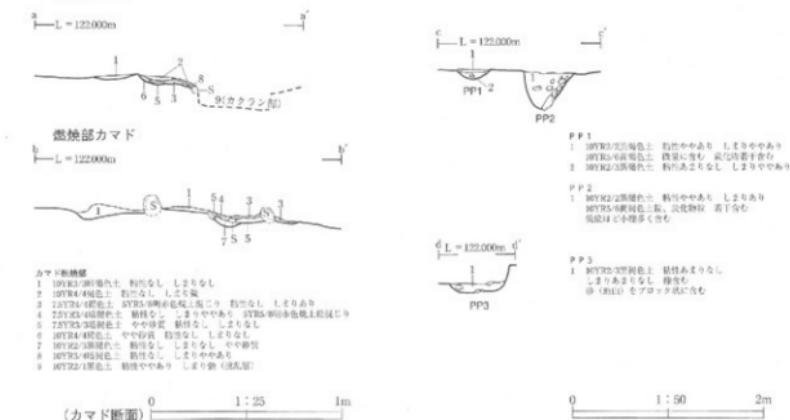
RA175壁穴住居跡・北側燃焼部



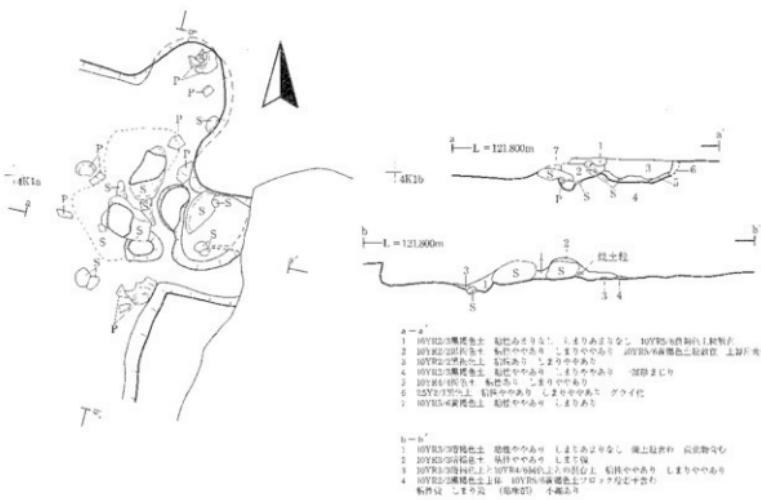
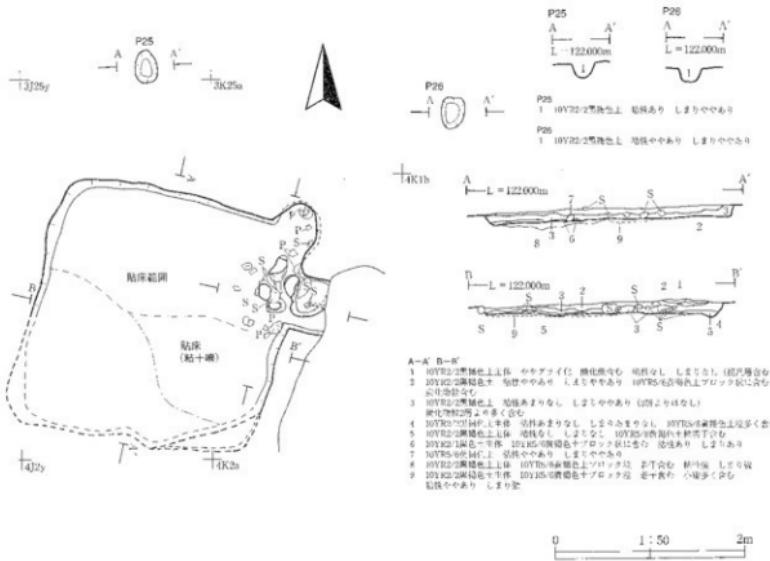
RA176壁穴住居跡



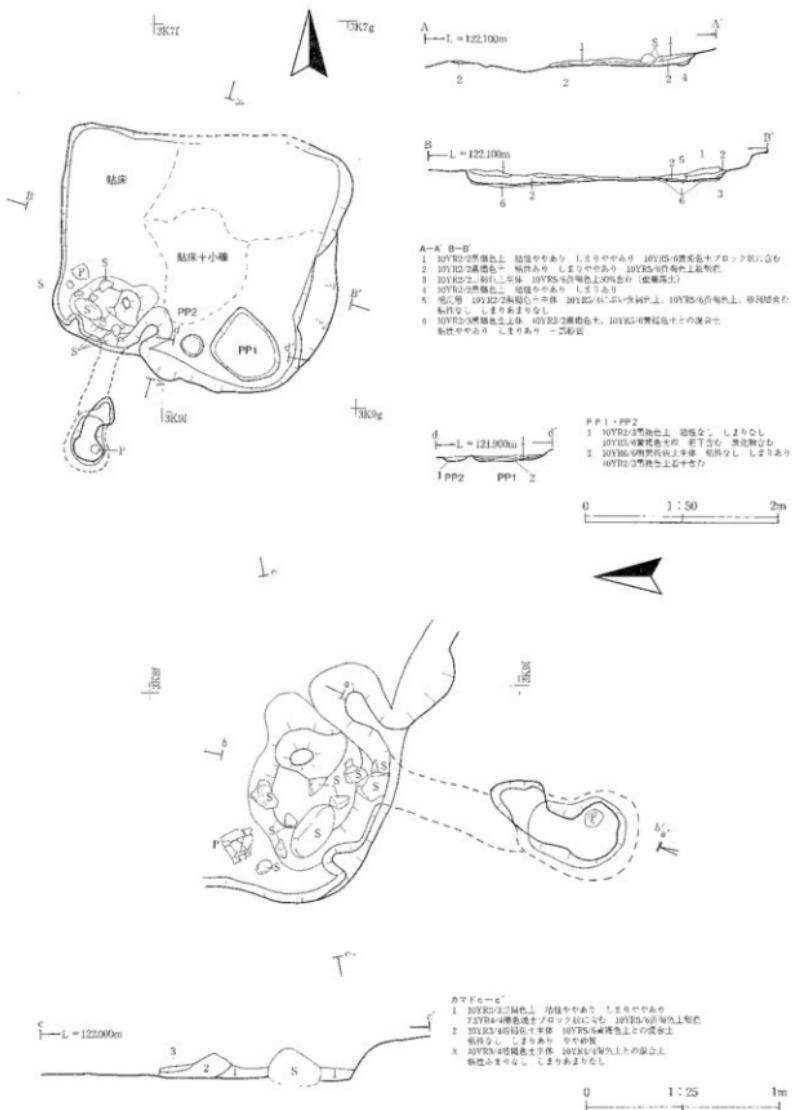
燃焼部カマド



第12図 RA175壁穴住居跡（3）、RA176壁穴住居跡

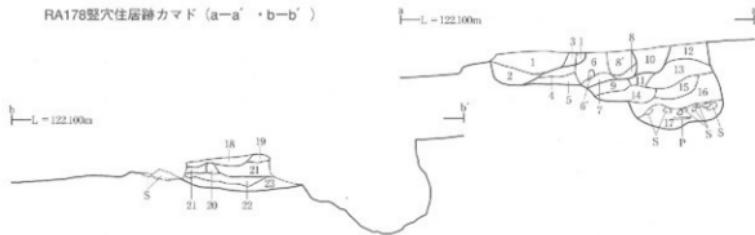


第13図 RA177壁穴住居跡、P25・P26



第14図 RA178堅穴住居跡（1）

RA178堅穴住居跡カマド (a-a'・b-b')

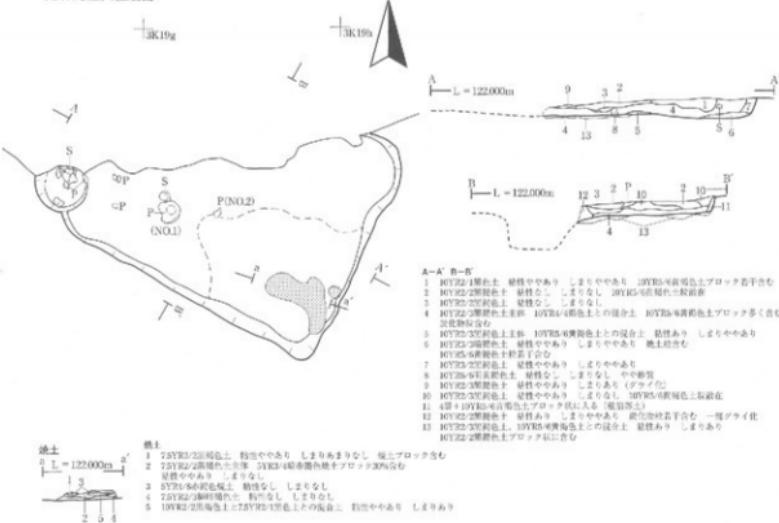


セカンドルーム

- 1 HOY22/6粘土質色土・堆土上・堅性あり・しまりあり
- 2 HOY27/4粘土質色土・堆土上・砂混・固なし・しまりなし
- 3 HOY23/2粘土質色土・堆土上・堅性あり・しまりやあり
- 4 HOY23/2粘土質色土・堆土上・HOY22/6粘土質色土との混合土 (30~35%)・堅性やあり・しまりやあり
- 5 HOY23/3堅約土・堅性やあり・しまりありなし
- 6 HOY23/3堅約土・堅性やあり・しまりありなし
- 7 HOY25/6堅約土とHOY23/6粘土質色土との混合土・堅性やあり・しまりやあり
- 7 HOY23/3堅約土・堅性やあり・しまりありなし・10TR5/6堅約色土・若干含む
- 8 HOY23/3堅約土・堅性やあり・しまりありなし・10TR6/6堅約色土・多く含む
- 9 HOY25/6堅約土・堅性やあり・しまりありなし
- 9 HOY22/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 10 HOY26/6堅約土・堅性やあり・しまりやあり (堆土上)
- 11 HOY22/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 12 HOY23/4堅約土・堅性やあり・しまりやあり・HOY23/6堅約土ブロック状に若干含む
- 13 HOY22/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 14 HOY21/6堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 15 HOY22/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 16 HOY22/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 17 HOY23/3堅約土・土塊多
- 18 HOY23/3堅約土・土塊多・HOY23/6粘土質色土との混合土・堅性やあり・しまりやあり
- 19 HOY25/6堅約土・堅性やあり・しまりやあり
- 20 HOY27/4粘土質色土・堆土上・堅性なし・しまりなし
- 21 HOY23/2粘土質色土とHOY25/6堅約色土との混合土・堅性やあり・しまりやあり
- 22 HOY23/3堅約土・堅性やあり・しまりやあり・HOY23/6堅約土・若干含む
- 23 HOY25/6堅約土・堅性やあり・しまりあり・10TR2/6堅約色土ブロック状に若干含む

0 1:25 1m

RA179堅穴住居跡



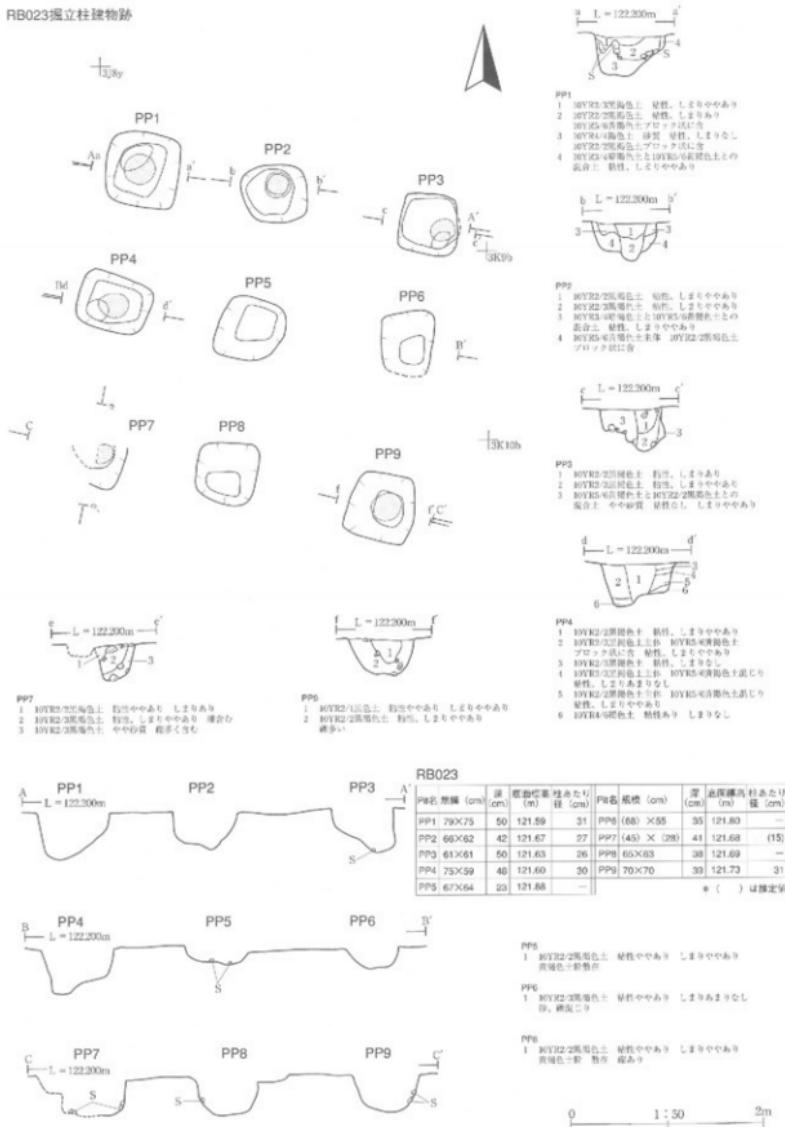
地盤

- 1 7STR2/2堆積土・堅性やあり・しまりあまりなし・堆土ブロック含む
- 2 7STR2/2堆積土・土塊・3STR3/6堅約色土チャップ30%含む
- 3 2STR2/2堆積土・堅性やあり・しまりなし
- 4 7STR2/2堆積土・堅性なし・しまりなし
- 5 10YR2/2堆積色土・堅性やあり・しまりやあり

0 1:50 2m

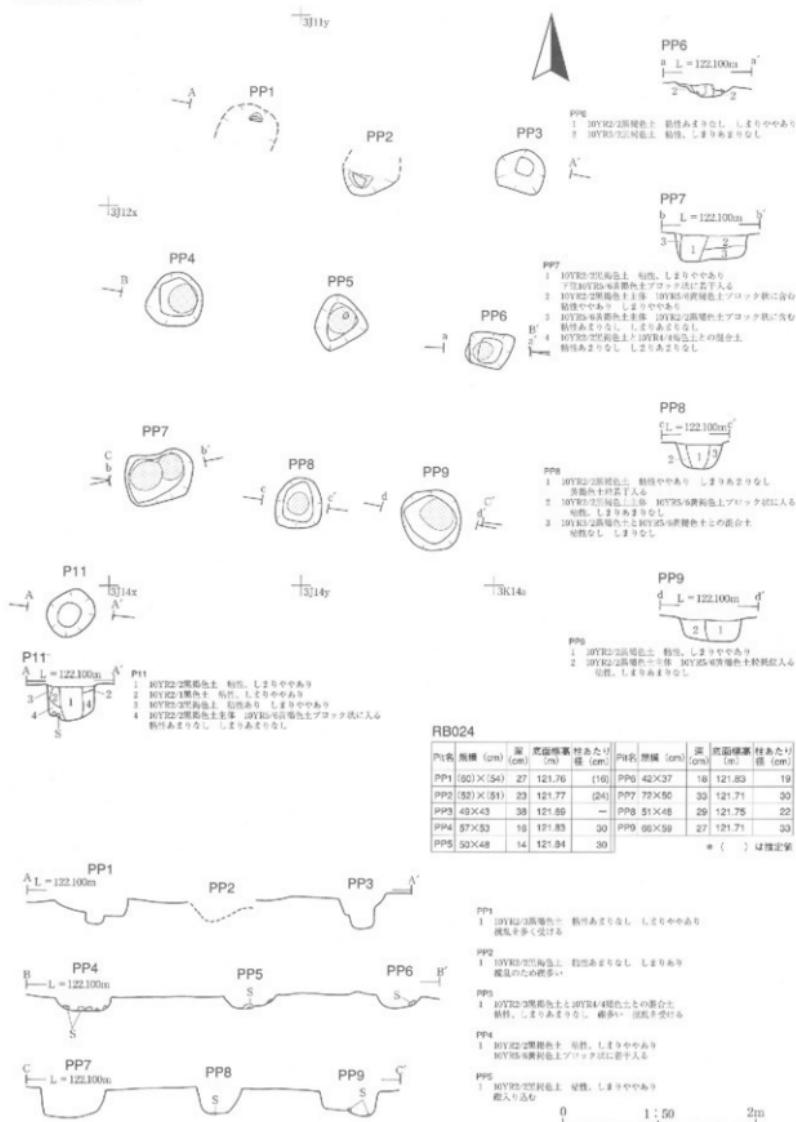
第15図 RA178堅穴住居跡 (2)、RA179堅穴住居跡

RB023掘立柱建物跡

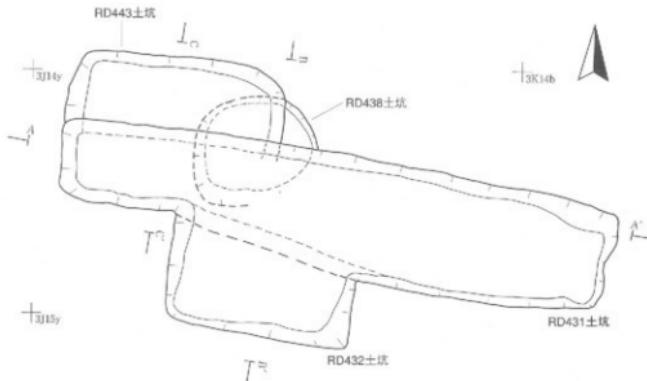


第16図 RB023掘立柱建物跡

RB024掘立柱建物跡



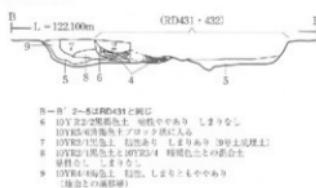
第17図 RB024掘立柱建物跡、P11



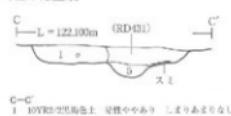
RD431土坑



RD438土坑

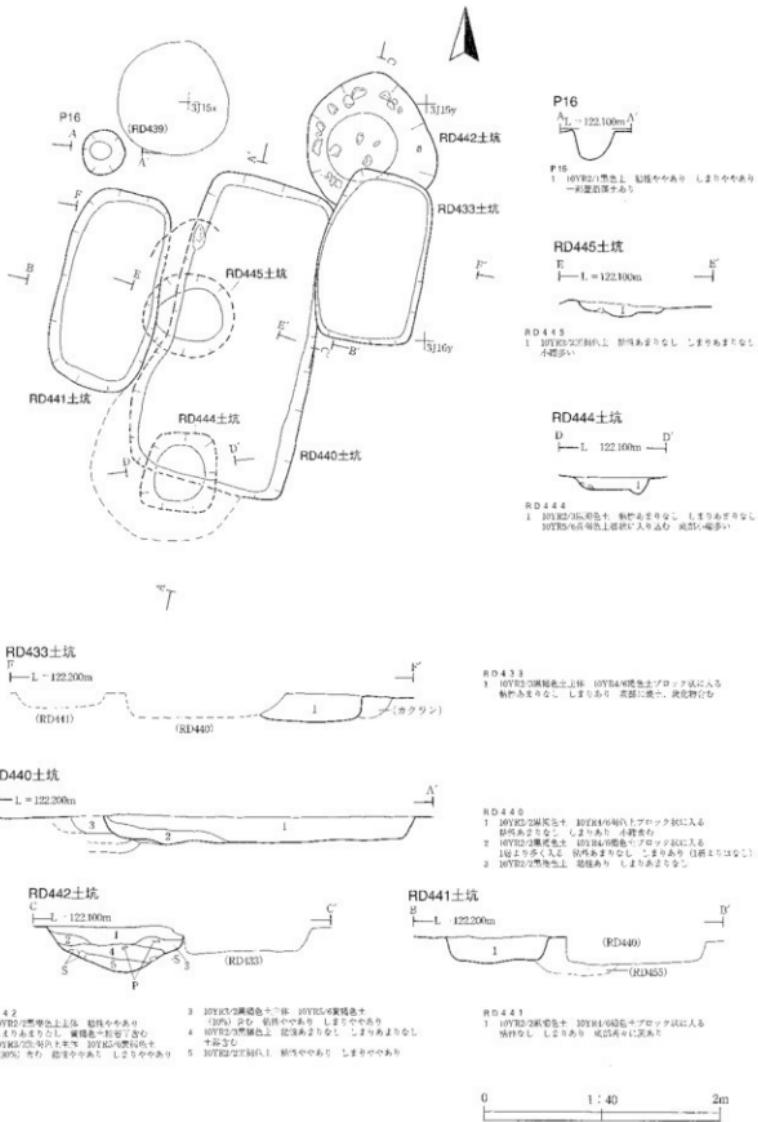


RD443土坑

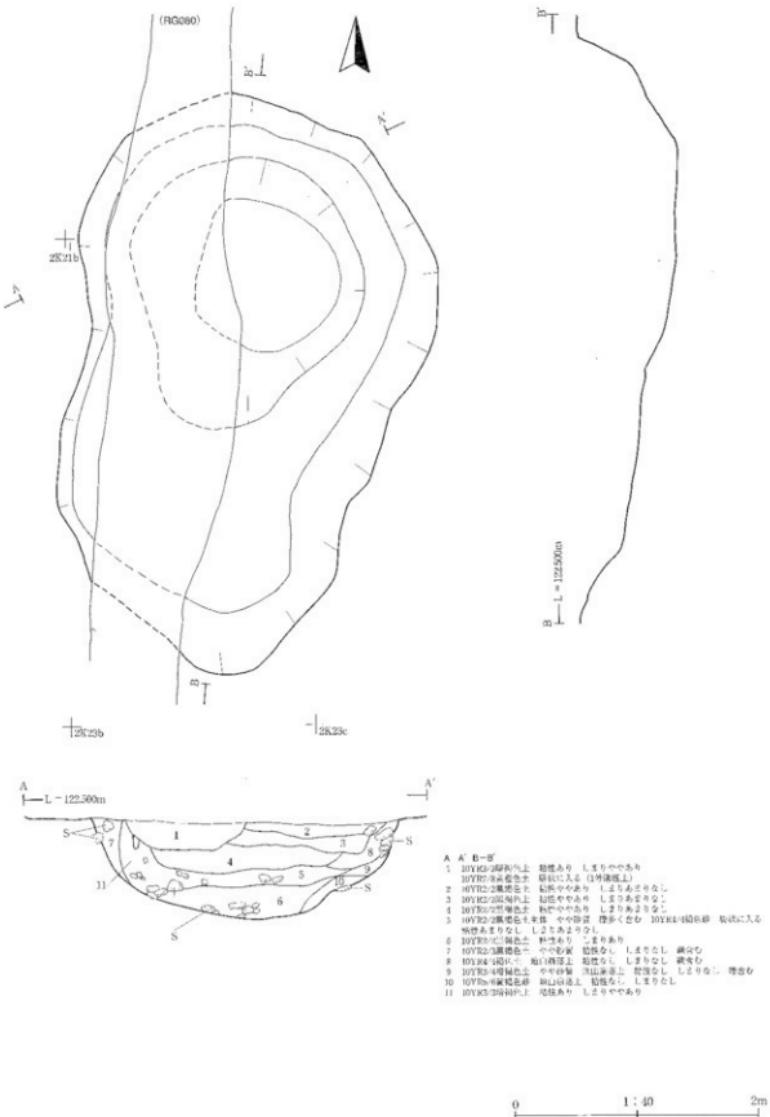


0 1:40 2m

第18図 RD431・432・438・443土坑

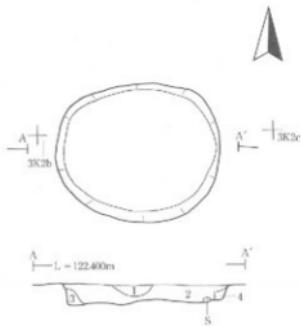


第19図 RD433・440~442・444・445土坑、P16



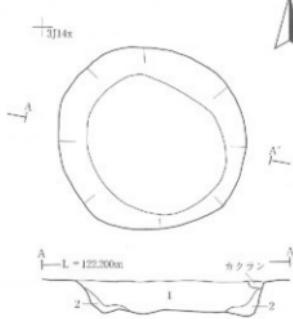
第20図 RD434土坑

RD435土坑



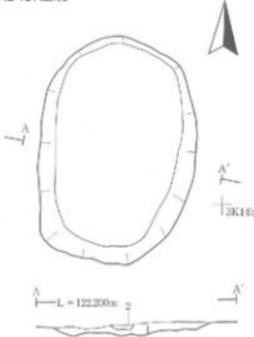
- R D 4 3 5
 1 30YR2/1褐色土 動物あり しまりややあり
 2 30YR2/2褐色土 動物あり しまりややあり
 3 30YR2/3褐色土 動物あり しまりややあり (口端よしなし)
 4 30YR4/0褐色土 動物ややあり しまりややあり (腐殖質土)

RD436土坑



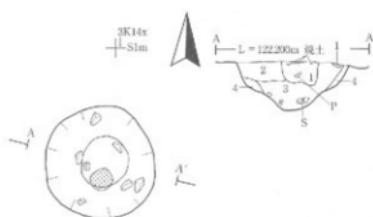
- R D 4 3 6
 1 10YR2/2褐色土 動物ややあり しまりややあり
 褐糞土上粗粘石 在埋地1ノリブロック群に入る
 2 10YR4/4褐色土上土層 10YR4/4褐色土, 10YR2/2褐色土との
 遷移土 キヤツ貝 嵌植あまりなし。しまりあり 前述上

RD437土坑



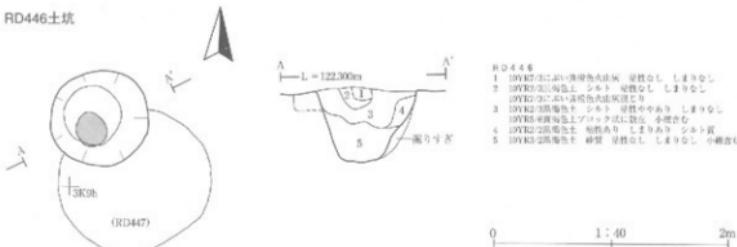
- R D 4 3 7
 1 10YR2/1褐色土 粒状ややあり しまりあり 土器含む
 2 10YR2/2褐色土 粒状なし しまりあり (腐殖土)

RD439土坑

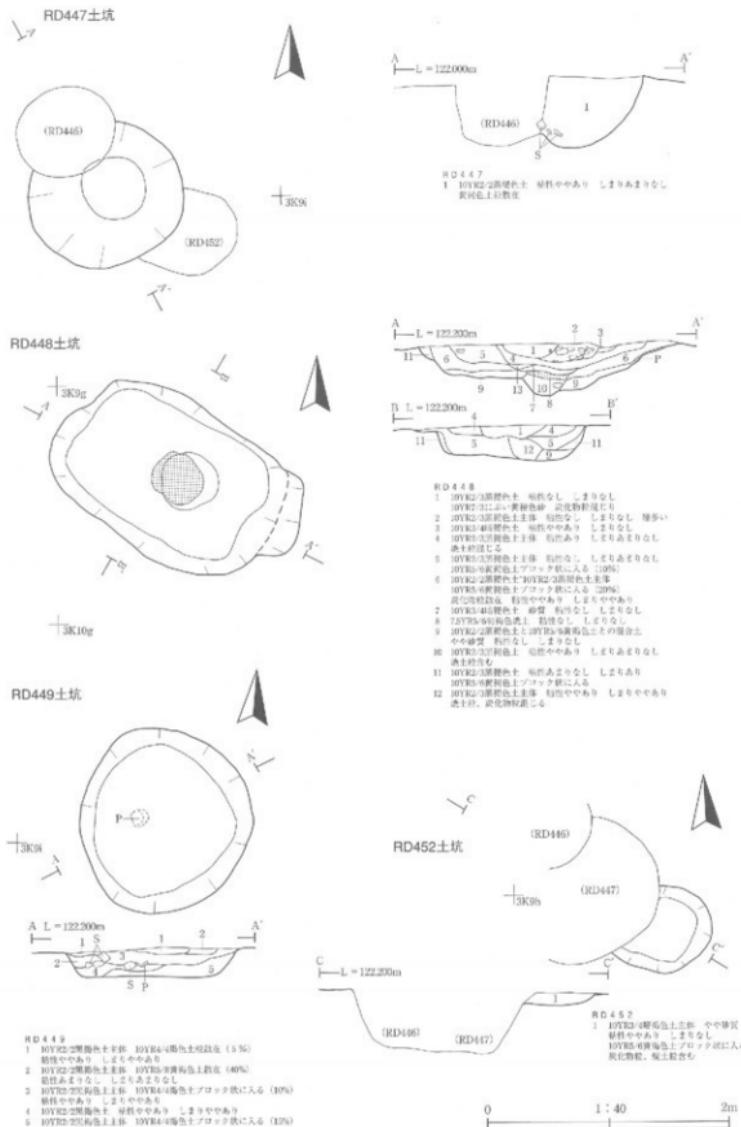


- R D 4 3 9
 1 10YR2/2褐色土上粗粘石 動物なし
 しまりなし 上面被土灰岩上 粗粘土
 2 10YR2/2褐色土 10YR2/6褐色土色土粒 動物
 3 10YR2/3褐色土 動物なし
 4 10YR2/3褐色土上と10YR2/6褐色土との混合土
 動物なし しまりなし 粗粘土

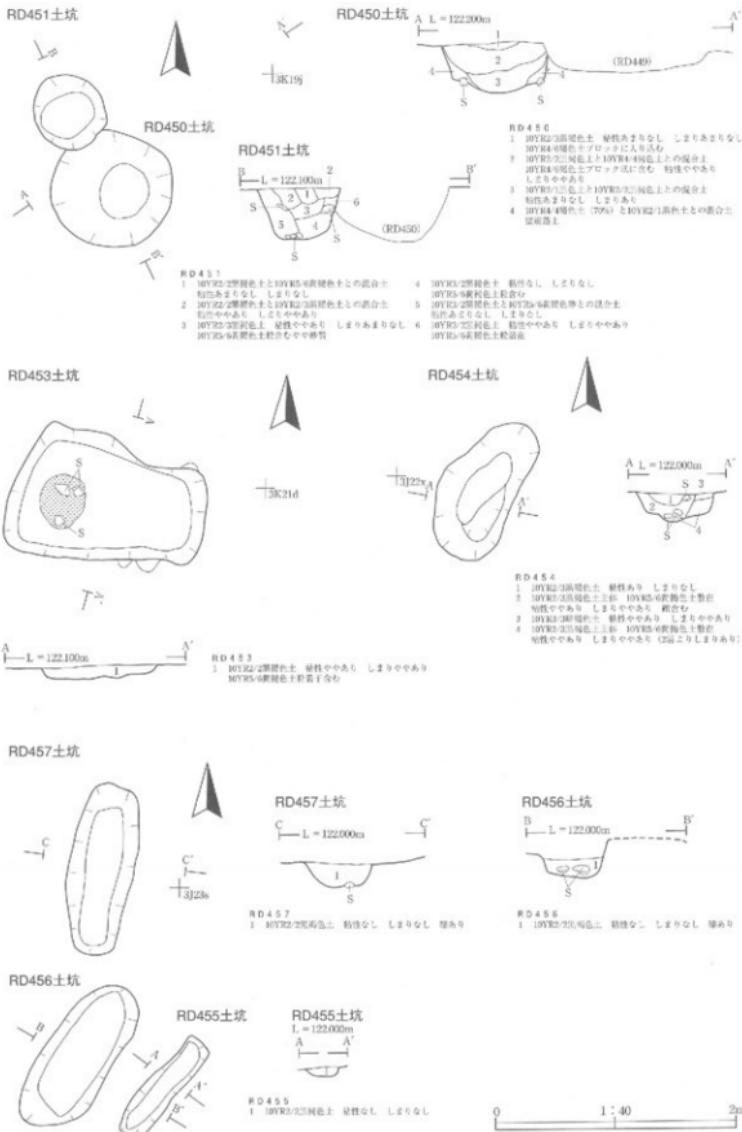
RD446土坑



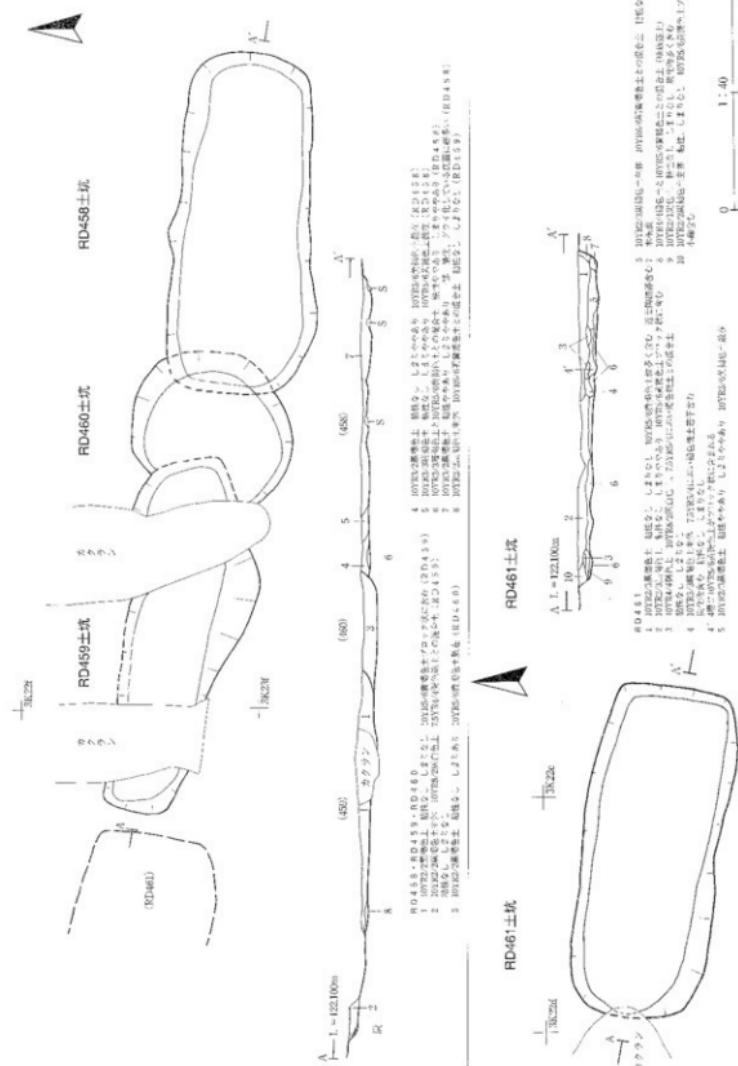
第21図 RD435~437・439・446土坑



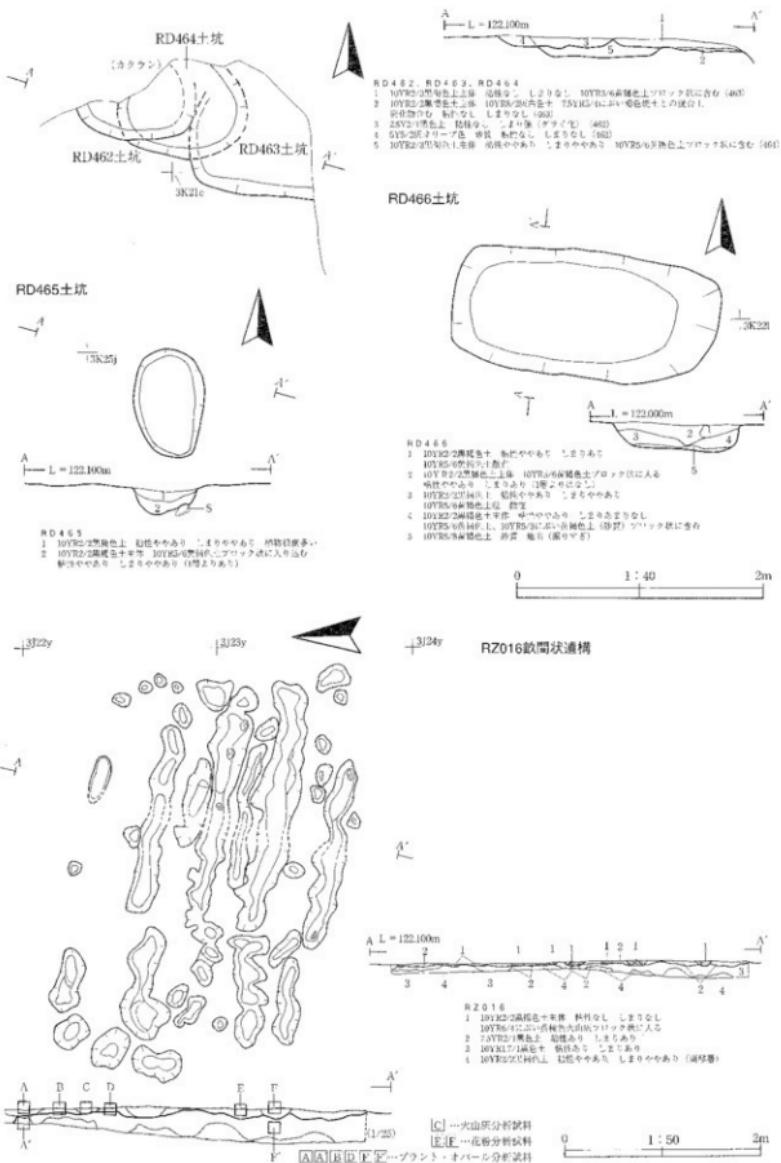
第22図 RD447~449・452土坑



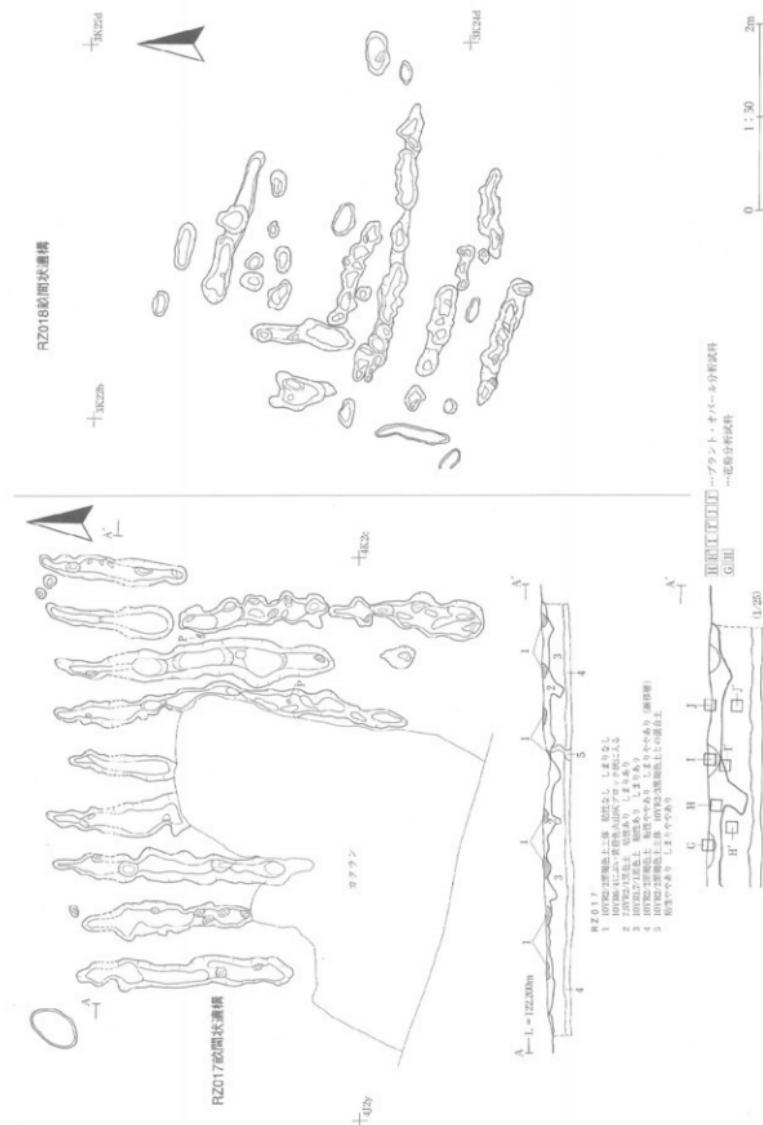
第23図 RD450・451・453~457土坑



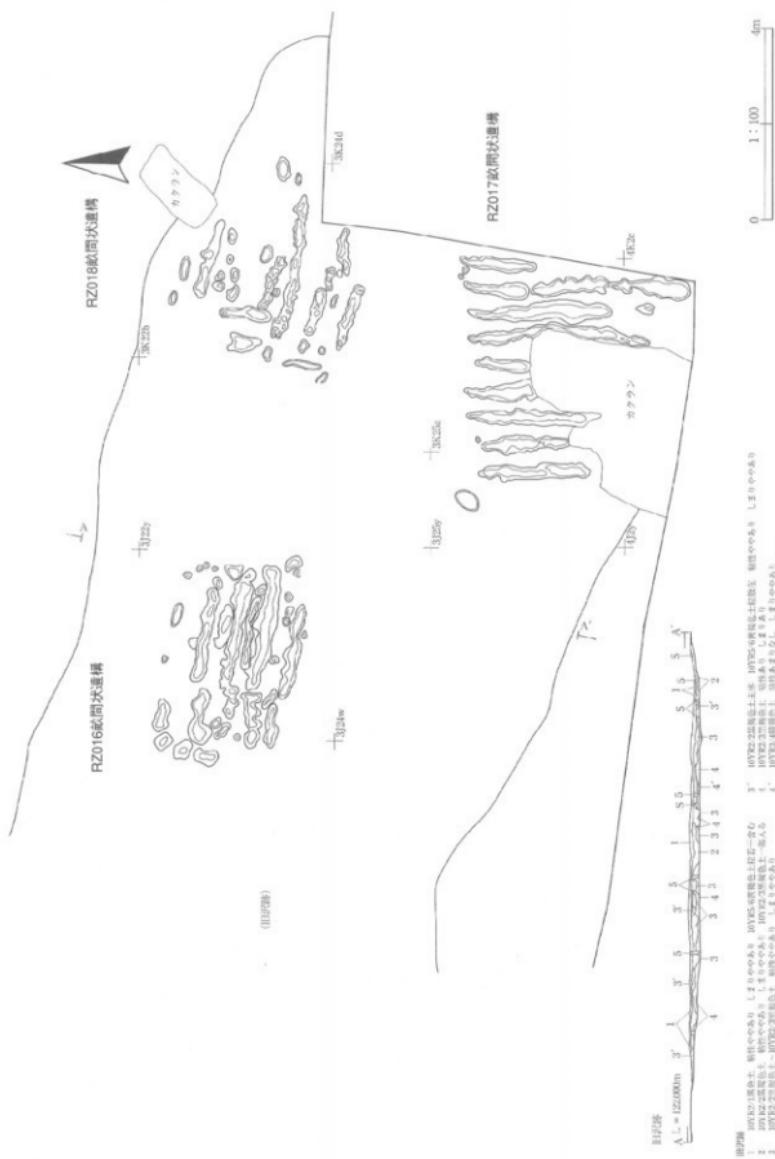
第24図 RD458～461土堤



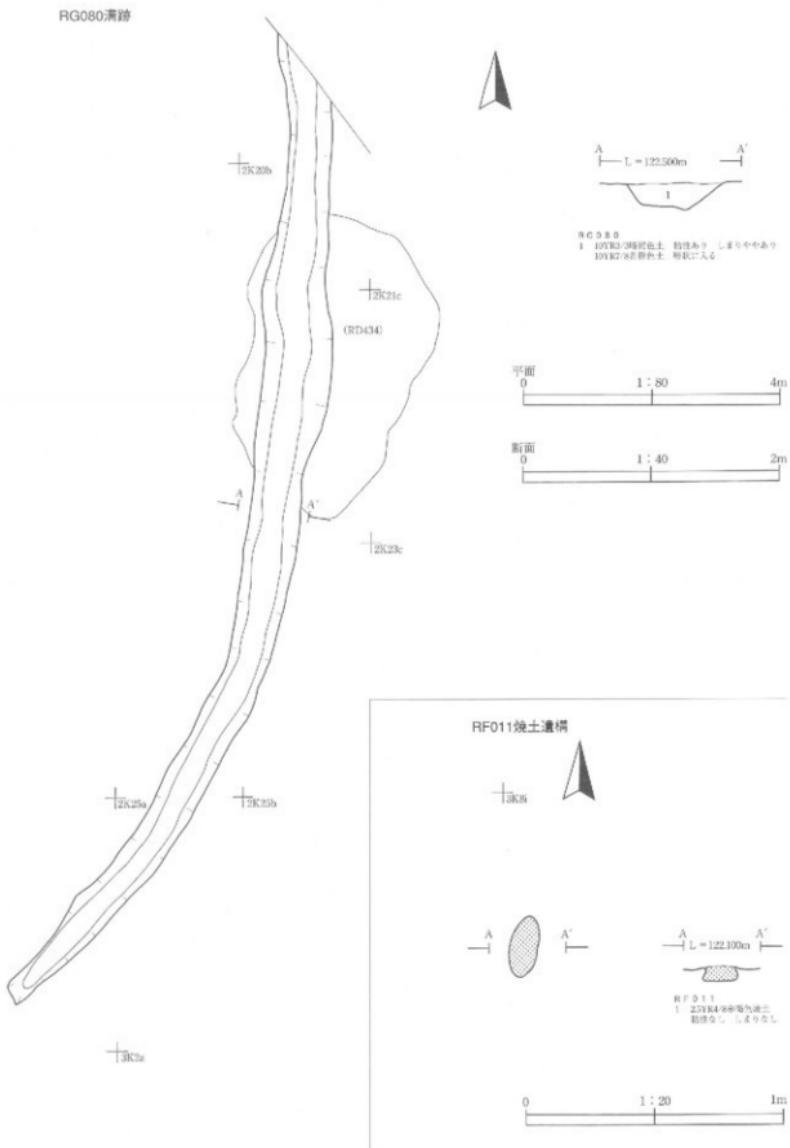
第25図 R462~466土坑、RZ016断面構造



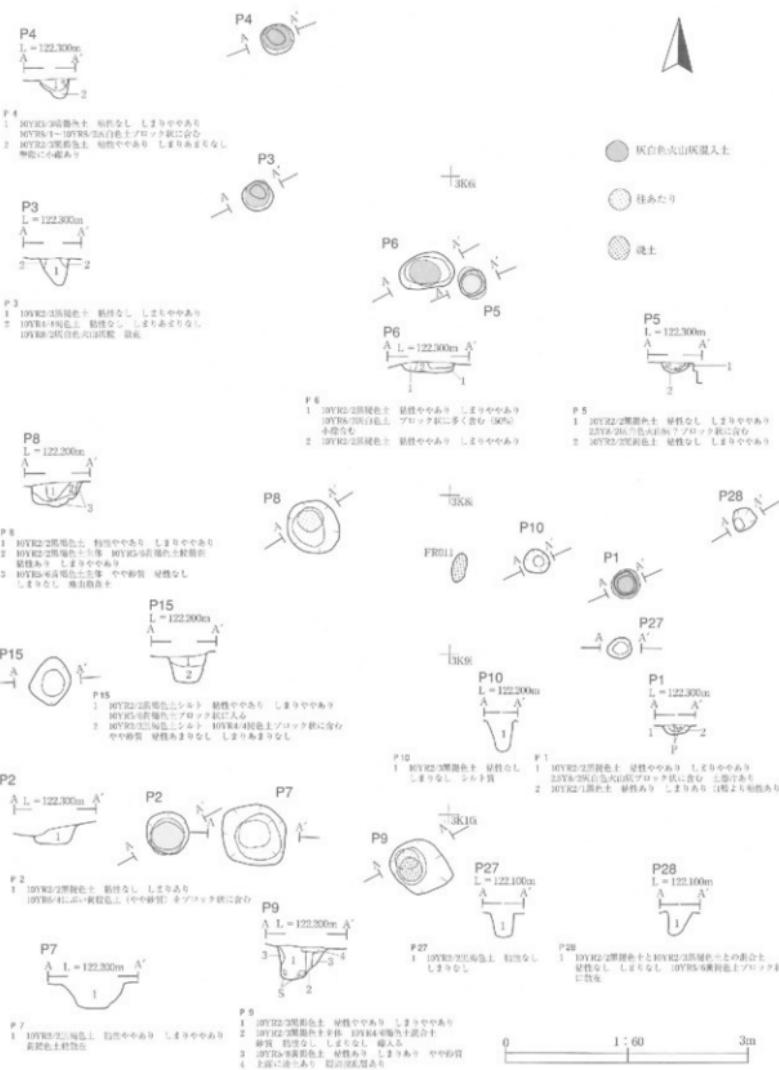
第26図 RZ017・018斜面状遺構



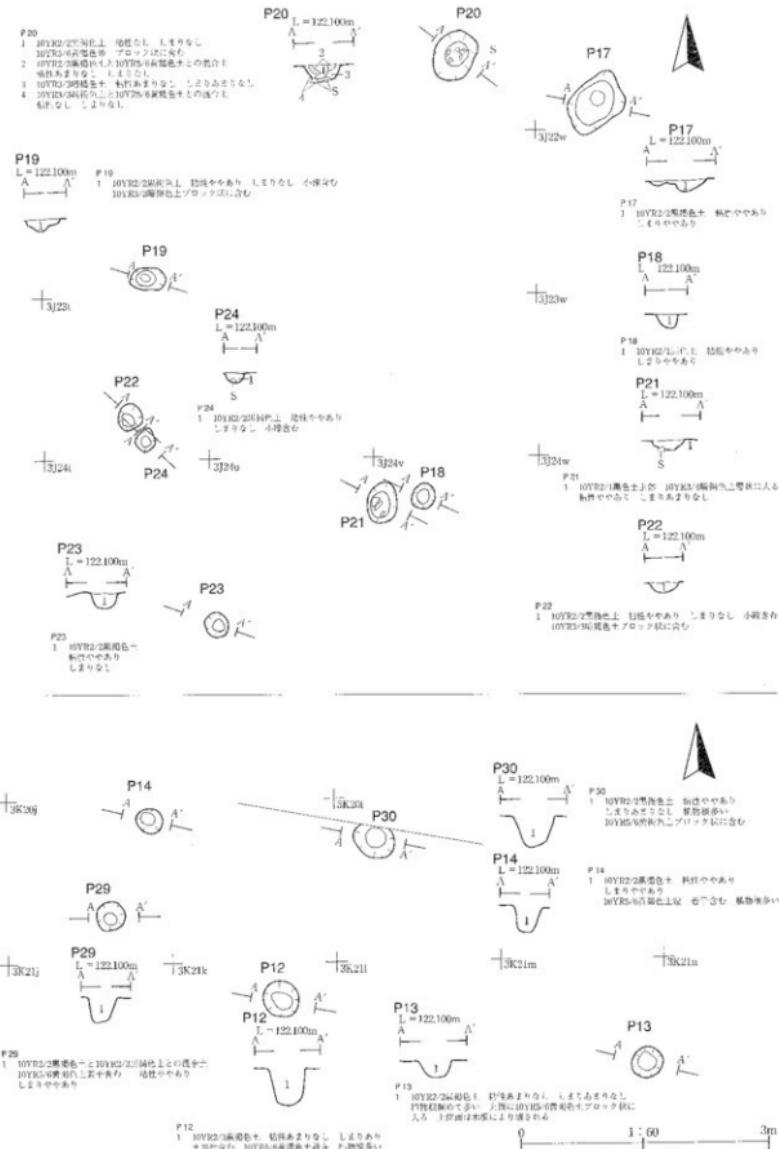
第27図 断面状構造 (縮小図)



第28図 RG080溝跡、RF011焼土遺構



第29図 柱状土坑群 (1)



第30図 柱状土坑群 (2)・(3)

V 遺 物

今回の調査では、土師器および須恵器の出土重量は、土師器が10,353.5g、須恵器が2,884.3gで、約3倍強土師器が占めている。これまでの細谷地遺跡の出土遺物は、平安時代をはじめ縄文時代や奈良時代などの遺物があるが、本次調査では平安時代と近世の遺物のみである。

1 平安時代の遺物

(1) 土 器

<坏>

土師器（内面黒色処理）

体部は緩く丸味を持ちながら立ち上がり、口唇部はやや外反するものが多い。口径部が13cm以下もしくは15cmを超えるものは、体部の丸味を持たずに立ち上がるようである。外面調整で以下のように分かれる。

A 体部下端および底面に再調整を施したもの。

a 回転ヘラケズリ調整（1・16・46）

b 手持ちヘラケズリ調整（13）

B 底面が回転糸切りで再調整のないもの。口唇部がやや外反するものが多い。17のように一部強く外反するものもある。

上師器（外面黒色処理）

3点のみの出土である。内外面にミガキが施され、黒色処理される。内黒と同様、48・65はやや直線的に立ち上がる。いずれも口唇部はやや外反気味に作られる。

土師器（非黒色処理）

底面が回転糸切りで再調整のないものである。小破片が多く接合できたものが少ない。内黒の土師器に比較して、体部の丸味を持つものが多くなく、直線的なものが多い。口唇部も内黒の上師器よりも外反しているものが多い。45は、器面の色が赤みの多い橙色で、他の土師器とは土質を異にする。91・93の内面はロクロ成形時のロクロ痕を明確に残している。また、91は、胎土に金雲母を多く含み、やや砂質の粗いものを使用している。93は底部のみの出土だが、残存している部分から推定すると、今回の調査で出土した中でもっとも体部に膨らみを持つもので、似たような土器はない。

須恵器

須恵器の坏は、出土点数が極めて少なく、本報告書では4点掲載した。略完形のまで出土した2以外は、ほとんど接合していない。この1点のみでは何も語れないが、内黒の土師器と法量に大差はない。底部は回転糸切りで再調整はない。

<高台付坏>

1点のみの出土である。内面は黒色処理が施される。皿部分はやや浅く、やや高めの「ハの字」の高台が付く。

<堷>

上師器（ロクロ成形）

ロクロ成形のものは数が少ない。21は、くの字に強く屈曲する形状である。肩上部までしか残存しておらず、胴部の調整は不明である。55は、口唇部がやや外傾し、内面に浅い沈線がめぐる。胴部が

やや丸味を持ち、肩から底部にかけてヘラケズリで調整が施される。底部は摩滅して判断しにくいが、最初に回転ヘラケズリか回転糸切りで切り離した後、最終的にナデ調整が行われている。内面はミガキを全体に入れて、黒色処理が施されている。

土師器（非ロクロ成形）

18点掲載した。小型のものに、12・56がある。どちらも口縁部は短く外反する。56は、寸胴型の底部がやや大きめで胴部立ち上がり部分よりも外にはみ出す形状を持つ。80は底部のみであるが、56と同様の形状のものと思われる。

中型は52や53であるが、胴部から口縁部へは更にゆるやかに外傾する。

大型では、5や22が最も接合した土器である。5は口唇部内面に浅い沈線をめぐらし、頸部の括れを意識した形状で、やや胴部が張り丸味を持つ。22は、短い口縁部で胴部は張らず、細身の長胴壺である。

器面調整は、小型～大型のいずれもケズリ、ナデ、ハケメが施される。

<鉢>

1点のみの出土である。19は土師器の体部破片である。内面が黒色処理され、外面は体部下位からケズリの再調整が施される。本調査区と道路を挟んで同時期に調査された向中野館遺跡では、同様の形状の鉢が出土している。

<長頸瓶・広口壺（須恵器）>

16点掲載した。長頸瓶は73と97のみである。79は広口壺か。その他は口縁部の小破片で形状も不明であり判断できない。無調整が多いが、ケズリなどの調整が入るもの（4・24・28）などもある。

<壺（須恵器）>

12点掲載した。全てにおいて、外面は平行タタキ目が施され、同じ工具で交差するように叩かれたもの（33・62・66・67・72・77など）がある。内面は以下のように分かれる。

- a 平行の当て具（33・59・74・77）
- b 平行当て具の他に放射状（菊花状）の当て具を用いられたもの（34）
- c 平行当て具で6角形のよう押さえられたもの（58・62）
- d 文様のない、布などを用いられたもの（67・72）

（2）石 器（6～8・35・36・42・43・54）

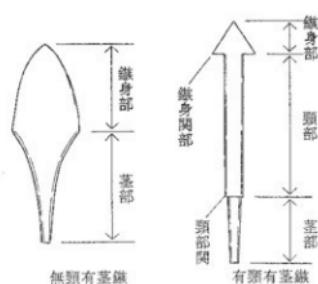
8点掲載した。今回、調査区内で出土した全てである。いずれも堅穴住居跡内のカマドや床直からの出土である。砥石や磨石として利用されていたものが多く、石質は安山岩や凝灰岩などである。

（3）鉄 製 品

9の鉄鎌1点のみの出土である。RA173堅穴住居跡の埋土に焼土が堆積していたPPIの底部から出土した。錆が多く付着していたが、原形はとどめている。この鉄鎌は、鍔身がやや開きながら直線的にのびる側縁を持っており、津野氏の言う「方頭斧箭式」と呼ばれる形状のものである。同氏は形状からI式からIII式の3つに分類している。その中の「方頭斧箭I式」は、「刃部幅2～3cm程、鍔身長5～8cm程で、細長い形状のものとする。刃部幅と間幅差は少なく側縁は直線なものである。」とする。本遺物は、長さ5.9cm、刃部幅2.2cm、鍔部闊は角闊で、茎部は欠損しているが、形状等からこのI式の中に入るようである。年代は、同氏によると近畿地方では7世紀代から見られ、I期（8世紀～9世紀前）、II期（9世紀後半～11世紀前半）までは存在確認され、III期には見られなくなるも

のようである。方頭式は北関東を中心に分布し、東北地方でも9世紀後半～10世紀代に少数だが確認できるようである。

岩手県では、島田II遺跡で方頭式の鉄鎌が1点出土している。報告者は形状から「方頭斧箭II式」の範疇に収めている。方頭式は確認数が少ないため出土例がなく詳細は不明だが、住居跡の年代観と矛盾はなさそうである。



鉄鎌部分名称図

<引用: 岩垣文2006「河崎の櫛擬定地
発掘調査報告書」474集Ⅲ-10より>

頭	柳葉	三角形	長三角形	五角形	片刃鋸
I	II	I	III	I	II
方頭斧箭	鑿根	雁又			
I	II	III			
				三角形 五角形	

鉄鎌分類図 <引用: 津野仁氏

2001 「土曜考古」集25号より>

2 近世の遺物

〈近世陶磁器〉

近世陶磁器は、調査区全体から総重量566.2g出土している。そのうち15点を掲載した。

産地は、瀬戸・美濃産、肥前産、在产地？(不明)が出土している。外面に草花文が描かれているものが多く、101は肥前産で18世紀代、見込みに五弁花纹が描かれた103も同時期と見られる。

今回検出された遺構では、時期不明の近世以降と見られる土坑も多くあり、これらの遺物と同時期の可能性もある。

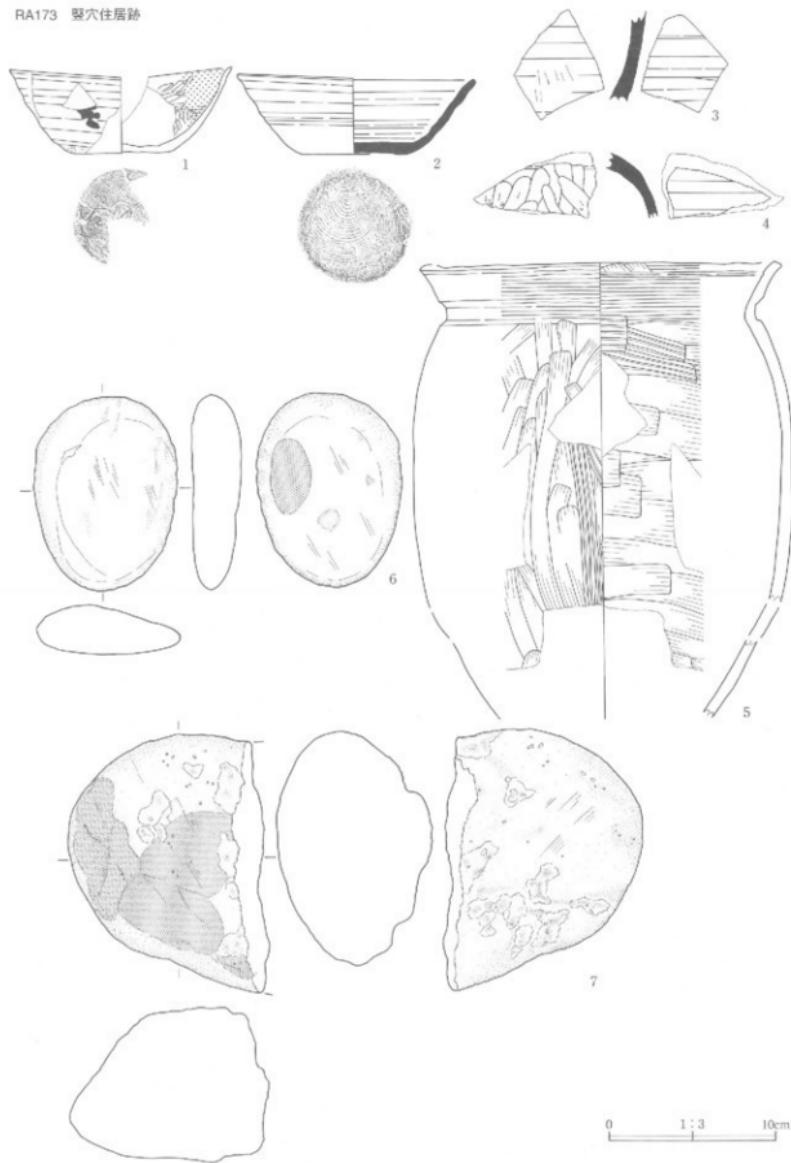
〈土製品（泥面子）〉

遺構検出中に調査区中央にて見つかったものである。長径2.0cm、幅1.4cmと小さい。摩滅しており、判別しにくいが、ちょうど四足の動物が腹部を地につけて伏せている様子を真上から見たような形で、頭部らしき部分から背骨が曲線状に延びているように見える。獅子や狛犬のようなものを模ったものか。近世遺構や畠跡などから出土する例が多いが、今回は1点のみの出土である。

参考文献

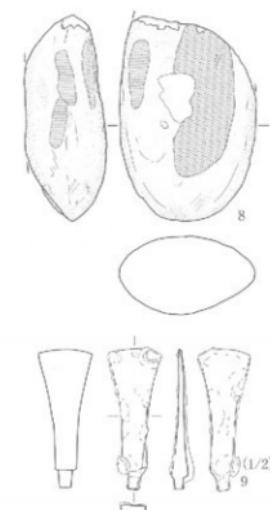
- 津野 仁 1990 『物質文化』「古代・中世の鉄鎌」
- 津野 仁 2001 「土曜考古」「中世鉄鎌の形成過程と北方系の鉄鎌」
- 岩手県文 2004 島田II遺跡第2～4次発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- 岩手県文 2006 河崎の櫛擬定地発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集
- 岩手県文 2008 細谷地遺跡第13次・第14次発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第513集

RA173 壁穴住居跡

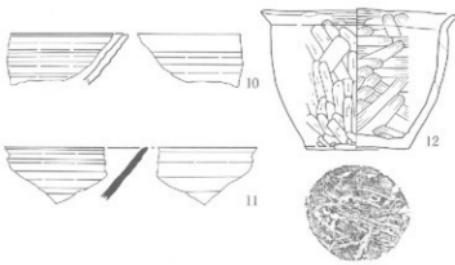


第31図 遺構内出土遺物（1）

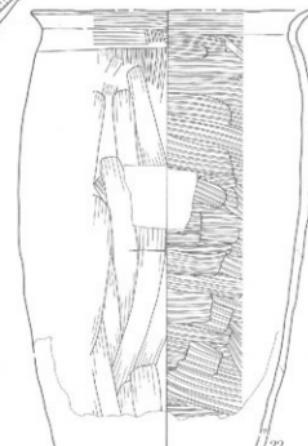
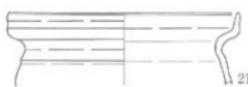
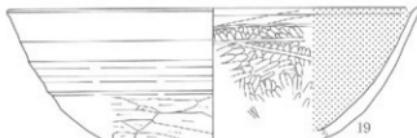
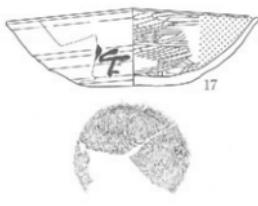
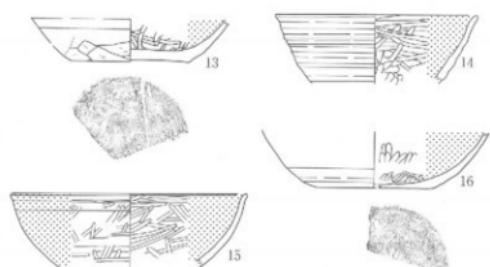
RA173 壁穴住居跡



RA174 壁穴住居跡



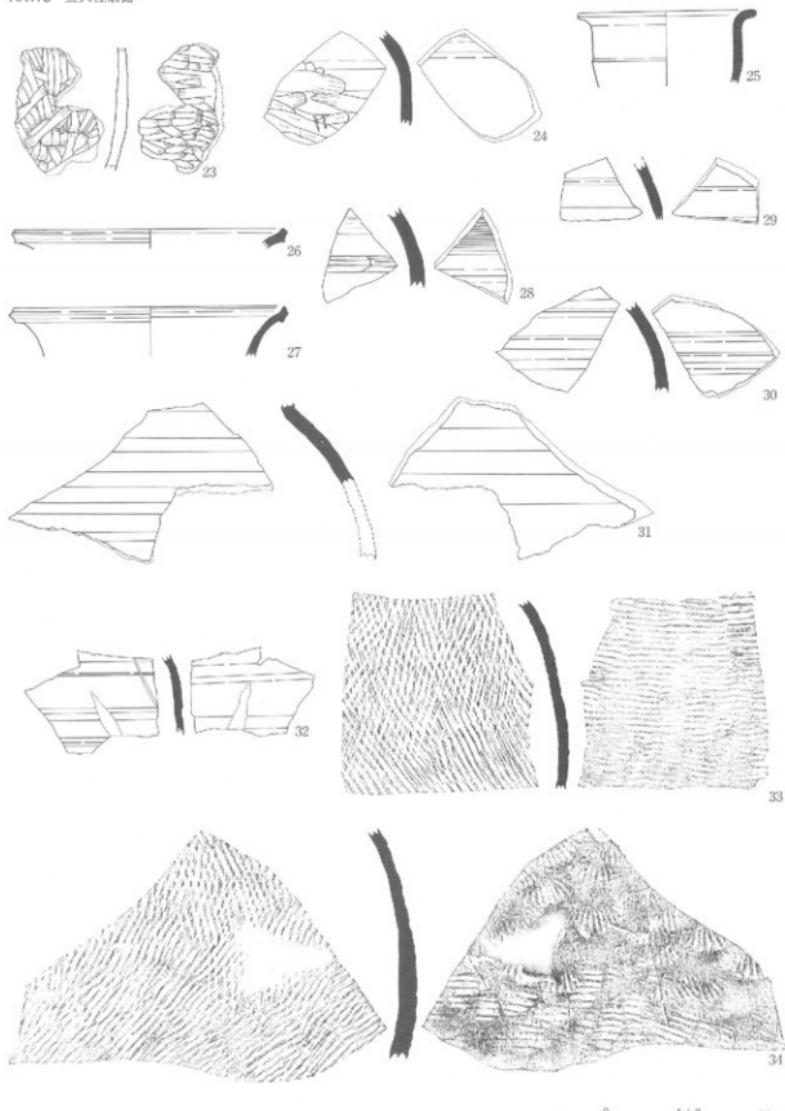
RA175 壁穴住居跡



0 1:3 10cm

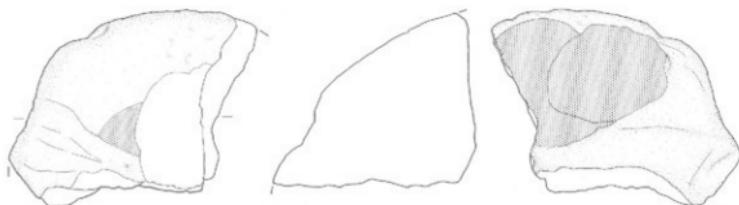
第32図 遺構内出土遺物（2）

RA175 聖穴住居跡

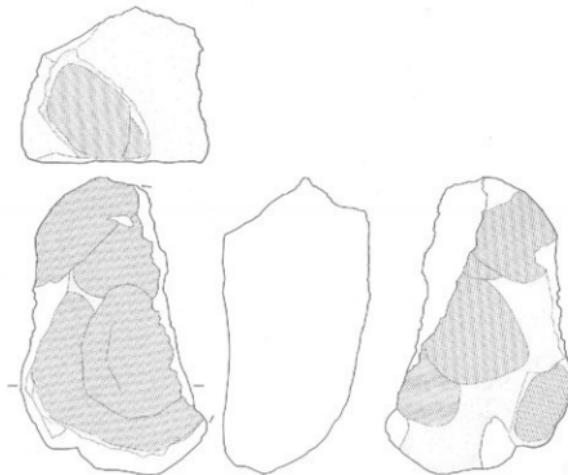


第33図 遺構内出土遺物（3）

RA175 壁穴住居跡



35



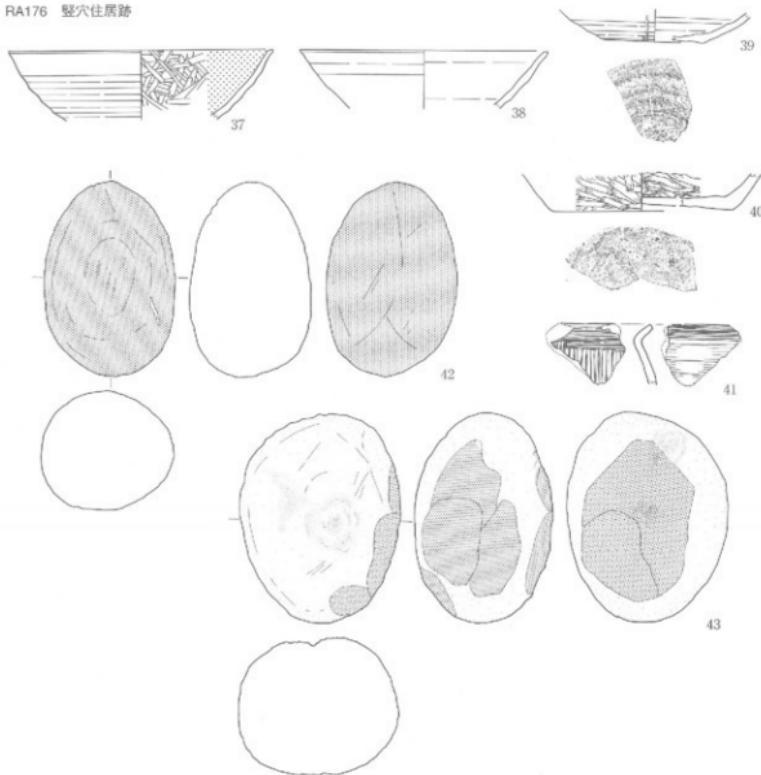
36



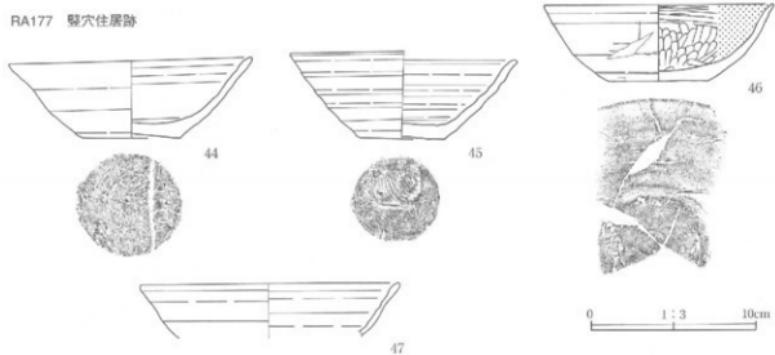
0 1 : 3 10cm

第34図 遺構内出土遺物（4）

RA176 穩穴住居跡

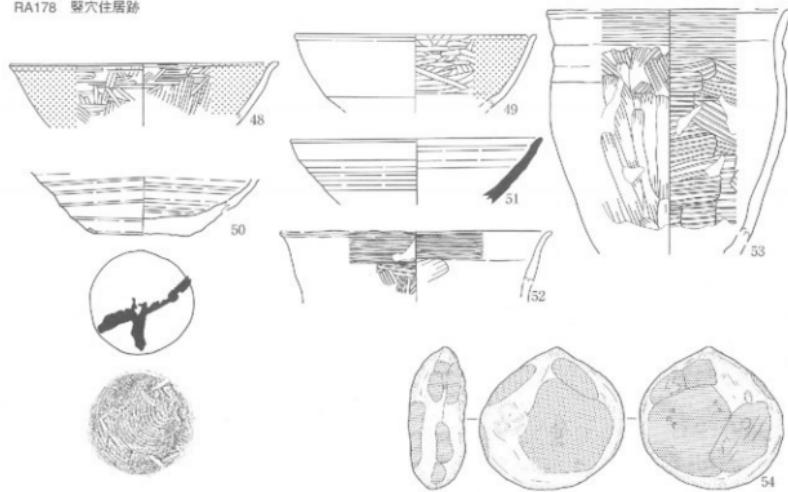


RA177 穗穴住居跡

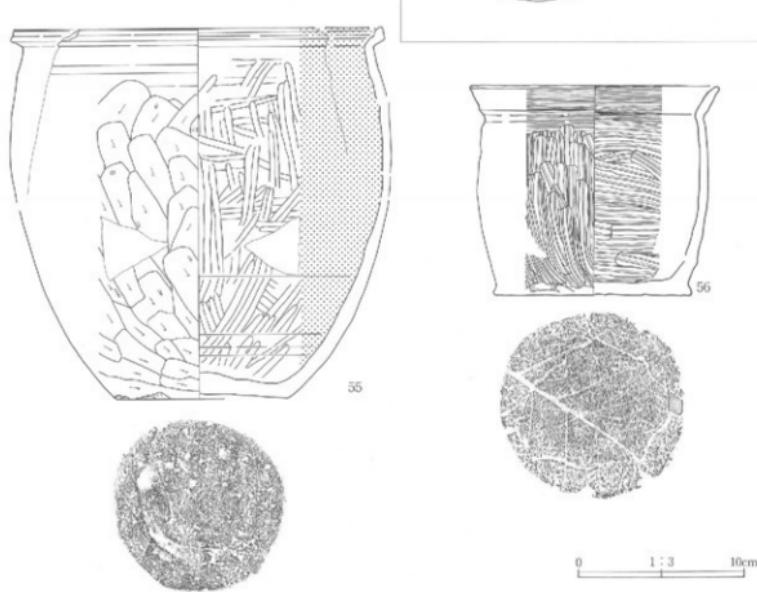


第35図 遺構内出土遺物（5）

RA178 壁穴住居跡



RA179 整穴住居跡

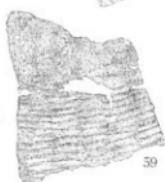


第36図 遺構内出土遺物（6）

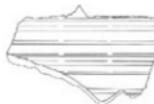
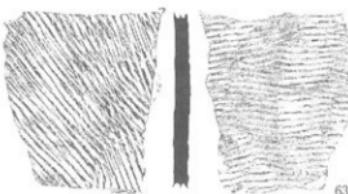
RD433 土坑



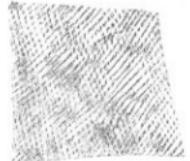
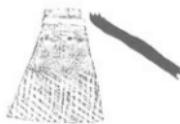
RD434 土坑



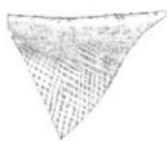
RD436 土坑



RD439 土坑



68



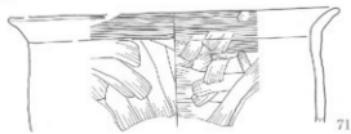
0 1 : 3 10cm

第37図 遺構内出土遺物（7）

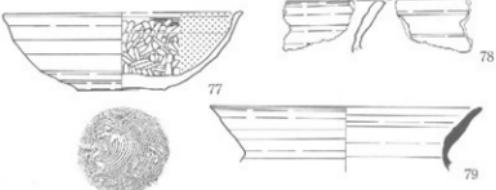
RD440 (441) 土坑



RD442 土坑



RD449 土坑



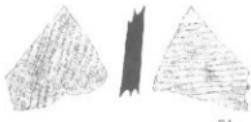
RD441 土坑



RD444 土坑



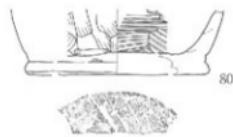
RD447 土坑



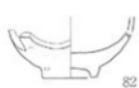
RD448 土坑



RD451 土坑



RG080 满跡



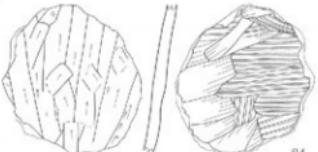
RD456 土坑



P1



P7



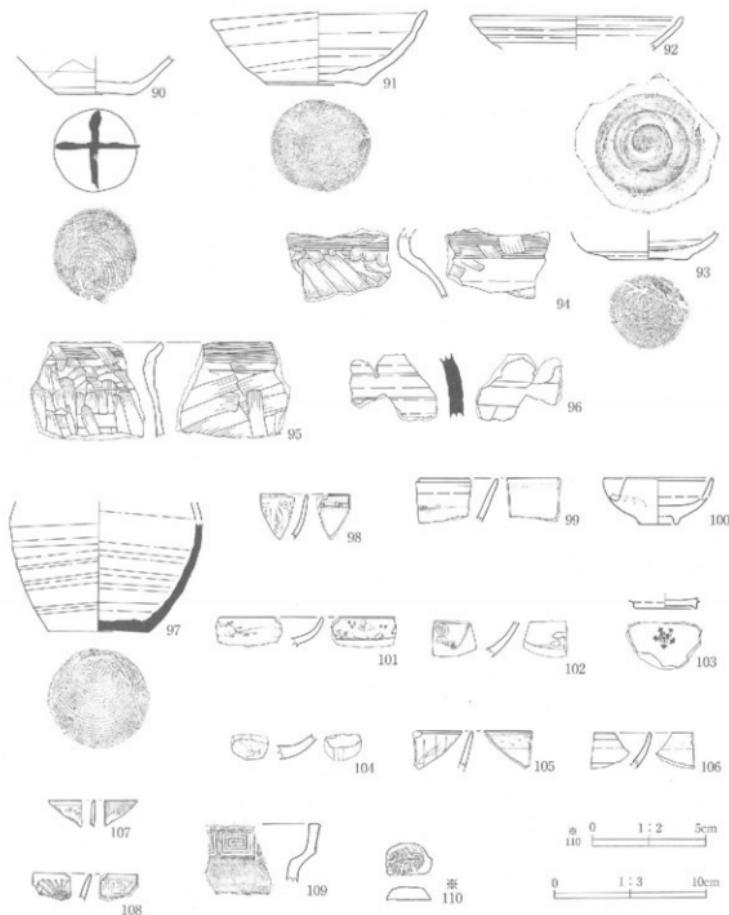
0 1 : 3 10cm

第38回 遺構内出土遺物 (8)

P9



遺構外出土遺物



第39図 遺構内出土遺物（9）、遺構外出土遺物

第5表 土器観察表

外観観察記述	内面観察記述	表面調査	所持状況	表色
外縁部は丸み、内縁部は直線的、外縁部は斜め、内縁部は直線的	内縁部は直線的	外縁斜面	所持者ナシ	表色？ - (4種)
1 3 19 RA173 カマツ切妻型、カマツ切妻型3 2 2 19 RA173 カマツ切妻型	内縁部は直線的	内縁部ナシ	内縁部ナシ	101R4/41: 淡灰色
3 4 19 RA173 01 頭子	頭子	内縁部ナシ	内縁部ナシ	97S2/61: ブラウン
4 5 19 RA173 カマツ切妻型、カマツ切妻型3 5 1 RA173 01 頭子	頭子	内縁部ナシ	内縁部ナシ	5V26/11: ブラウン
6 7 19 RA173 01 頭子	頭子	内縁部ナシ	内縁部ナシ	5V26/11: ブラウン
7 8 19 RA174 頭子	頭子	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
11 8 19 RA174 ベジ・白模様	頭子	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
12 6 19 RA171 CB 未記	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
13 11 RA175 ホツ・直邊	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
14 12 30 RA175 カマツ切妻型	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
15 13 30 RA175 未記	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
16 16 30 RA175 西側直縁	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
17 29 20 RA175 NS2925	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
18 10 20 RA175 直邊	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
19 14 31 RA175 NOS	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
20 20 30 RA175 キツ・直邊直切刃	直邊直切刃	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
21 15 20 RA175 土物	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
22 9 20 RA175 NS2 NS6	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
23 20 RA175 土物	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
24 17 20 RA175 直邊	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
25 21 29 RA175 土物	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
26 18 29 RA175 キツ・直邊	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
27 19 20 RA175 直邊	直邊	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
28 20 20 RA175 未記	未記	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
29 22 20 RA175 定窓	定窓	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
30 25 20 RA175 NOS	未記	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
31 28 20 RA175 壁面・直邊直切刃	直邊直切刃	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
32 27 20 RA175 引張	引張	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
33 25 20 RA175 カマツ切妻型	カマツ切妻型	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
34 23 20 RA175 土物	土物	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
35 31 20 RA175 PP直切刃	PP直切刃	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
36 33 20 RA176 小口斜牛	小口斜牛	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
37 34 20 RA176 91.4	土切馬蹄	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
38 33 20 RA176 91.4	土切馬蹄	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
39 34 20 RA176 91.4	土切馬蹄	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
40 30 20 RA176 91.4	土切馬蹄	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
41 15 20 RA176 通路跡	通路跡	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
44 26 20 RA177 突起直縁	直縁	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
45 37 20 RA177 土切直縁	直縁	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
46 29 20 RA177 第二直縁	直縁	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ
47 38 20 RA177 第三直縁	直縁	内縁部ナシ	内縁部ナシ	内蓋スルホウ

学名	別名	科	葉	花	果	外觀	分佈地點	產地	備註
月桂樹科	山茶科	山茶科	山茶科						
48. 41. 29. RA178 二年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
49. 42. 29. RA178 二年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
50. 46. 29. RA178 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
51. 43. 29. RA178 Q1灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
52. 44. 29. RA178 Q1灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
53. 40. 29. RA178 二年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
56. 47. 29. RA178 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
56. 48. RA178 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
67. 71. 19. RA033 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
58. 49. 19. RA033 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
59. 50. 19. RA034 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
61. 51. 19. RA035 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
62. 55. 19. RA035 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
63. 51. 19. RA036 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
64. 52. 19. RA036 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
65. 61. 19. RA039 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
66. 62. 19. RA039 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
67. 63. 19. RA039 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
68. 64. 19. RA039 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
69. 65. 29. RA040 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
71. 68. 19. RA042 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
72. 69. 19. RA042 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
73. 66. 19. RA044 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
74. 54. 20. RA047 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
75. 56. 20. RA048 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
76. 57. 20. RA048 一年生灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
77. 58. 20. RA046 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
78. 59. 20. RA046 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
79. 60. 20. RA049 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
80. 65. 20. RA051 7.25	山茶科	山茶科	山茶科						
81. 70. 20. RA056 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
83. 74. 29. P1 土上樹	山茶科	山茶科	山茶科						
84. 75. 29. VT 土上樹	山茶科	山茶科	山茶科						
85. 76. 29. P9 土上樹 - 中位	山茶科	山茶科	山茶科						
86. 77. 19. P1 土上樹	山茶科	山茶科	山茶科						
87. 80. 20. P12 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
88. 78. 29. P15 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
89. 79. 20. VT 土上樹	山茶科	山茶科	山茶科						
90. 73. 20. 直立灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
91. 81. 20. RA050 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
92. 82. 20. RA050 灌木	山茶科	山茶科	山茶科						
93. 94. 19. 新鮮小葉的葉子	山茶科	山茶科	山茶科						

新石器時代 貝塚	出土地點・年代	測定 部位	層位 測定	測定 部位	測定 部位	測定 部位	測定 部位	測定 部位
144 72 20 [L1] 横 糞 1.	土砂層 上砂層	表	1.0 1.0	内表面 外表面	内表面 外表面	内表面 外表面	内表面 外表面	内表面 外表面
55 81 20 [L3] 横 糞 1.	土砂層 上砂層	表	1.0 1.0	ヨコナガ P. ヘラナガ				
96 35 20 30.33	砂質層 砂質粘土	表	1.0 1.0	ヨコナガ P. ヘラナガ				
107 45 20 30.34	砂質粘土	表	1.0 1.0	ヨコナガ P. ヘラナガ				

第6表 石器類繫表

測定部位 No.	種類 名	測定部位 名	層位	層位 測定	測定 部位	測定 部位	測定 部位	測定 部位
6 108	切 RA173 斧頭	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.7 8.7	9.1 9.1	40.05 39.62	40.05 39.62
7 106	切 RA173 全て2	過疎层	5.7 5.7	15.9 17.1	8.2 8.2	50.0 50.0	103.62 102.95	103.62 102.95
8 107	切 RA173 鋸形器	過疎层	5.7 5.7	13.6 13.6	11.7 11.7	20.94 20.94	20.94 20.94	20.94 20.94
26 109	切 RA175 鐘形器	過疎层	5.7 5.7	11.9 11.9	11.6 11.6	49.84 49.84	49.84 49.84	49.84 49.84
26 110	切 RA175 6.8 N20.0	過疎层	5.7 5.7	11.7 11.7	9.0 9.0	50.03 50.03	50.03 50.03	50.03 50.03
42 111	切 RA176 鐘形器	過疎层	5.7 5.7	12.1 12.1	8.0 8.0	7.4 7.4	97.00 97.00	97.00 97.00
43 112	切 RA176 鐘形器	過疎层	5.7 5.7	12.9 12.9	9.7 9.7	8.5 8.5	97.00 97.00	97.00 97.00
54 113	切 RA176 8.7	過疎层	5.7 5.7	8.6 8.6	8.6 8.6	3.4 3.4	199.1 199.1	199.1 199.1
21 114	切 RA176 8.7	過疎层	5.7 5.7	5.9 5.9	2.2 2.2	10 10	112.21 112.21	112.21 112.21

第7表 金屬品類繫表

測定部位 No.	種類 名	出土地點・層位	測定 部位	層位	層位 測定	測定 部位	測定 部位	測定 部位
9 100	切 RA173 銅刀	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	5.9 5.9	2.2 2.2	10 10	112.21 112.21
10 101	切 RA173 銅刀	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	5.9 5.9	2.2 2.2	10 10	112.21 112.21
10 102	切 RA173 銅刀	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	5.9 5.9	2.2 2.2	10 10	112.21 112.21
10 103	切 RA173 銅刀	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	5.9 5.9	2.2 2.2	10 10	112.21 112.21
104 95	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.9 10.9	10.9 10.9	6.8 6.8	10.9 10.9	10.9 10.9
105 98	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.8 10.8	10.8 10.8	6.8 6.8	10.8 10.8	10.8 10.8
106 104	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.8 10.8	10.8 10.8	6.8 6.8	10.8 10.8	10.8 10.8
107 99	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.8 10.8	10.8 10.8	6.8 6.8	10.8 10.8	10.8 10.8
108 94	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.8 10.8	10.8 10.8	6.8 6.8	10.8 10.8	10.8 10.8
109 105	切 RA172 銅刀	過疎层	5.7 5.7	10.8 10.8	10.8 10.8	6.8 6.8	10.8 10.8	10.8 10.8

第8表 近世鐵器類繫表

測定部位 No.	種類 名	出土地點・層位	測定 部位	層位	層位 測定	測定 部位	測定 部位	測定 部位
10 97	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 98	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 99	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 100	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 101	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 102	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 103	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 104	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 105	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 106	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 107	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 108	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
10 109	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8

第9表 土製品類繫表

測定部位 No.	種類 名	出土地點・層位	測定 部位	層位	層位 測定	測定 部位	測定 部位	測定 部位
110 97	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
110 98	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
110 99	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8
110 100	切 RA173 鐵劍	出土地點・層位	過疎层	1.0 1.0	8.5 8.5	1.0 1.0	18.8 18.8	18.8 18.8

VI まとめ

1 壊穴住居跡

これまでの細谷地遺跡の調査では、壊穴住居跡は170棟を超える（～第20次調査）。その中で、平安時代の壊穴住居跡は本調査次まで（理文センター調査に限定）150棟強である。これらの住居は、細谷地遺跡はこれまでの調査で計3本の沢跡が確認されているが、この沢跡の周辺を避けるような状態で拡がっている。そのため、本調査区においても搅乱の影響はあるものの、旧沢跡に近いためにやや遺構の希薄な地域であることがわかる。

下の表は、平安時代の壊穴住居跡の床面積別の表である。八木氏（1998年）の分類に加え、小形の住居跡の中でも特に規模の小さい4m²未満のものを別に細分した。また、4～15m²未満の中で、本調査区検出の同規模の住居跡として4～9m²未満の数もあげてみた。本遺跡の壊穴住居跡は、小形（15m²未満）と中形（15～25m²未満）で全体の90%を占め、9世紀後半～10世紀前半の集落の様相を顕著に示している。本調査区で検出した住居跡も7棟のうちRA175壊穴住居跡を除いて全て小形の住居跡である。そして、2.5m²しかなかったRA174壊穴住居跡を筆頭に、5棟とも6m²前後と小形の住居跡の中でもやや小さいものばかりの住居構成となっている。

これらの住居跡のカマドの位置は下記の通りである。細谷地遺跡は、周辺の遺跡の壊穴住居跡と比較して、カマドの方位があまり徹底されていないことが指摘されている。確かにどの方位においてもカマドが存在しているが、傾向としては東カマドと西カマドが多い。本調査区では、住居数が少ないため明確な傾向は示せないが、偏ることなく作られている。西カマドはないが、RA179壊穴住居跡では、張り出しピットの位置から西カマドとなる可能性が高い。

壊穴住居跡床面積	4次・5次	8次	9次・10次	13次・14次	15次	16次・17次	19次・20次	計
極小 4m ² 未満	2	1	3			1	1	8
小形 4～15m ² 未満	20	8	27	18	3	9	5	90
(4～9m ² 未満)	(9)	(2)	(13)	(5)	(1)	(7)	(5)	(42)
中形 15～25m ² 未満	11	2	12	7	2	4		38
大形 25～40m ² 未満	4	2	1	1	2		1	11
特大 40～60m ² 未満				1	1	1		3
超大型60m ² 以上								
平安住戸数	37	13	43	27	8	15	7	150

*上記総数は、床面積の明確なもの及び推定できるものの数である。

カマド方位	4次・5次	8次	9次・10次	13次・14次	15次	16次・17次	19次・20次	計
北	8	1	5	8	2	2	2	28
南	11	1	2	3	1	1	2	21
東	12	4	19	38	2	4	2	81
西	12	3	8	20	7	6		56
北東	3		8	12			2	25
北西	3	1	10	12	2			28
南東	7	1	1	2		2		13
南西	3		1	2				6

2 挖立柱建物跡

今回の調査では、2棟の総柱の掘立柱建物跡を検出している。この建物跡は、柱の掘り方が方形で、「山の字」になる総柱建物で、軸方向が2棟とも同じものである。これまでの細谷地遺跡の調査でも掘立柱建物跡は確認されている。周辺の遺跡では、「山の字」になる総柱の掘立柱建物跡は、小幅遺跡第4次調査、飯岡林崎II遺跡第1・3次調査、台太郎遺跡第2・26・44・58次調査、飯岡才川遺跡第3次調査などで確認されている。第41図は、細谷地遺跡周辺で検出された 2×2 間または方形の掘り方となっている、平安時代と思われる掘立柱建物跡の集成図（細谷地遺跡のみ 2×2 間に拘らず当該時期の掘立柱建物跡）である。集成図を見ると、2間×2間の掘立柱建物跡の規模は総柱、側柱に拘わらずに大変類似していることがわかる。掘り方としては、方形に掘られたものより円形に掘られたものは若干小さめである。これらの総柱の掘立柱建物跡は規模も類似しており、9世紀以降の建物跡である。本宮熊堂B第20次調査で、9世紀中期の堅穴住居と重複して検出されたRA012掘立柱建物跡（9世紀中期以降と報告）を除き、住居跡と重複しているものはない。堅穴住居跡の密集しない場所に建てられ、細谷地遺跡第16・17次調査や今回の調査では、掘立柱建物跡の周辺では戸間状遺構も確認されている。戸間状遺構は、灰白色火山灰の混入から検出されることが多く、搅乱や削平などの影響から調査時に確認できなかっただけで本来もっと存在していた可能性がある。このことから、これまで指摘されてきたようにこれらの掘立柱建物跡は倉的な施設であることが、より濃く示されたと思われる。ただし、奥州市の林前II遺跡の「集落とは異なる空間に設けられた掘立柱建物跡群」のようなものではなく、規模以外には規則性があまり見られず、集落（周辺住居）に密着した存在のもの（倉）だったと思われる。

第4・5次調査では、掘立柱建物跡と周辺の堅穴住居跡の直接的な関係はないとしていたが、当初、本調査区においては軸を同じとする点、遺構ごとにおける間隔などから、2棟の掘立柱建物跡とRA073堅穴住居跡およびRA074堅穴住居跡とは同時期に存在し、なおかつ直接的な関係（管理者のようないい）があったのではないかと思われた。しかし、これまでの細谷地遺跡や他の遺跡で検出された掘立柱建物跡と周辺の堅穴住居跡との同じような関係を見出せる例は見当たらなかった。

3 戸間状遺構

これまでの細谷地遺跡の調査でもいくつかの戸間状遺構は検出されている。特に第16・17次調査では、多く見つかっている。今回は旧沢跡の上面にて3箇所の戸間状遺構を確認している。方向軸や埋土状況などを見ると、これらはほぼ同時期に存在していたものと思われる。RZ018戸間状遺構では東西方向と南北方向の戸間が確認されており、南北方向の戸間は更に西側に拡がっていた可能性がある。

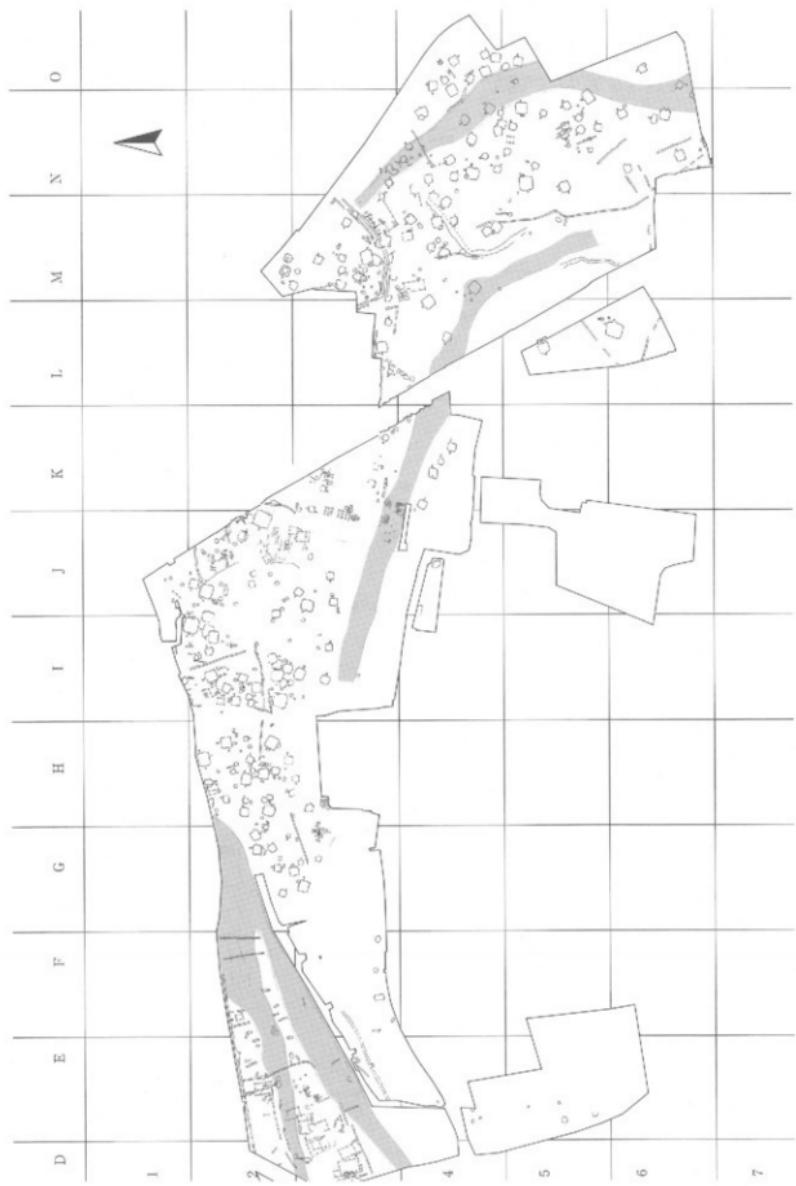
埋土上面には灰白色火山灰が入り込み、この火山灰は分析の結果、「和田a降下火山灰」であることが確認された。自然科学分析を行った結果、プラントオバール（植物珪酸体）分析では陸稲が行われていた可能性、ヒエが栽培されていた可能性が示唆された。また花粉分析でも陸稲栽培と雜穀を作物とする畑作の可能性が示されている。近隣では、落葉広葉樹と針葉樹が生育していたようである。落葉樹の中のハンノキは、「湿地林ないし河辺林を形成」し、「しばしば灌境林として利用されることもある」としている。旧沢跡でもあり、湿地林もしくは河辺林であることはもちろんだが、戸間状遺構の存在から端境としてもハンノキが存在していた可能性もある。なお、この戸間状遺構については、丸山清治氏から火山灰の堆積状況から「戸間」ではなく「天地返しによる耕作痕跡」という指摘を受けている。その指摘には否定できないが、地力を回復させるための「天地返し」が行われたということは、この場所においての「畠」「畑」の存在を示していることには違いない。

第10表 穴穴住居跡一覧表

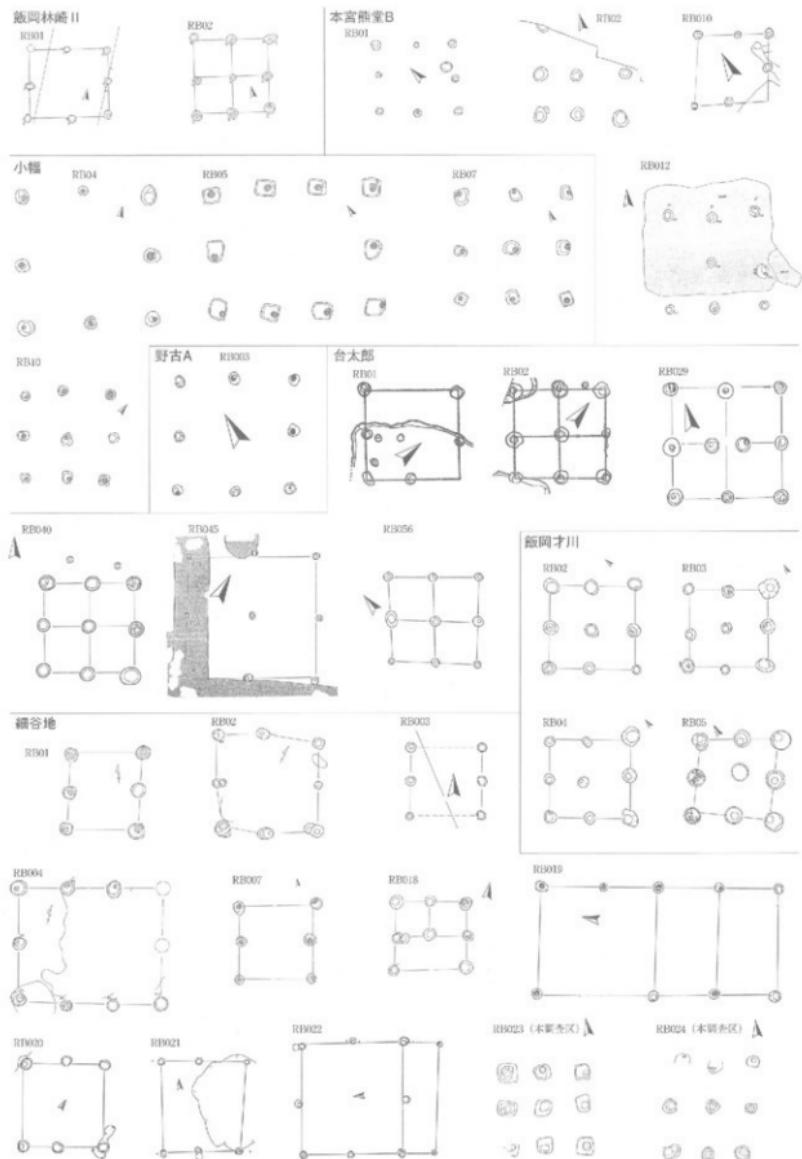
遺構名	次数	時期	軸方向	カマド	縦横 (m)	壁高 (cm)	床面積 (m ²)	煙道	貼床	その他
RA173	19	平安	北北東 N-12°-E	角型1基 北壁1基	2.9×2.6	18	7.5	2基とも割り賣き式	有 Pt2基	Pt1から鉄錆出土
RA174	19	平安	北北東 N-13°-E	北壁1基 北東隅1基	1.86×1.6	25	2.5	旧-振り込み？ 新-割り賣き式	無	カットドリル頭部附近に散 かれた土器片あり
RA175	20	平安	南西 N-150°-W	南西壁	5.3X (4.4)	33	(29)	割り賣き式？	有 袋保(作り替え)	Pt6基
RA176	20	平安	北東 N-13°-E	南東壁	2.82X (2.2)	25	(6.4)	不明	無	Pt3基
RA177	20	平安	東南東N-10°-E	東壁	2.6X (2.6)	15	(6.1)	不明	有	北東隅に張り出し跡あり
RA178	20	平安	南南西N-16°-W	南西2基(作り替え?)	2.8X (2.46)	13	(5.6)	割り賣き式	同上	既存に張り出し跡あり
RA179	20	平安	北西 N-60°-W	不明 北西壁?	2.92X (2.38)	19	(6.0)	不明	有	西側に張り出し跡あり

第11表 土坑一覧表

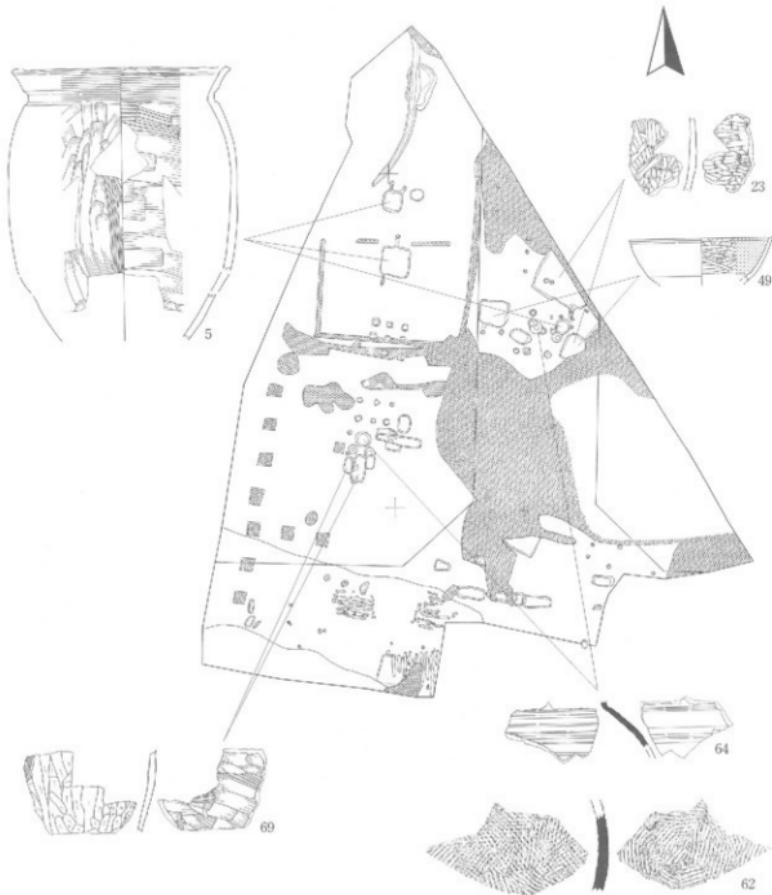
遺構名	次数	平面形	縦横(cm)	深さ(cm)	垂壁関係			その他	時期
RD431	19	扇丸長方形	455X100	17	RD432	RD438	RD443	RD438・443より新しい	近世～
RD432	19	扇丸長方形	155X (90)	20	RD431				近世～？
RD433	19	扇丸長方形	146X90	23	RD442	RD445		扇土、炭化物あり	近世？～
RD434	19	精円形	475X295	68	RD480	に切られる			不明
RD435	19	円形	139X117	19	なし				平安
RD436	19	円形	164X158	32	なし				平安
RD437	19	楕円形	190X132	10	なし				平安
RD438	19	楕円形	104X80	20	RD431	RD443	最も古い		平安
RD439	19	円形	97X95	41	なし			上面に扇土あり	平安
RD440	19	扇丸長方形	262X142	21	RD443	RD444	RD445と重複 最も新しい		近世～
RD441	19	扇丸長方形	168X84	21	RD433	RD440	最も新しい		近世～
RD442	19	円形	110X105	38	RD433に切られる				平安
RD443	19	扇丸長方形	180X (60)	15	RD431	RD438と重複 RD431より古い RD438より新しい			近世～
RD444	19	やや方形	67X80	10	RD440	RD440より古い			平安
RD445	19	楕円形	78X88	11	RD440	RD441と重複 扇土も古い			平安
RD446	20	円形	85X82	63	RD447を切る			上面に灰白色火山灰堆積	平安
RD447	20	円形	131X (113)	59	RD446	RD452	RD446より古く RD452より新しい		平安
RD448	20	扇丸長方形	195X127	43	なし			中位～底部に堆土とともに便すあり	平安
RD449	20	円形	150X145	25	Pt10を切る				平安
RD450	20	円形	99X95	41	RD451に埋される				平安
RD451	20	円形	64X57	42	RD450を切る				平安
RD452	20	円形？	(73)	10	RD447に埋される				平安
RD453	20	精円形	162X108	10	なし			底面に扇土あり	平安
RD454	20	精円形	124X94	24	なし				不明
RD455	20	長柄円形	190X25	8	なし				不明
RD456	20	精円形	140X55	21	なし				不明
RD457	20	精円形	44X55	21	なし				不明
RD458	20	扇丸長方形	290X117	8	RD460を切る				近世～
RD459	20	扇丸長方形	305X100	12	RD460を切る				近世～
RD460	20	円形	(137)	10	RD458, RD459に埋される				不明
RD461	20	扇丸長方形	285X116	15	なし				近世～
RD462	20	楕円形	97X562	7	RD463, RD464と重複 RD464より新しい				近世～？
RD463	20	扇丸長方形	104X95	6	RD462, RD464と重複 RD464より新しい				近世～？
RD464	20	楕円形	105X80	15	RD462, RD463と重複 最も古い				不明
RD465	20	楕円形	90X58	22	なし				近世～
RD466	20	扇丸長方形	216X104	22	なし				近世～



第40図 遺構配置図（第4・5・8~10・12~20次）

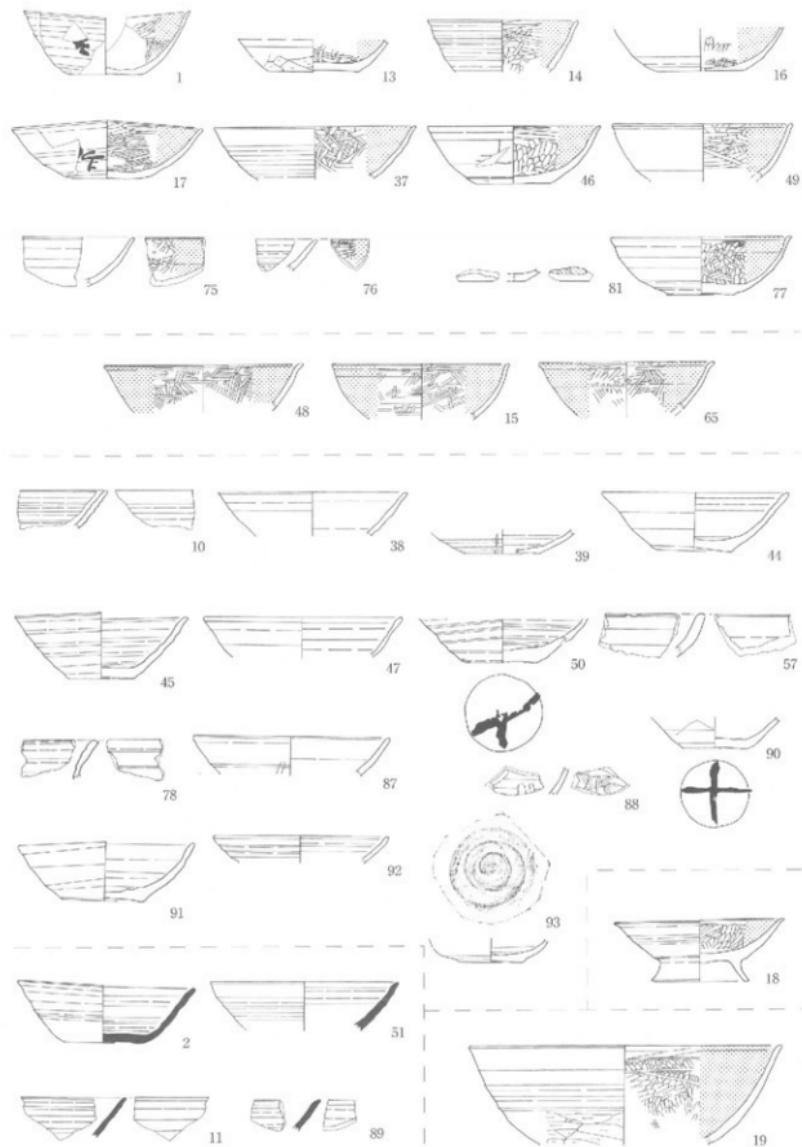


第41図 捜立柱建物跡集成図 (1 : 200)

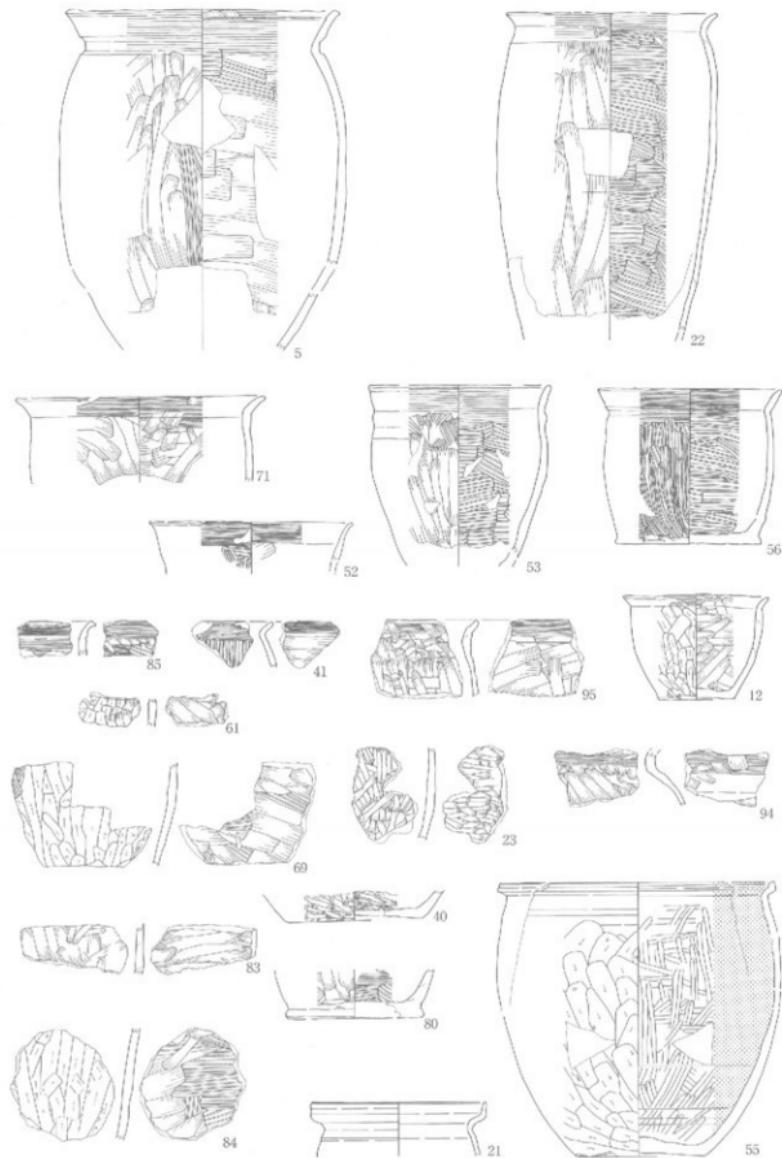


NO	出土地点・層位	種別	器種	黒色 焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	内面繊維	外面調査	施設調査	残存状況・その他
5	RA173カマフ1.28焼成、RA174中 火成部、RD446壁上4-6	土師器	壺		(22.0)		(27.8)	ナデ、ハケメ、B コナヂ			II-崩部 内面ススあり
23	RA173床直、RA176 PP3灰土	土師器	壺					ナデ	ナデ		剥離
49	RA173カマフ消退、RA176ベルト	土師器	壺	内	(1.44)		(4.7)	ミガキ	ロクロナデ		II壁部
60	RD456灰土上位、RD447灰土上位	無底器	壺				(0.2)	内面具板	タタキ		剥離
64	RD456灰土上位、RD447灰土上位	無底器	壺					ロクロナデ	ロクロナデ		崩
69	RD440灰土、RD441灰土上面	土師器	壺				(0.5)	ナデ、ハケメ	ケズリ、ハケメ		剥離

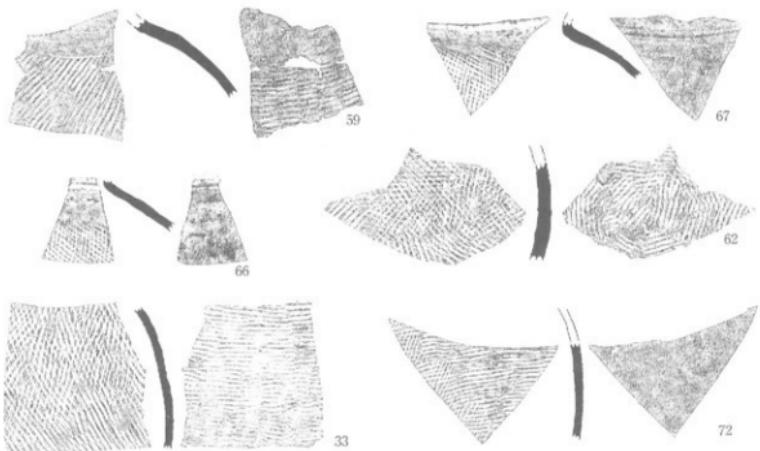
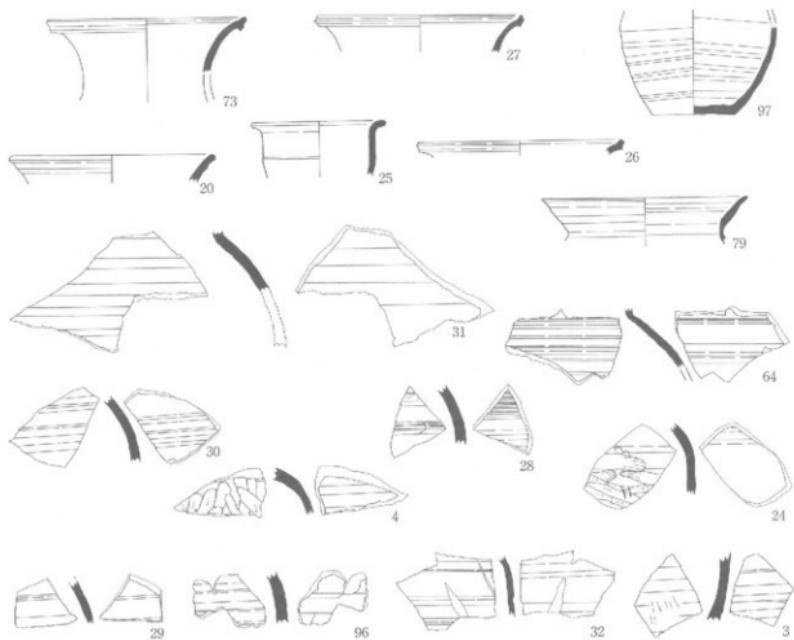
第42図 連構間接合土器



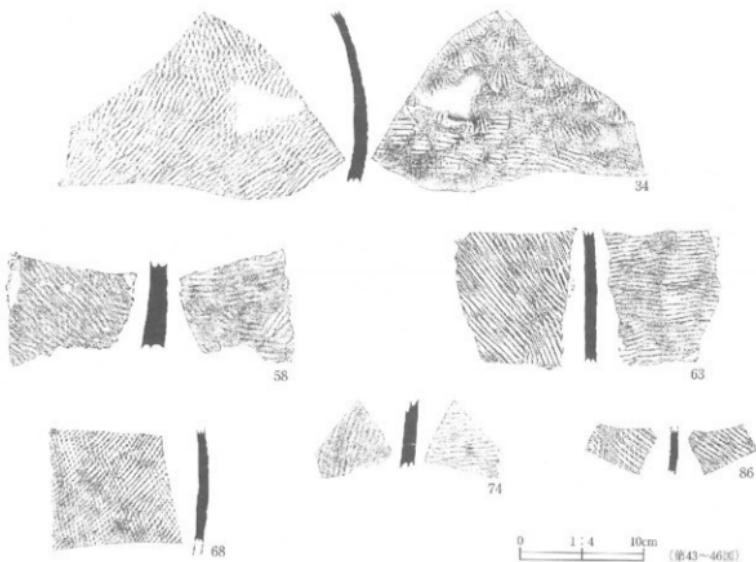
第43図 器種別集成図（1）



第44図 器種別集成図（2）



第45図 器種別集成図（3）



第46図 器種別集成図（4）

4 遺 物

今回の出土遺物は、検出遺構と同年代の平安時代のものと近世のものに限定されている。調査区全体として搅乱を受けており、検出面での出土が少なく、遺構内のものが多かった。また遺構についても（特に竪穴住居跡）、カマドなど遺物の最も出土するであろう部分が搅乱を受けていたことから遺構全体が精査できたものが少ないと接合できなかった小破片も多く、最終的な出土遺物数は少ない。

坏だけに注目すると、V遺物の章で分類した他に、胎土などから大きく3つに分けられる。Aは金雲母が全く入らず、粘土が細かく赤く焼けているもの、Bは金雲母を微量に含み、粘質性のある粘土のもの、Cは金雲母を多く含み、砂っぽい粘土のもの、である（第5表参照）。本調査区からは、B類の出土が多いが、同一遺構（住居跡）から上記3種類とも出土していることもあります、時期差などでは安易に分けられない。作られた場所や作者が異なることは確かであり、そこにどういう意味を持つのか検討したかったが、時間の関係でできなかった。

5 墨書き器・刻書き器

これまで埋文センターで調査された細谷地遺跡で出土した墨書き器・刻書き器は111点、本調査分を含めて117点になる。今回は6点のみである。これまでの傾向としては、「×」もしくは「+」の2本を交差させたものが13点で最も多い。次いで、「大」もしくは「太」が11点、「木」もしくは「本」が5点、「九」が4点、「千」が4点と続く。「万」の字が入る「十万」「万」「七万」「二万」は合わせて5点ある。その他は1点、2点とばらついている感がある。

今回の調査では、「+」という墨書きが2点(50・90)のほか、これまでに見られない「乍」という字が書かれたもの(17)が出土している。欠損しているため明確ではないが、偏らしきものが書かれていたようで、書き方から判断すると「乍」という字になる可能性がある。岩手県ではこれまで「乍」または「乍」という字ではなく、東北地方でも数点確認されているだけである。山形県酒田市の「上ノ田遺跡」の9世紀中ごろの大溝から出土した須恵器坏、福島県福島市の前原遺跡(9世紀後半主体の集落跡遺跡)の遺構外から出土した内黒の土師器坏である。ちなみに平泉町の志羅山遺跡からは「御作」という字が書かれたかわらけ(12世紀後半)が出土しているが、時代が異なるため含めていない。

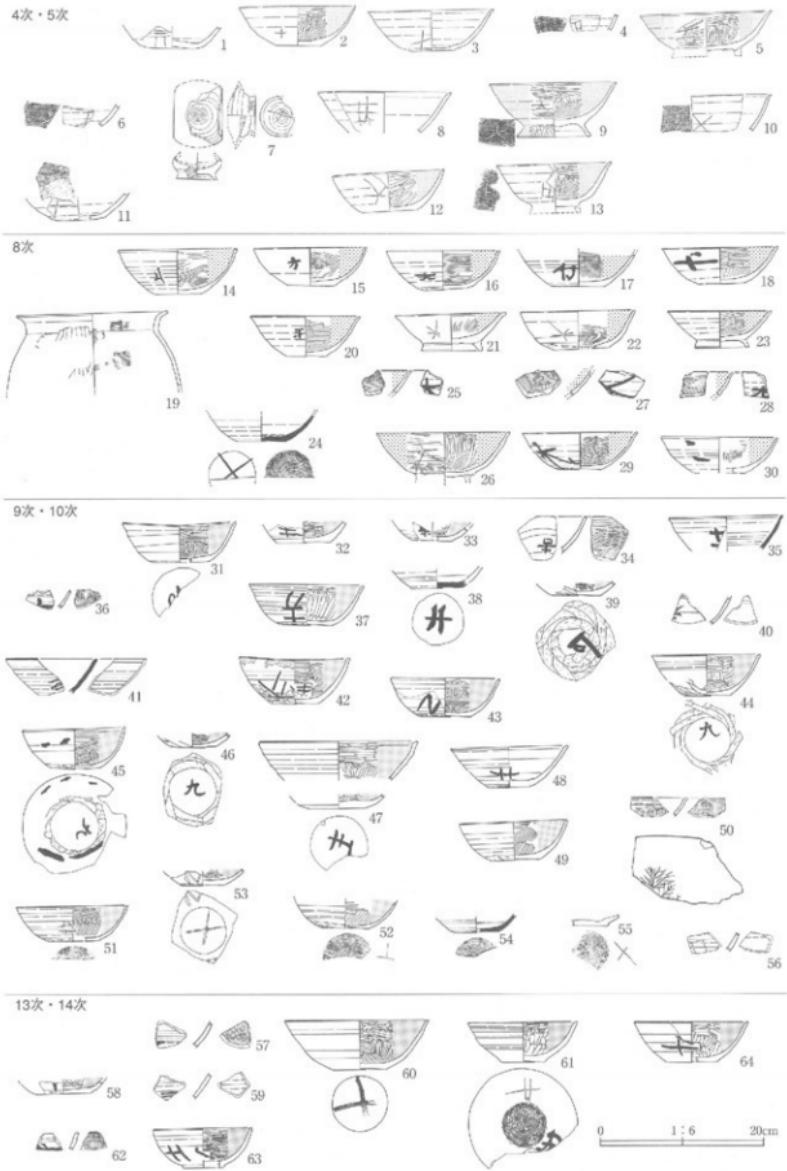
刻書き土器の46は、直線的な刻みの他に「干」?のような記号が焼成後に刻まれている。同時に調査された調査区北東に隣接する向中野館遺跡からも類似の刻書き土器が出土している。

6 結 語

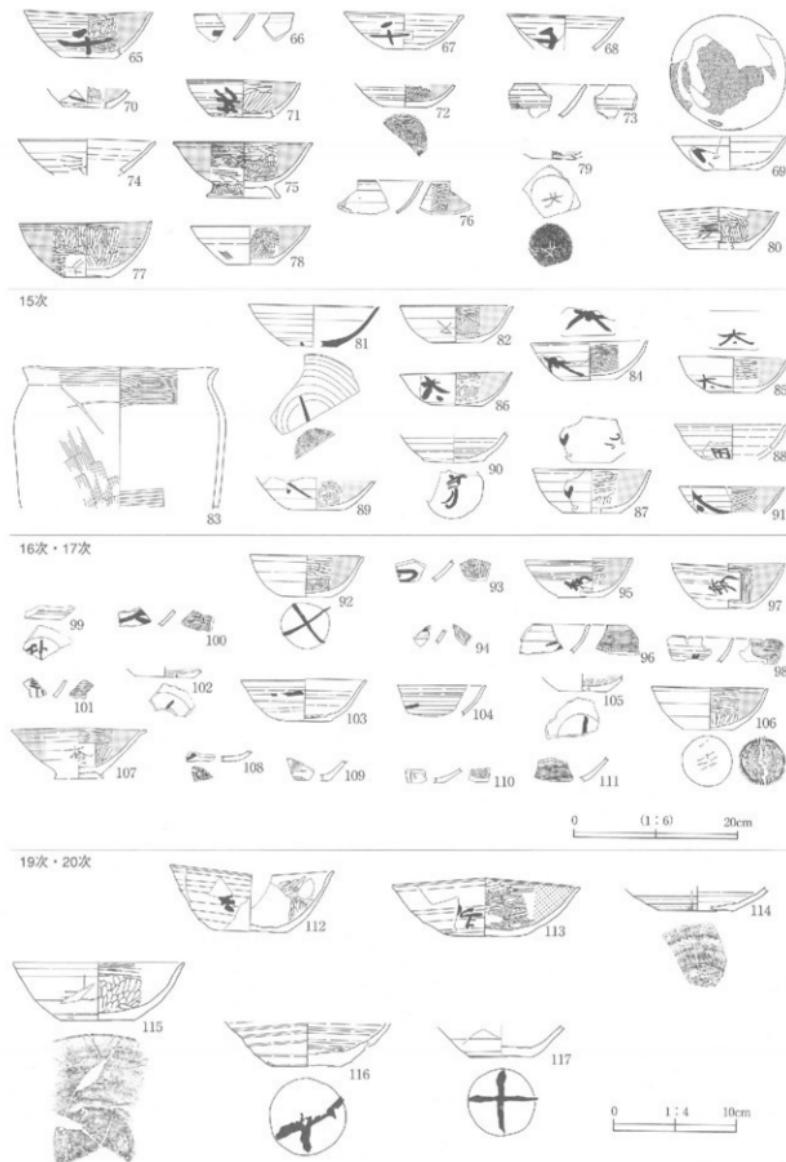
今回の調査では、これまでの細谷地遺跡の調査結果に準じた遺構や遺物が出土し、細谷地遺跡という集落の様相にまた一つ成果を加えた結果となった。遺構は少ないが、竪穴住居跡や倉庫跡と思われる掘立柱建物跡、竪間状造構と生活する上で最も必要な遺構がそろって検出され、遺構が集中していない分、集落の郊外の様子が見えてきたように思われる。今までの調査結果を踏まえて、本調査区の位置づけを検討したが、力不足のため見出せないままに終わってしまった。これまでの遺構の拡がりから、最も住居が密であろう地域が未調査である。北東に隣接する向中野館遺跡の調査結果も含めて、今後の調査で更に遺跡全体の古代の様子が明らかになることに大いに期待したい。

参考文献・引用文献 *細谷地遺跡分の報告書については、「墨書き器・刻書き土器一覧表」の頁に記載してある。

- 八木光則 1998 「馬瀬川流域の様相」「第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会
 西野 修 1998 「北上盆地北部の様相」「第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会
 佐藤甲二 2000 「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題-仙台市域の調査事例をとおして-」『はたけの考古学』 日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集
 青森県 2008 青森県史 資料編 古代2 川土文字資料 青森縣史編さん古代部会
 山形県教育委員会 1983 上ノ田遺跡(1次・2次) 北東A・B遺跡 積石遺跡 大口塚遺跡 上橋遺跡 発掘調査報告書
 山形県埋蔵文化財調査報告書第52集
 盛岡市教育委員会 1987 昭和60年61年度 盛岡市埋蔵文化財調査年報
 福島市教育委員会 1993 「前原遺跡」「猪上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告2」 福島市埋蔵文化財報告書第54集
 (財)水沢市文化振興財团水沢市埋蔵文化財調査センター 牡鹿Ⅱ遺跡、寺ノ内遺跡 水沢市埋蔵文化財調査セイタ調査報告書第19集
 岩手理文 1995 本宮熊堂B遺跡第1次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集
 岩手理文 1996 小幡遺跡第4次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集
 岩手理文 2002 飯岡才川遺跡第3次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第393集
 岩手理文 2002 台太郎遺跡第26次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
 岩手理文 2003 野古A遺跡第15次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集
 岩手理文 2003 台太郎遺跡第23次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第415集
 岩手理文 2003 台太郎遺跡第44次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第422集
 岩手理文 2004 飯岡林崎Ⅱ遺跡第1次・第3次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第427集
 岩手理文 2004 本宮熊堂B遺跡第20次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第467集
 岩手理文 2008 台太郎遺跡第58次調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第516集



第47図 墓書土器・刻書土器集成図（1）



第48図 墓書土器・刻書土器集成図（2）

第12表 略書土器・刻畫土器一覧表

* 「現文・その他」の欄は各報告書内のとおり

NO	調査次数	種別	部類	部位	面	方向	出土地点	現文・その他	報告書内標識番号
1	第4・5次	刻畫	土器器身	全体	外		RA001	不明	RA001-12
2		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		「×」状	RA002-1
3		刻畫	土器器身	全体	外	正位	RA002	「×」状	RA002-6
4		刻畫	土器器身	全体	外	正位	RA010	不明	RA10-16
5		刻畫	土器器身	全体	外	横位?	RA011	「大」	RA11-1
6		刻畫	土器器身	全体	外	正位?	RA014	「×」状?	RA14-9
7		刻畫	土器器身	全体	外	正位?	RA015	不明	RA15-16
8		刻畫	土器器身	全体	外		RA017	不明	RA17-4
9		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA020	「大」	RA20-4
10		刻畫	土器器身	全体	外	正位	RA022	「×」	RA22-3
11		刻畫	土器器身	全体	外	正位	RA028	「×」	RA28-8
12		刻畫	土器器身	全体	外	横位	RA033	「大」	RA33-1
13		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RD221	不明	RD221-27
14	第8次	刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	横位	RA034	七	RA003-4
15		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		方	RA003-5
16		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA035	大?	RA003-2
17		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		村?	RA003-6
18		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA041	不明	RA041-4
19		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA042	不明	RA042-7
20		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA045	五?	RA045-4
21		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		六?	RA047-4
22		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		六?	RA047-2
23		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		四?	RA047-9
24		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA047	十	RA047-8
25		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		人	RA047-29
26		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		大	RA047-22
27		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		大?	RA047-30
28		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA049	本?	RA049-4
29		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA051	木	RA051-11
30		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位?	RD139	木・木?	RD139-1
31	第9・10次	刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			J462の「×」と同じ可能性あり?	150
32		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		J460の「生」と同じ可能性あり	153
33		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA071	古	154
34		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位		当	155
35		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA074	□	180
36		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA078	□	211
37		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA082	ナシ	304
38		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA087	升	382
39		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA089	□(合)	379
40		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	斜位	RA091	□(重は+)	386
41		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		し	388
42		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	横位	RA092	□/土	406
43		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	横位	RA095	乙	462
44		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RA104	丸	564
45		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			丸	565
46		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			九	565
47		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			九	749
48		刻畫	土器器身	全体	外	正位		道標外	743
49		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RA078	道標外にヘアでつけた跡か?	207
50		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位		先端部に削られる 空木か?	213
51		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位?	RA088	先端部に削られる 空物?	361
52		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			ト・便成改削型	362
53		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RA092	□(丸)・便成改削型	407
54		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外			便成改削型 空号?	416
55		刻畫	土器器身	全体	外		RA094	ト・便成改削型	487
56		刻畫	土器器身	全体	外	正位	RA064	□(ワリ)・浪流壓刻声	91
57	第13・14次	刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RA127	壓痕あり (破片)	67
58		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位	RA132	壓痕あり (破片)	203
59		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外	正位?		壓痕あり (破片)	116
60		刻畫	土器器身 (内裏)	全体	外		RA134	「」	144

NO	発生次数	種別	器種	部位	面	方向	出土場所	鉢文・その他の記載事項	該当箇所
61		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA141	縦痕あり 記号「キ」	205
62		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外			生痕あり (破片)	209
63		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RA146	「—」 生痕あり	204
64		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?		「ト」	258
65		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RA148	「子」	259
66		壺	土師器耳	体部	外	正位?		雲痕あり (破片)	263
67		壺	土師器耳	体部	外	正位?		「ト」	260
68		壺	土師器耳	体部	外	正位?		「子」	261
69	第13・14次	壺	土師器耳	体部	外	正位?		雲痕あり 灰斑?	262
70		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RD290	縦痕あり	216
71		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA177	「七」? 鉢側	344
72		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA127	周縫あり	60
73		壺	土師器耳	体部	外			周縫あり	68
74		壺	土師器耳	体部	外			周縫あり	135
75		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA132	周縫あり	147
76		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外			周縫あり	137
77		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA141	「ト方」	208
78		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA137	周縫あり	168
79		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA145	記号「」	216
80		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RD507	「二万」	340
81		壺	土師器耳	体部	外		RA067		4
82		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA153		14
83		壺	土師器耳	体部	外		RA155		50
84		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA156		35
85	第15次	壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?		「太」	71
86		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RA157	「太」	71
87		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?		「田」?	81
88		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外				99
89		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RD349		107
90		壺	土師器耳	体部	外				118
91		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RD553	「田」?	121
92		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA121	「木」	5
93		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA146	縦痕あり (破片)	97
94		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA165*	雲痕あり (破片)	58
95		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA165*	「秀」?	76
96		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA165	周縫あり	80
97		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	横位	RA166	「秀」?	94
98		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA168	雲痕あり	120
99		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA172	周縫あり	140
100		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		KU100	雲痕あり (破片)	157
101	第16・17次	壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RD404	雲痕あり (破片)	160
102		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RD419	雲痕あり (破片)	173
103		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RD420	雲痕あり	180
104		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RD422	雲痕あり (破片)	218
105		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA167	雲痕あり (破片)	219
106		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA121	周縫あり	3
107		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA164	周縫あり (破片)	74
108		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RA165	周縫あり (破片)	220
109		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA166	周縫あり	119
110		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA168	周縫あり	121
111		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA169	周縫あり	122
112		壺	土師器耳	体部	外		RA173	「ト」? 周縫あり	1
113		壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外	正位?	RA175	「竹」?	17
114	第19・20次 (本稿未表)	壺	土師器耳 (内蓋)	体部	外		RA176	周縫あり	39
115		壺	土師器耳	体部	外		RA177	「ト」? と刻文	46
116		壺	土師器耳	体部	外		RA178	「ト」に墨点がついている	50
117		壺	土師器耳	体部	外		廣橋昇	「ト」に墨点がついている	90

細谷地遺跡第4次、第5次調査

2002 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集

細谷地遺跡第8次調査 2004 同第454集

細谷地遺跡第9次、第10次調査 2007 同第500集

細谷地遺跡第13次、第14次調査 2008 同第513集

細谷地遺跡第15次調査 2008 同第514集

細谷地遺跡第16次、第17次調査 2009 同第535集

Ⅶ 分析

火山灰分析

株式会社古環境研究所

1 はじめに

東北地方北部岩手県域には、近辺に位置する岩手、秋田駒ヶ岳、十和田、焼石、栗駒のほか、洞爺、阿蘇、姶良など北海道や九州など遠方の火山由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようにになっている。

そこで、発掘調査の際にテフラの可能性が高い土層が認められた細谷地遺跡第19次調査区においても、発掘調査担当者により採取された試料（1号試験状遺構・試料C）を対象に、火山ガラス比分析と火山ガラスの屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定を行った。

2 火山ガラス比分析

（1）分析方法

火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料17gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4~1/8mmおよび1/8~1/16mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で1/4~1/8mmサイズ250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表1に示す。試料Cの試料22には、23.6%の火山ガラスが含まれている。その内訳は、比率が高い順に纖維束状に発泡した軽石型ガラス（17.2%）、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（4.4%）、無色透明のバブル型ガラス（1.2%）、分厚い中間型ガラス（0.8%）である。

3 屈折率測定

（1）測定方法

1号試験状遺構の試料Cに含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により、屈折率（ γ ）の測定を行った。

（2）測定結果

測定結果を表2に示す。火山ガラス32粒子の屈折率（n）は、1.4499-1.508である。

4 考 察

試料Cに比較的多く含まれる火山ガラスについては、火山ガラスの色調や形態さらに屈折率などから、915年に十和田火山から噴出した十和田aテフラ (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 1992, 2003など) に由来する可能性が非常に高いと考えられる。なお、精度の高いテフラ同定のためには、一次堆積層か否かなどを含めた現地での詳細な層相観察を実施する必要がある。

5 ま と め

細谷地遺跡第19次・第20次調査区において検出された1号戸間状遺構で採取された試料Cを対象に、火山ガラス比分析と火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、十和田aテフラ (To-a, 915年) に由来する可能性が非常に高いテフラ粒子が含まれていることが明らかになった。

文献

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11, p.232-233.

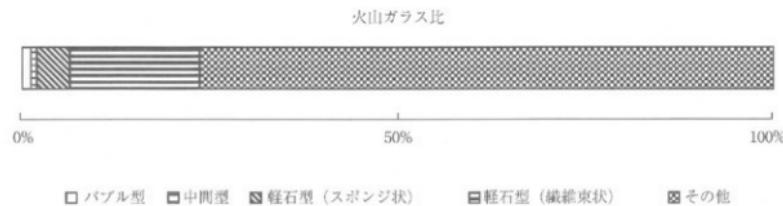


図1 細谷地遺跡テフラ試料の火山ガラス比ダイアグラム

表1 火山ガラス比分析結果

地点名	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
1号戻間状遺構	C	3	0	0	2	11	43	191	250

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数.

表2 細谷地遺跡第19次・第20次調査試料と代表的な指標テフラの屈折率

地点名	試料・テフラ	火山ガラス (n)
		屈折率 (測定点数)
1号戻間状遺構		1.499-1.508 (32)
指標テフラ	十和田a (To-a, AD915)	1.500-1.508*1
	十和田中源 (To-Cu, 5.5kyBP)	1.508-1.512
	鬼界アカホヤ (K-Ah, 7.3kyBP)	1.508-1.516
	十和田八戸 (To-H, 12-13kyBP)	1.505-1.509
	始良Tn (AT, 26-29kyBP)	1.498-1.501

*1: 屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）による。

指標テフラの屈折率は、町山・新井（2003）による。*1: 岩手・秋田地域での値。

自然科学分析

株式会社古環境研究所

プラント・オパール（植物珪酸体）分析

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水山跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2 試 料

分析試料は、1号戻間状遺構および2号戻間状遺構から採取された計12点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3 分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピース法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（純乾）
- 2) 試料約1gに対し直徑約40μmのガラスピースを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4 分 析 結 果

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Bタイプ、Cタイプ

〔イネ科－タケ亜科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

5 考 察

（1）稻作跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、畑稻作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休耕期間をおく必要があることから、イネの密度は水田よりもかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い。（杉山、2000）。

1号歓間状遺構

歓部や歓間から採取された6試料について分析を行った。その結果、試料A'（歓間-下）を除く5試料からイネが検出された。密度は600～2,100個/gと比較的低い値であるが、陸稲栽培である場合は標準的な値といえる。また、試料A（歓間-上）と試料F（歓間-上）は直上に白色火山灰が堆積していることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同遺構では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2号歓間状遺構

歓部や歓間から採取された6試料について分析を行った。その結果、試料J'（歓部-下）を除く5試料からイネが検出された。密度は600～2,200個/gと比較的低い値であるが、陸稲栽培である場合は標準的な値といえる。また、試料I（歓間-上）は直上に白色火山灰が堆積していることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同遺構では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、1号歓間状遺構の試料F（歓間-上）を除く計11試料から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか、1988）。また、密度も600～1,400個/gと比較的低い値であるこ

エが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野草・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、キビ族型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、プラント・オバール分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) プラント・オバール分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、2号歓問状遺構ではおむねヨシ属が優勢であり、1号歓問状遺構でも部分的にヨシ属が優勢となっている。

以上の結果から、歓問状遺構の土壤の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、キビ族、ササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。

6 まとめ

歓問状遺構から採取された試料についてプラント・オバール分析を行った。その結果、ほとんどの試料からイネが検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、ほとんどの試料からヒエ属型が検出され、ヒエが栽培されていた可能性も認められた。

同遺構の土壤の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、キビ族、ササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。

文献

- 杉山真二・松田隆一・藤原宏志（1988）機動細胞壁酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕遺究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 杉山真二（2000）植物壁酸体（プラント・オバール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(1) 数種イネ科植物の壁酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オバール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 細谷地道路における植物種類別分析結果

分類群	学名	地点・材料			1号試験用過濾			2号試験用過濾			J
		A	A'	B	D	F	H	H'	I	I'	
イネ科	Gramineae										
イネ	Oryza sativa	21	7	7	6	7	6	7	7	14	22
ヒエ属型	Echinocloa type	7	7	7	7	7	12	14	7	7	7
キビ属型	Panicete type	14	13	13	6	7	58	43	34	14	21
ヨシ属	Phragmites	7	20	13	38	7	7	24	28	22	49
シバ属	Zyosia										
ススキ属型	Miscanthus type	34	20	20	32	28	7	37	7	22	21
ウシクササ族A	Andropogoneae A type	14	20	33	37	21	29	61	28	29	21
ウシクササ族B	Andropogoneae B type										
Bタイプ	B type	7	7	6	7	7	7	7	7	21	7
Cタイプ	C type										
タケ科	Bambusoideae										
チマキササ属型	Sasa sect. Sasa etc.		7								
ミヤコササ属型	Sasa sect. Crassinodi	14	13	13	6	21	14	12	7	7	7
マダケ属型	Phyllostachys										
未分類等	Others	7	13	20	13	7	7	14	12	7	7
その他のイネ科	Others										
壳皮毛起源	Husk hair origin	48	27	53	57	21	65	55	14	22	21
伴生種類	Rod-shaped	131	168	113	140	125	194	195	179	116	113
未分類等	Others	172	162	245	261	208	281	280	221	195	282
シダ類	Fern										
樹木起源	Arboresc.										
その他	Others		7	7	13	22	24	7	7	15	7
植物種類別総数	Total	475	492	549	643	464	727	762	566	456	591
3種22分類群の算定牛乳量(単位: kg/m ³) : 試料の質量を1.0と仮定して算出											
イネ	Oryza sativa	0.61	0.19	0.19	0.20	0.42	0.18	0.20	0.21	0.41	0.64
ヒエ属型	Echinocloa type	0.58	0.57	0.56	0.53	0.60	1.02	1.16	0.61	0.59	0.61
ヨシ属	Phragmites	0.43	1.28	0.84	2.41	0.44	0.45	1.54	1.74	1.37	3.11
ススキ属型	Miscanthus type	0.43	0.25	0.25	0.39	0.24	0.09	0.35	0.09	0.27	0.26
チマキササ属型	Sasa sect. Sasa etc.										
ミヤコササ属型	Sasa sect. Crassinodi	0.04	0.04	0.04	0.02	0.06	0.04	0.04	0.02	0.02	0.02

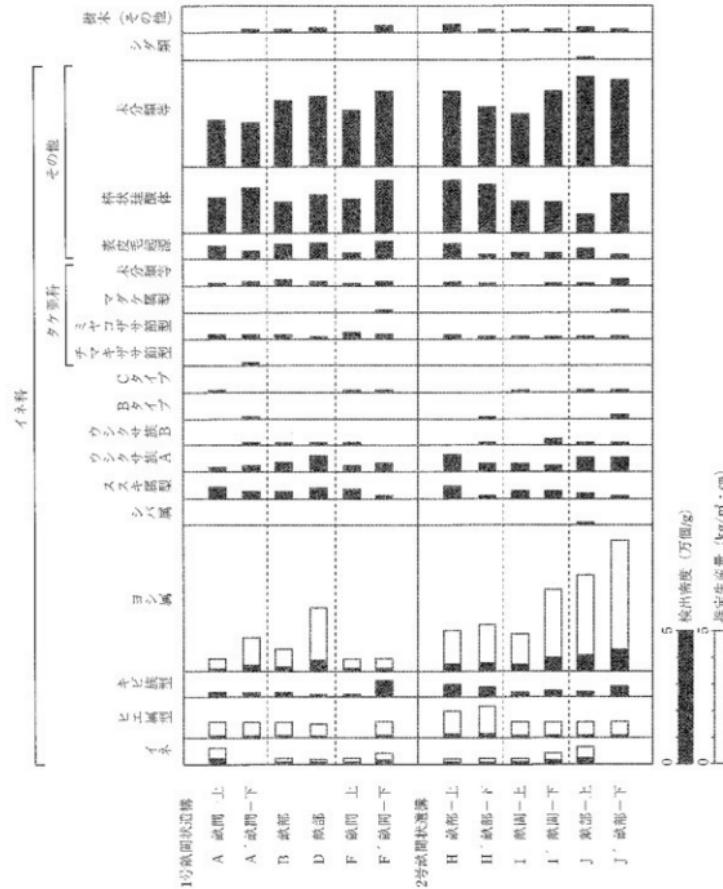


図1 細谷地塊跡における植物生體分析結果

花粉分析

1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試 料

分析試料は、古代の1号竪間状遺構から採取された試料E（歛）、試料F（歛間）の2点、古代の2号竪間状遺構から採取された試料G（歛間）、試料H（歛）の2点の計4点である。

3 方 法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm^3 を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で塵などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属とすると。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4 結 果

（1）分 類 群

出現した分類群は、樹木花粉12、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉11、シダ植物胞子2形態の計26である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雜管束亞属、スギ、ハンノキ属、クリ、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属亞科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、セリ亞科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) 1号歎間状遺構 (古代: 試料E (歎)、試料F (歎間)) - 図1

・試料E (歎) では樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約70%を占め、花粉密度は低い。草本花粉ではヨモギ属が卓越し、次いでイネ科が多く、セリ亞科、カラマツソウ属、キク亞科が低率に出現する。樹木花粉ではハンノキ属を主に、コナラ属コナラ亞属、ツガ属、モミ属などが出現する。

・試料F (歎間) では試料E (歎) より花粉密度が低く、草本花粉が約85%を占める。草本花粉では特にヨモギ属が優占し、次いでイネ科 (イネ属亞科を含む) が多く、キク亞科、アカザ科-ヒユ科が低率に出現する。樹木花粉ではハンノキ属が出現する。

2) 2号歎間状遺構 (古代: 試料G (歎間)、試料H (歎)) - 図1

・試料G (歎間) では、草本花粉が約75%を占め、花粉密度は低い。草本花粉ではヨモギ属が卓越し、イネ科、キク亞科、タンボボ亞科などが出現する。樹木花粉ではハンノキ属、コナラ属コナラ亞属、ツガ属、ニレ属-ケヤキなどが出現する。

・試料H (歎) では草本花粉が約80%を占め花粉密度は低い。草本花粉では特にヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ科 (イネ属亞科を含む) が多く集塊も認められる。キク亞科、タンボボ亞科が低率に出現する。樹木花粉ではハンノキ属、スギなどが出現する。

5 花粉分析から推定される植生と環境

1) 1号歎間状遺構 (古代: 試料E (歎)、試料F (歎間)) - 図1

・試料E (歎)、試料F (歎間) ともに乾燥を好むヨモギ属が卓越し、他に出現する草本も人里植物ないし耕地雑草であり、堆積地は乾燥した堆積環境であったと考えられる。歎間からわずかにイネ属型が出現するが、水田雑草などは伴われないことから水田の分布を小窓するには至らない。遺構の状況やプラント・オパール分析の結果から鑑みて、陸稲栽培が行われていた可能性を考えられる。また、イネ科にはヒエ、アワ、ムギなどの雑穀が含まれるが、花粉形態ではこれらを鑑別出来ないため栽培植物を特定することはできない。プラント・オパール分析でヒエ属型が検出されていることから、ヒエが栽培されていた可能性も否定できない。

周辺には湿地林ないし河辺林を形成するハンノキが生育していたと思われるが、ハンノキはしばし

ば端境林として利用されることもある。近隣にはコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹も生育し、やや遠方にはツガ属、モミ属などの針葉樹が生育していたと考えられる。

2) 2号歓間状遺構（古代：試料G（歓間）、試料H（歓））・図1

・試料G（歓間）、試料H（歓）においても1号歓間状遺構とほぼ同様な結果が得られ、堆積地は乾燥したヨモギ属を主とするイネ科、キク亜科、タンボボ亜科など繁茂する草地の環境が考えられる。近隣には、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキなどの落葉広葉樹と、ツガ属、スギなどの針葉樹が生育していたと思われる。

6 まとめ

1号歓間状遺構と2号歓間状遺構において花粉分析を行った結果、調査地はヨモギ属を主とするイネ科、キク亜科、タンボボ亜科などの繁茂する乾燥した草地の環境が推定された。わずかにイネ属型が出現し、陸船栽培が行われていた可能性が示唆された。イネ科にはヒエ、アワ、ムギなどの雑穀が含まれることから、それらを作物とする畑作の可能性も考えられた。近隣には、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキなどの落葉広葉樹と、ツガ属、スギなどの針葉樹が生育していた。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集。60p.
中村純（1967）花粉分析。古今書院。p.82-110。
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究。13.p.187-193。
中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30。
中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p.

表1 細谷地遺跡第19次・第20次調査における花粉分析結果

学名	分類群 和名	1号試験状遺構		2号試験状遺構	
		E(試) F(試間)	G(試間) H(試)		
Arboreal pollen	樹木花粉				
Abies	モミ属	3			1
Tsuga	ツガ属	4		2	2
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複総管束軸属	2	1	1	
Cryptomeria japonica	スギ	2			3
Alnus	ハンノキ属	36	7	11	20
Castanea crenata	クリ	3			
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	7	1	4	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカシヤ属			1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属・ケヤキ		1	2	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属・ムクノキ	1	1		1
Acer	カエデ属	1			
Aesculus turbinata	トチノキ	3		1	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イラクサ科				3
Nonarboreal pollen	草木花粉				
Gramineae	イネ科	31	15	13	49*
Oryza type	イネ属型		1		1
Cyperaceae	カヤツリグサ科			2	2
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1		
Chenopodiaceae/Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科		2		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科				1
Thalictrum	カラマツソウ属	5			2
Apioidae	セリ亞科	7	1		
Lactucoidae	タンポポ科	1	1	5	4
Asteroidae	キク科	4	3	7	5
Artemisia	ヨモギ属	128	76	65	114
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	單球胞子	5	2	2	5
Trilate type spore	三葉胞子	5	3	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉	62	11	22	29
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	0	0	0	3
Nonarboreal pollen	草木花粉	176	100	92	179
Total pollen	花粉総数	238	111	114	211
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度	2.5 × 10 ⁶	9.5 × 10 ⁶	9.8 × 10 ⁶	2.1 × 10 ⁶
Unknown pollen	未同定花粉	9	2	1	10
Fern spore	シダ植物胞子	10	5	5	9
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)

*:集塊

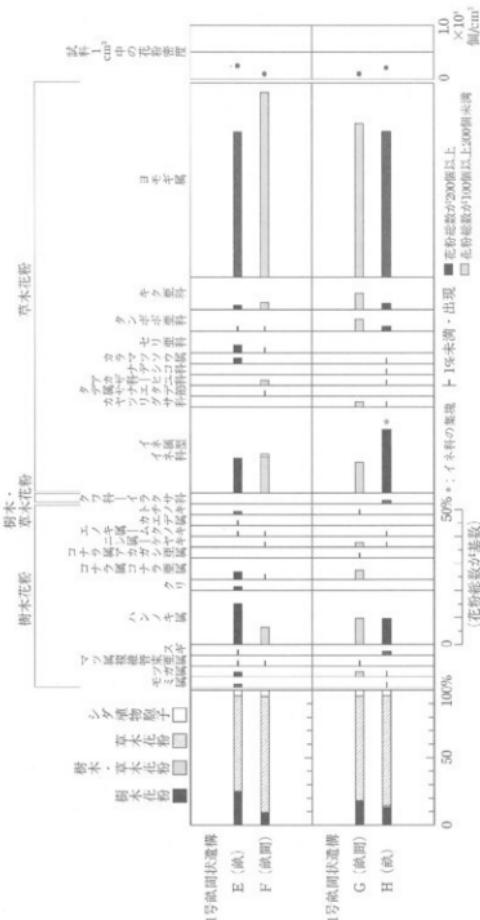
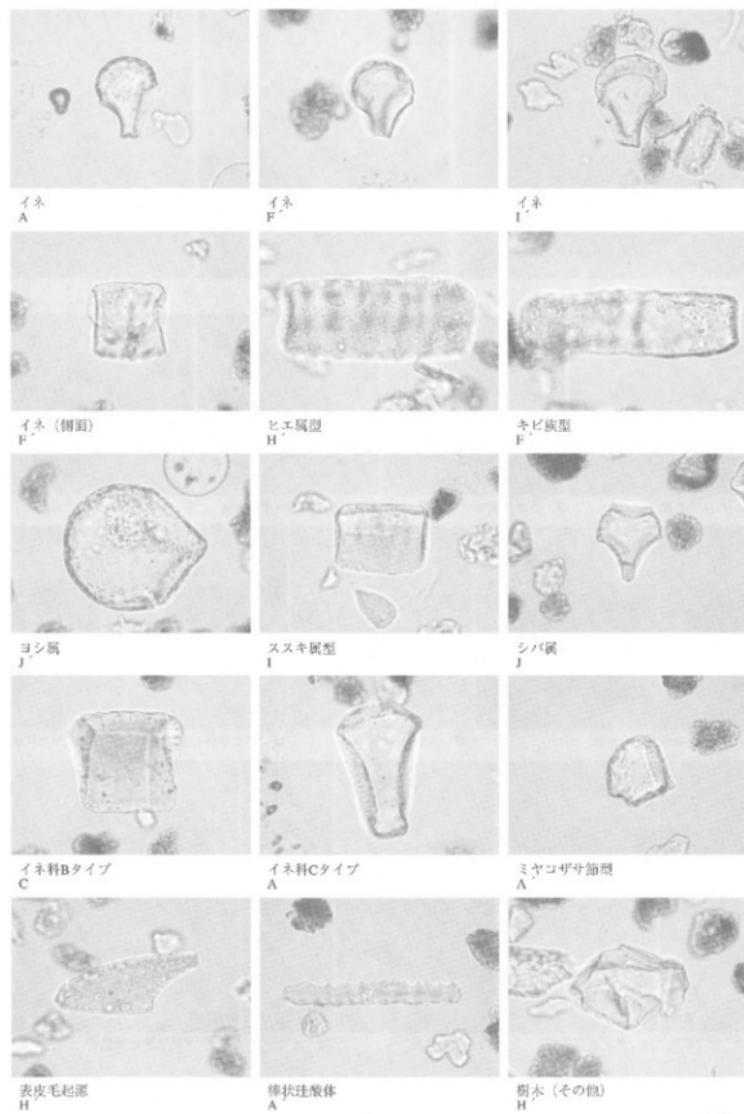


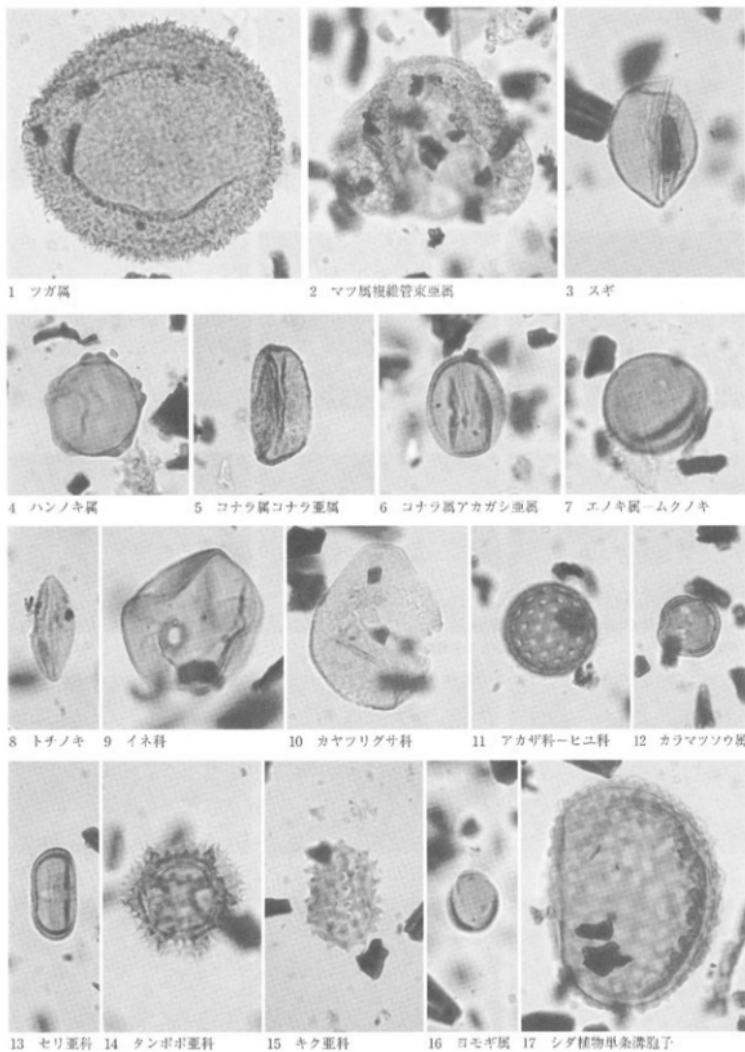
図1 緑谷地遺跡第19次・第20次調査における花粉ダイアグラム

細谷地植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



— 50 μm —

細谷地遺跡の花粉・胞子



—— 10 μm

写 真 図 版



遠跡遠景（南から）



調査区直上（左：細谷地遠跡、右：向中野館遠跡、右が北）

写真図版1 航空写真（1）



調査区直上（右が北）



調査前風景



旧沢跡断面①

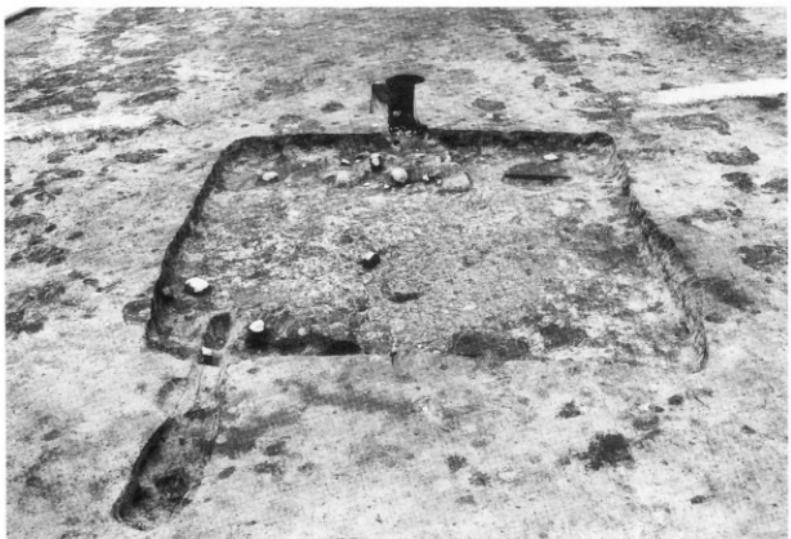


旧沢跡断面②

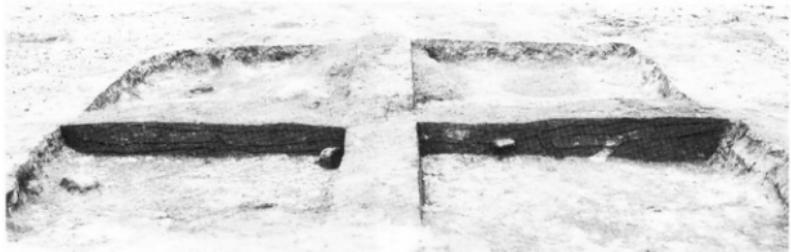


調査風景

写真図版2 航空写真（2）、調査前風景、旧沢跡、調査風景



全景（南から）



断面（南から）

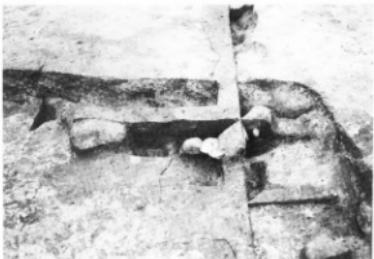


断面（東から）

写真図版3 RA173竪穴住居跡（1）



カマド1全景



カマド1断面（北から）



カマド1断面（西から）



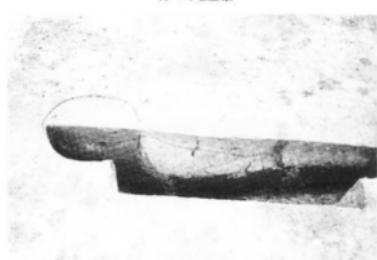
カマド1煙道・煙り出し断面（西から）



カマド2全景



カマド2断面（南から）

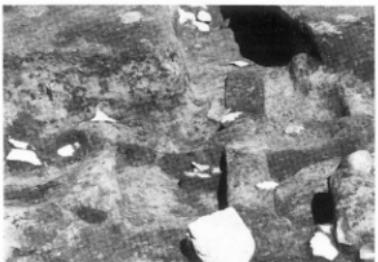


カマド2煙道・煙り出し断面（西から）

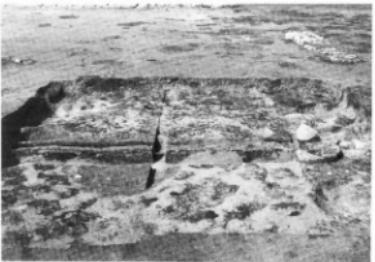


カマド2断面（西から）

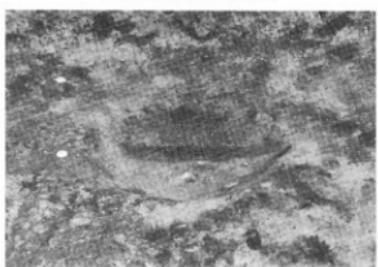
写真図版4 RA173竪穴住居跡（2）



カマド2燃焼部断面（南から）



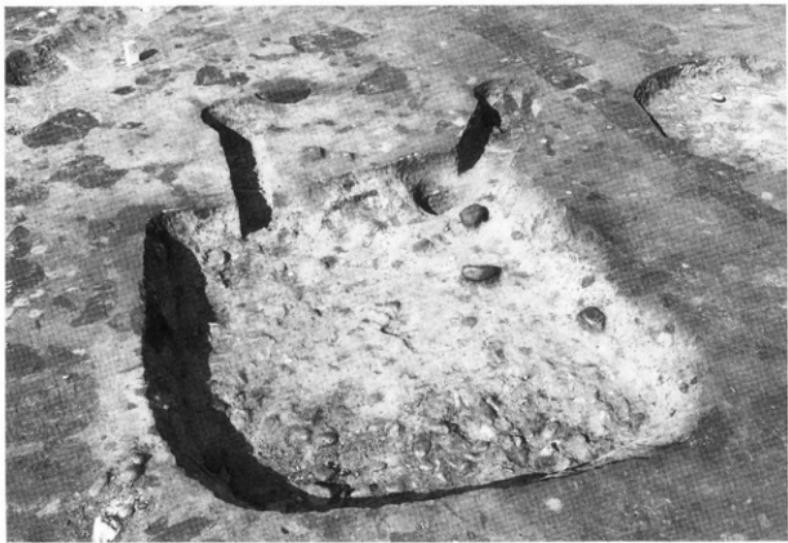
貼り床断面（東から）



RA173内PP1断面

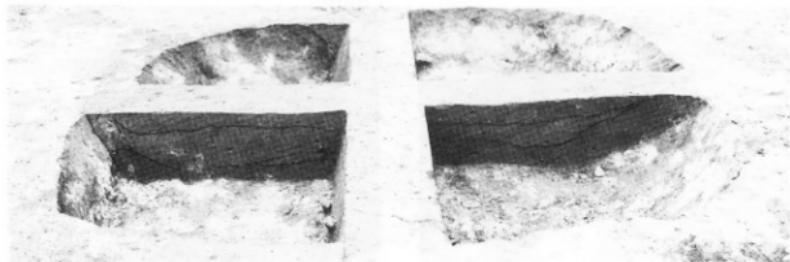


RA173内PP2断面

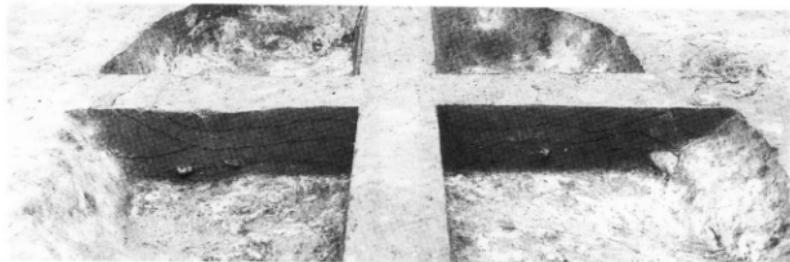


RA174竪穴住居跡全景

写真図版5 RA173竪穴住居跡（3）、RA174竪穴住居跡（1）



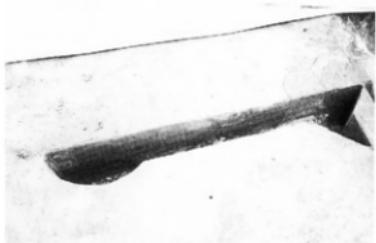
断面（西から）



断面（南から）



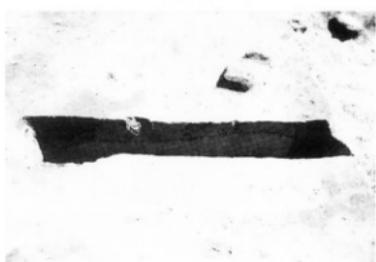
カマド1全景



カマド1断面（西から）



カマド1断面（南西から）



カマド2断面（西から）

写真図版6 RA174竪穴住居跡（2）



RA174竪穴住居跡遺物出土状況



調査区東側倒木痕等搅乱状況



RA175竪穴住居跡全景



遺物出土状況（1）



遺物出土状況（2）

写真図版7 RA174竪穴住居跡（3）、RA175竪穴住居跡（1）



断面（西から）



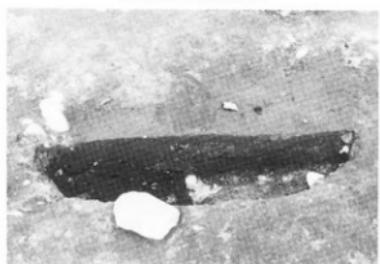
断面（南から）



貼り床断面（北西から）



旧貼り床検出状況（南から）



PP1断面（南から）

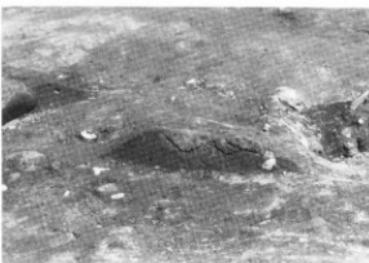


PP2断面（南西から）

写真図版8 RA175竪穴住居跡（2）



焼土1断面（南から）



焼土2断面（南から）



焼土3断面（南から）



北側燃焼部断面（北西から）



北側燃焼部断面（南西から）



カマド燃焼部断面（北から）



カマド燃焼部断面（東から）

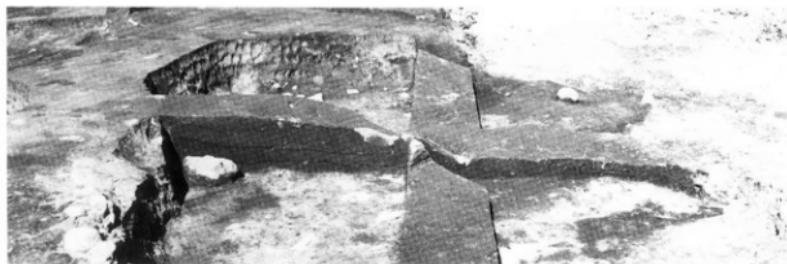


カマド煙道部（南東から）

写真図版9 RA175竪穴住居跡（3）



全景（南東から）



断面（南西から）



断面（北西から）

写真図版10 RA176竪穴住居跡（1）



RA176竪穴住居跡カマド断面（北西から）



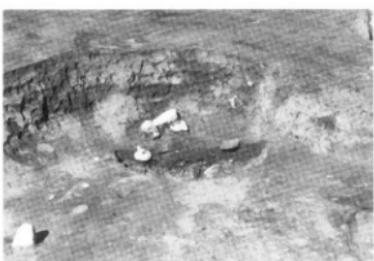
同カマド断面（南から）



同PP1断面（北西から）



同PP2断面（北西から）



同PP3断面（南から）



RA177竪穴住居跡・張り出しピット（西から）



同カマド全景（西から）



同カマド煙道部断面（南から）

写真図版11 RA176竪穴住居跡（2）、RA177竪穴住居跡（1）



全景（西から）



断面（西から）



断面（南から）

写真図版12 RA177竪穴住居跡（2）



全景



断面（南から）



断面（西から）



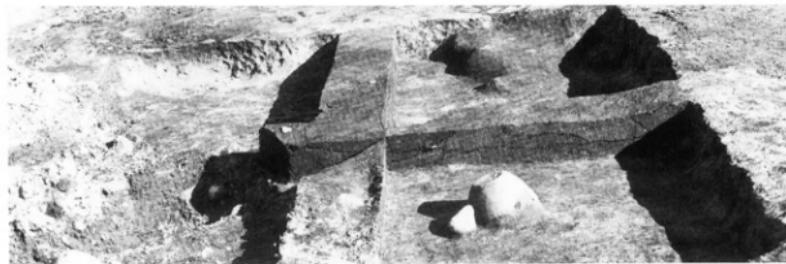
RA178竪穴住居跡カマド全景（北から）



同カマド煙道部断面（西から）



RA179竪穴住居跡全景（西から）

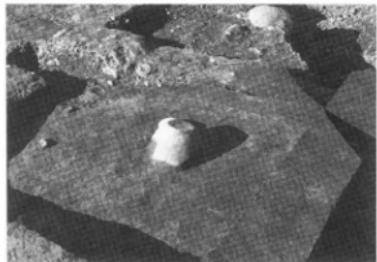


同断面（西から）

写真図版14 RA178竪穴住居跡（2）、RA179竪穴住居跡（1）



RA179竪穴住居跡断面（南から）



同遺物出土状況



同遺構内出土焼土（南から）

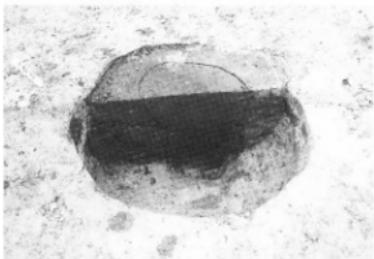


RB023掘立柱建物跡（奥）・RB024掘立柱建物跡（手前）全景（南から）

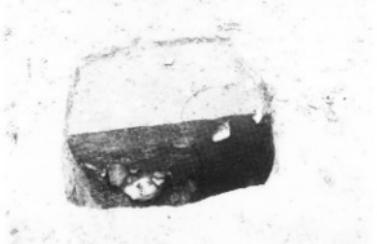
写真図版15 RA179竪穴住居跡（2）、掘立柱建物跡（1）



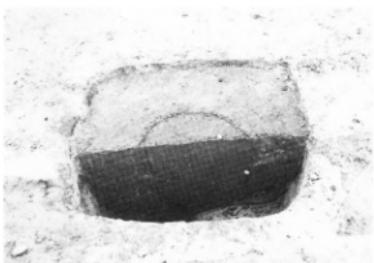
RB023掘立柱建物跡PP1（南から）



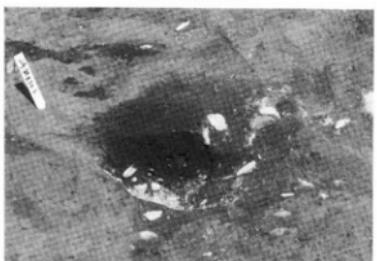
同PP2（南から）



同PP3（南から）



同PP4（南から）



RB024掘立柱建物跡PP6（南から）



同PP7（南から）



同PP8（南から）



同PP9（南から）

写真図版16 掘立柱建物跡（2）



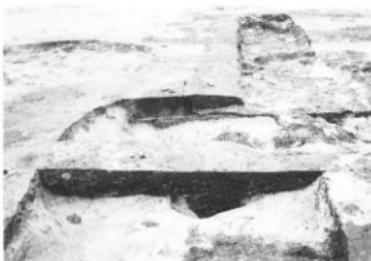
RD431・432・438・443土坑全景（南から）



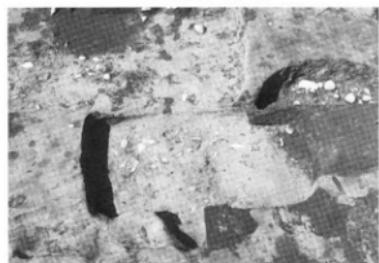
RD431・432土坑断面（南から）



RD438土坑断面（西から）



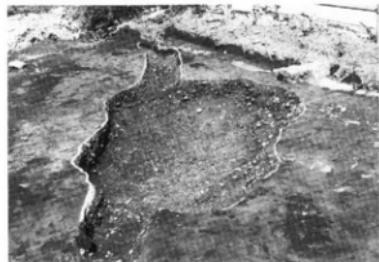
RD443土坑断面（西から）



RD433土坑（東から）



RD433土坑断面（南から）

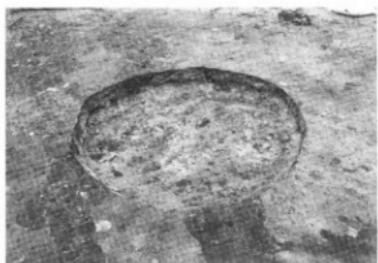


RD434土坑（南から）



RD434土坑断面（北西から）

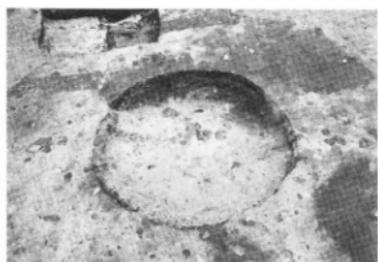
写真図版17 RD431～434・438・443土坑



RD435土坑（南から）



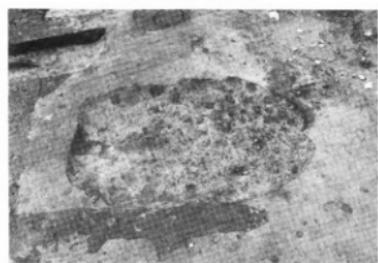
同断面（南から）



RD436土坑（西から）



同断面（南から）



RD437土坑（東から）



同断面（南から）

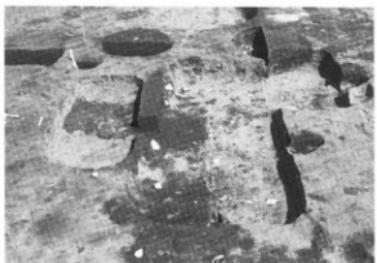


RD439土坑（北西から）



同断面（南西から）

写真図版18 RD435~437・439土坑



RD440土坑（南から）



同断面（東から）



RD441土坑（南から）



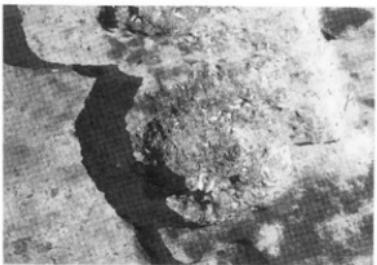
同断面（南から）



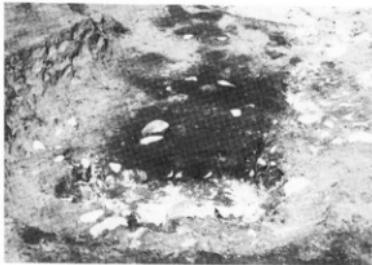
RD442土坑（東から）



同断面（西から）



RD444土坑（南から）



同断面（南から）

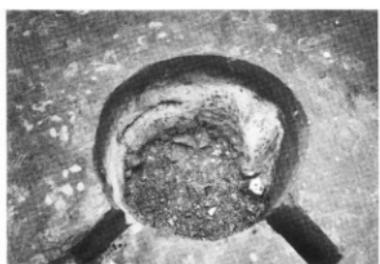
写真図版19 RD440～442・444土坑



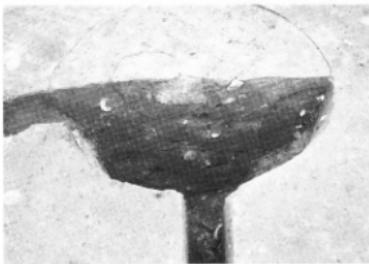
RD445土坑（南から）



同断面（南から）



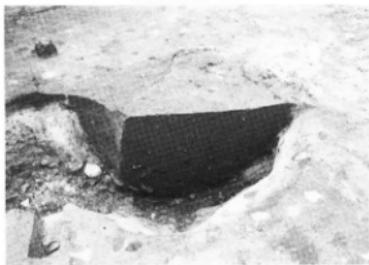
RD446土坑（西南から）



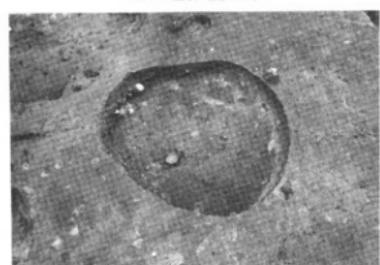
同断面（南から）



RD447土坑（南から）



同断面（西から）

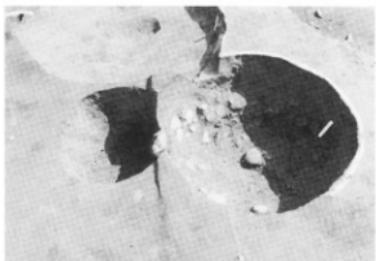


RD449土坑（南から）



同断面（南から）

写真図版20 RD445~447・449土坑



RD450土坑（西から）



同断面（南から）



RD451土坑（西から）



同断面（西から）



RD453土坑（西から）



同断面（西から）

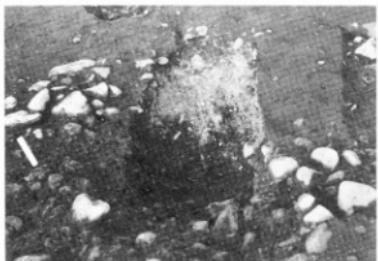


RD455土坑（北東から）



同断面（北東から）

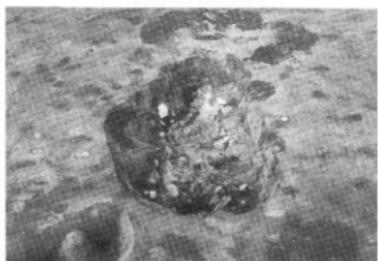
写真図版21 RD450・451・453・455土坑



RD456土坑（南西から）



同断面（南西から）



RD454土坑（南西から）



RD457土坑（北から）



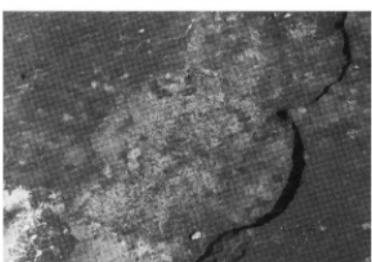
RD448土坑（北西から）



同断面（北西から）



同断面（南西から）

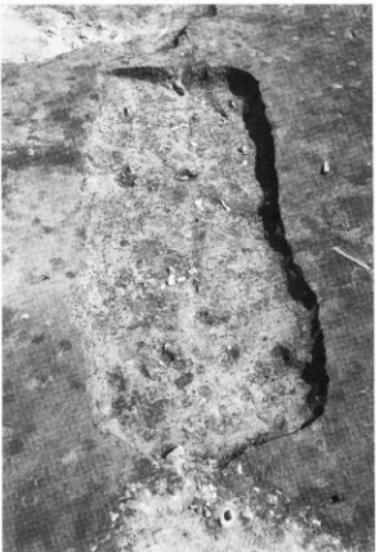


RD460土坑（西から）

写真図版22 RD448・454・456・457・460土坑



RD458（奥）・RD460（中央）・RD459（手前）（西から）



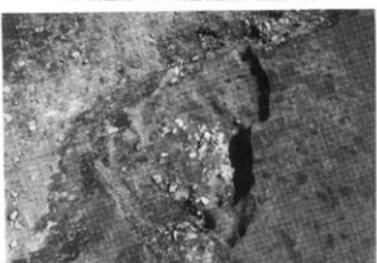
RD461土坑（西から）



RD458土坑～RD460土坑断面（南西から）



RD461土坑断面（南から）



RD462（手前）・RD464（中央）・RD463（奥）（西から）



RD462土坑～RD464土坑断面（南から）

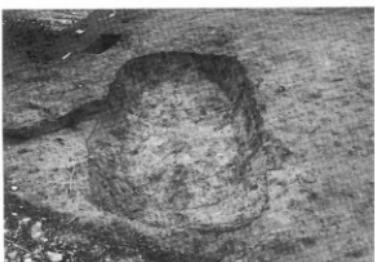
写真図版23 RD458～464土坑



RD465土坑（南から）



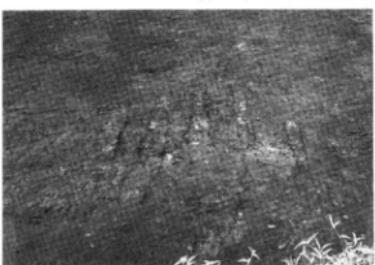
同断面（南から）



RD466土坑（東から）



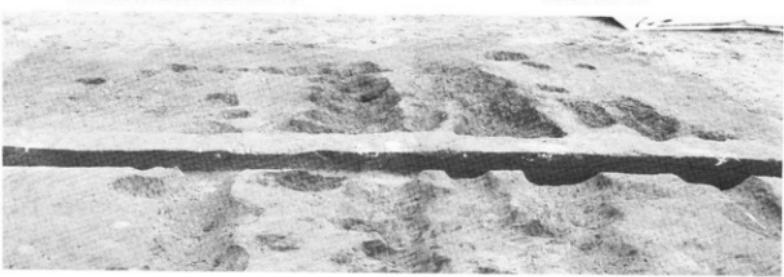
同断面（東から）



RZ016歫間状遺構検出状況（東から）



同完描（東から）

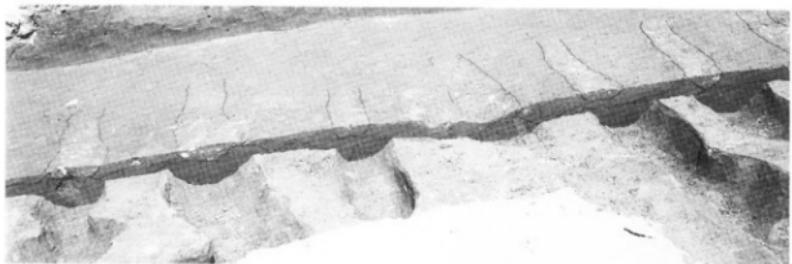


同断面（西から）

写真図版24 RD465・466土坑、RZ016歫間状遺構



RZ017歓間状造構完掘（北から）



同断面（南から）



同検出状況（北西から）



RZ018歓間状造構完掘（西から）

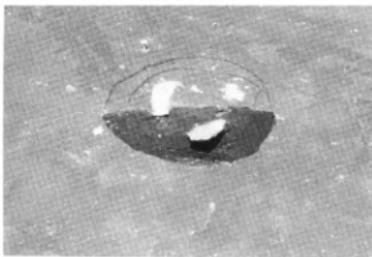
写真図版25 RZ017・018歓間状造構



RG080溝跡（南から）



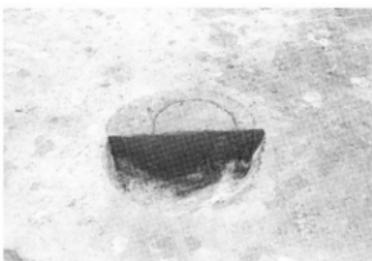
RG080溝跡断面（南東から）



P1断面（南から）



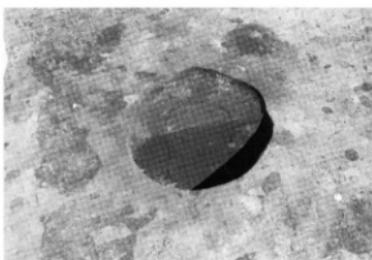
P7（南から）



P8断面（南から）



P9（南から）



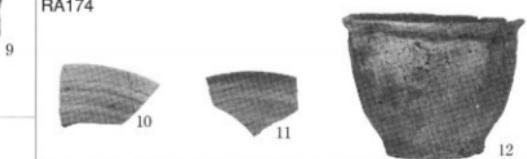
P11断面（南から）

写真図版26 RG080溝跡、P1・7~9・11

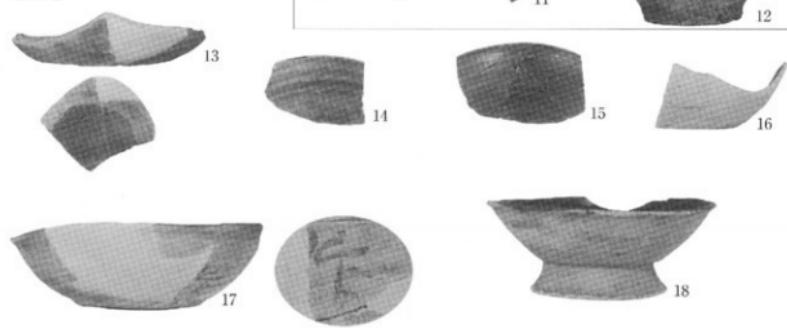
RA173



RA174

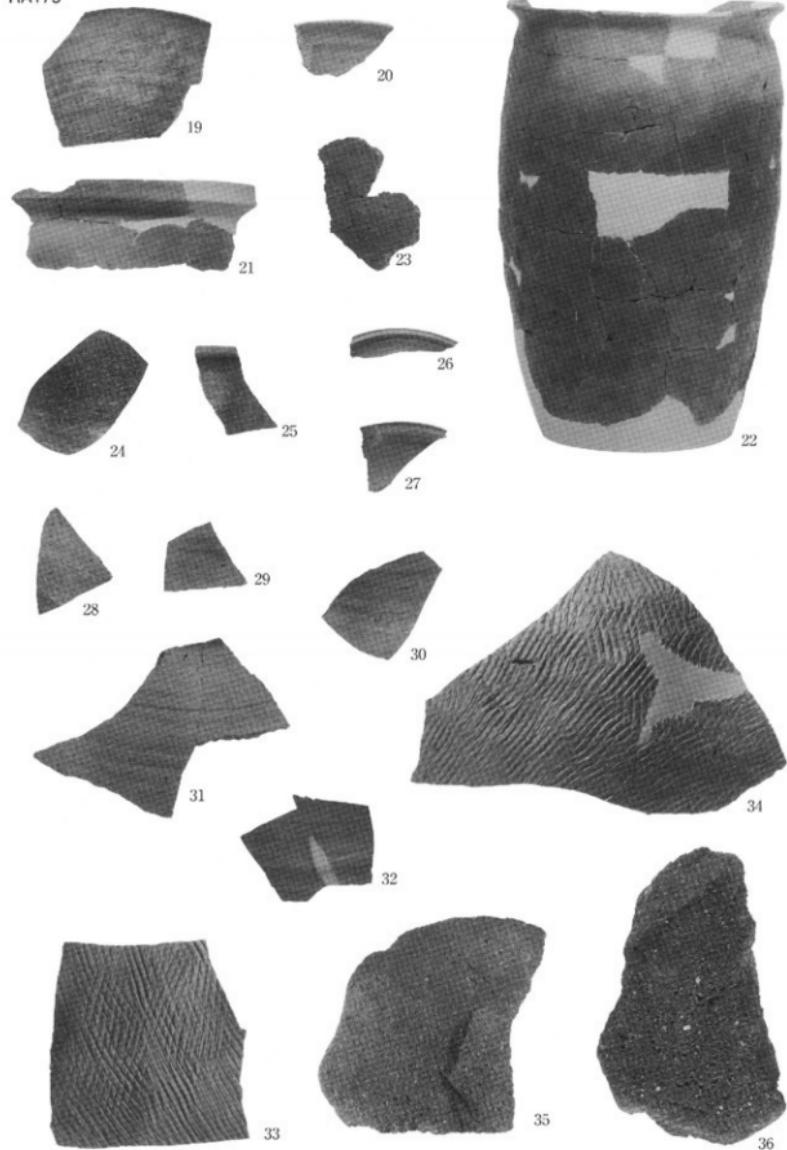


RA175



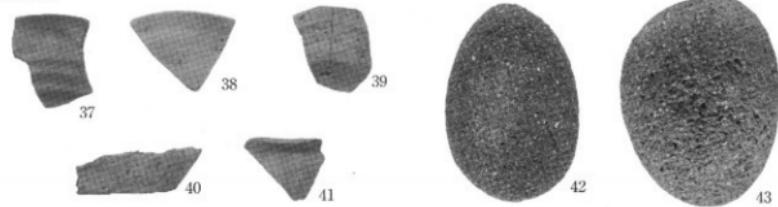
写真図版27 遺構内出土遺物（1）

RA175

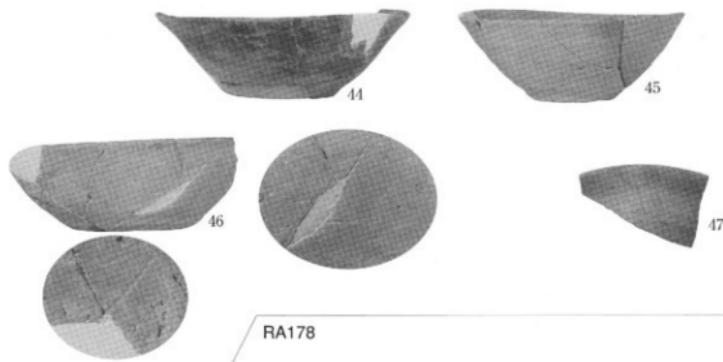


写真図版28 遺構内出土遺物（2）

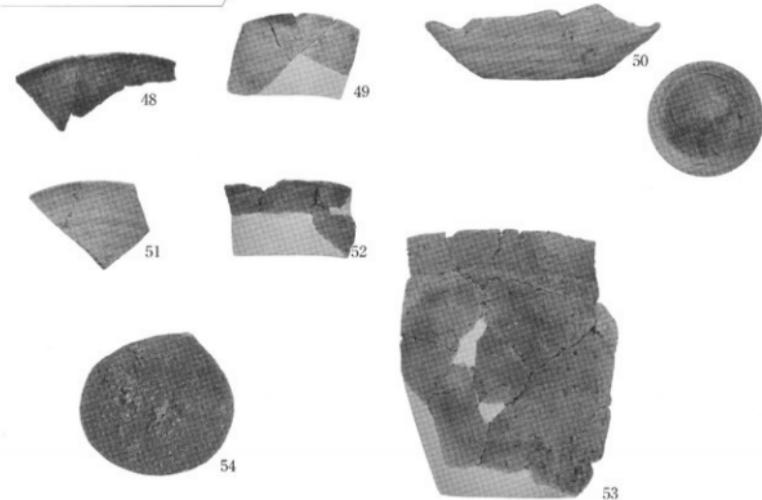
RA176



RA177

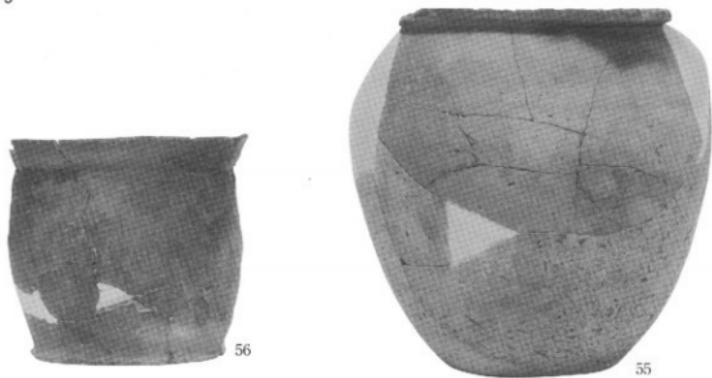


RA178



写真図版29 遺構内出土遺物（3）

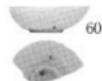
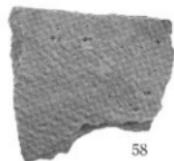
RA179



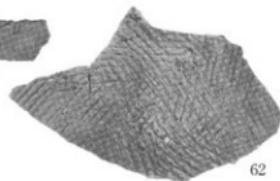
RD433



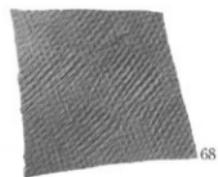
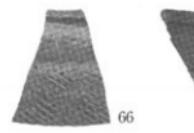
RD434



RD436

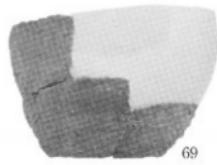


RD439



写真図版30 遺構内出土遺物（4）

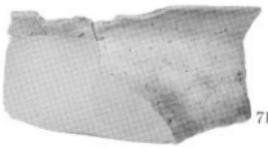
RD440 (441)



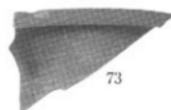
RD441



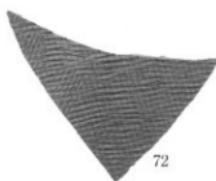
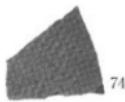
RD442



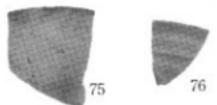
RD443



RD447



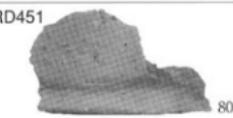
RD448



RD449



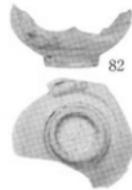
RD451



RD456



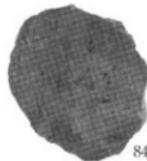
RG080



P1



P7



P9



P11



P12



P19



P25



写真図版31 遺構内出土遺物（5）



写真図版32 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほそやちいせきだいじゅうく・にじゅうじはくつちょうさほうこくしょ						
書名	細谷地遺跡第19・20次発掘調査報告書						
副書名	盛岡市新都市上地区調整事業関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第556集						
編著者名	木戸口俊子						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下高崎11地割185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	2010年2月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	調査期間	調査面積	調査原因
ほそやちいせき 細谷地遺跡 (第19次)	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 むちいなかのあざのほら 向中野字野原	03201 LE26-0214	39度 40分 37秒	141度 08分 19秒	2008.07.16～ 2008.10.07	1.046m ²	盛岡市新都市 上地区調整 事業
ほそやちいせき 細谷地遺跡 (第20次)	9-6ほか				2008.08.01～ 2008.10.07	856m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
細谷地遺跡 (第19次)	集落跡	平安・ 近世	平安 堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 柱穴状土坑 近世 土坑 時期不明 土坑 酒跡 (古代) 旧沢跡	土器類・須恵器 大コンテナ 墨書き器 刻書き器 磨石・砥石 鐵鏃 近世陶磁器 泥面子	方形の掘り方、同じ縦を 持つ柱の掘立柱建物跡が 2棟並んで検出出した。		
細谷地遺跡 (第20次)		平安	堅穴住居跡 土坑 鶴間状遺構 柱穴状土坑	5棟 8基 3条 20個			
		近世	土坑 時期不明 土坑 焼土 柱穴状土坑 (古代) 旧沢跡	7基 6基 1基 8個 1箇所			
要約	前年度の調査に引き続き、旧沢跡が東西方向にあり、今回はこの山沢跡上面で、就間状遺構が、旧沢跡の下面で堅穴住居跡が検出された。また、調査区中央には堅穴住居跡とともに倉庫と見られる柱の掘立柱建物跡があり、これまでの細谷地遺跡の調査と同様に、平安時代の集落が残がっていることがわかった。						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第556集

細谷地遺跡第19・20次発掘調査報告書

盛岡南新都市上地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年2月5日

発 行 平成22年2月10日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
〒020-8531 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号
電話 (019) 651-4111
(独)都市再生機構岩手都市開発事務所
〒020-0864 岩手県盛岡市西仙北一丁目16番10号
電話 (019) 636-1511
(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号
電話 (019) 654-2235

印 刷 有限会社セイコー印刷
〒020-0877 岩手県盛岡市下の橋町2番地23号
電話 (019) 651-3606

